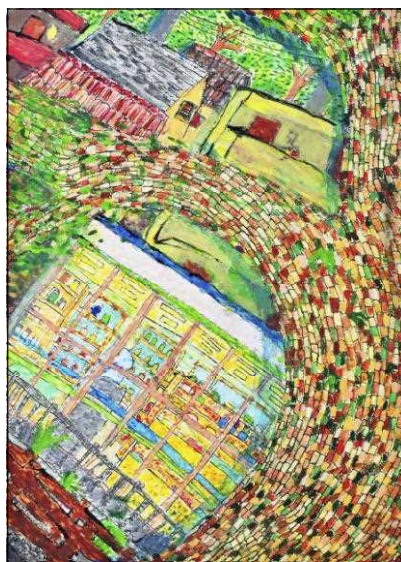


お悩み解決!! 絵に表す活動の指導

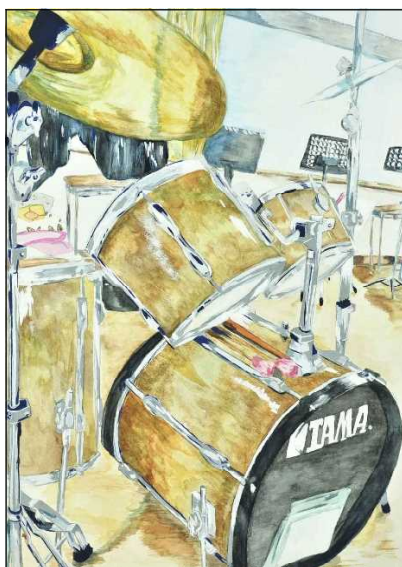
小学校図画工作科を中心に



小学1年「はねがかっこいいじゃく」



小学6年「すき間から」



中学1年「刻む」



4年「つばめの学校」

一
如
教
学

教えることは 学ぶことである
学び続ける教職員に



鹿児島県総合教育センター

～(前略)～ 初めは、身近なものに触れ、その心地よさに浸っているが、次第に地面や身近にある紙などに跡が残せることに気付き、線や形をかいてその形を意味付けする。それはやがて、表現の欲求と結びつき、自分の願いや思いを表すことの楽しさや喜びを味わうようになる ～(中略)～ さらに、自分がつくりだした形や色などから新たなことを思い付いて試したり、自分の思いを絵に表しながら形や色などから新たなことを思い付いてかき加えていったりするなど、つくり、つくりかえ、つくる姿もある。

そこでは、つくりだす喜びを味わうとともに、見たり感じたりする力、次にどのような形や色にするかを考える力、それを実現するために用具や表し方を工夫する力、一度つくったものを改めて見て、新たなものをつくりだそうとする力などが働いている、これは、児童の造形的な資質・能力が自然に発揮されている姿ともいえる。

教科の目標は、このような児童自身に本来備わっている資質・能力を一層伸ばし、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す観点に立っている。

小学校学習指導要領解説【図画工作編】(平成29年) pp.9-10より抜粋

「図画工作が苦手だった。」という理由で、図画工作科を教えることにためらいを感じる必要はありません。先人の言葉を紹介します。

児童を尊重する気持ちがあり
児童に対する理解ある愛情をもち
それがどういうことかがよく分かっている人なら
専門外の先生でも
優秀な美術教師としての本質的な資格が十分ある

マリオン・リチャードソン
(1892～1946)
(20世紀はじめの英国美術教育家)

大切なのは、「表現したい。」という児童の意欲を高め、思いに寄り添いながら共に考え、そして主体的に考えさせることを通して、児童の資質・能力を伸ばすことです。

はじめに

「先生、これでいいですか。」

絵に表す活動の中で、児童から発せられるこの言葉に、次のような違和感を感じたことはありませんか。

「児童は、自分の作品であるにもかかわらず、どうしてその判断を教師に委ねるのだろう。」

また、意欲的に表現に取り組む児童もいる中で、自分の思いを十分に表した充実感がないまま、早々に「もう終わりました。」と、絵に表す活動を終えてしまう児童の姿や、次が絵をかく題材だと知った瞬間に「諦め」、「不快」などが入り交じったなんともいえない表情を見せる児童の姿に、疑問をもったことはありませんか。

「この児童は、絵に表すことについて、どうしてこんなにも意欲を失っているのだろう。」

考え始めると、疑問は限りなく浮かんできます。

「どうやって発想を広げさせるの。」

「意欲がないのは、導入の指導が悪かったかな。」

「どうしてあの作品が選ばれるの。」

「鑑賞ってどうするの。」

「絵って写真を見てかいてもいいの。写していいの。」

「もっと児童生徒の表現力を育成したいのだけど。」



これらの疑問は、各種研修会に参加された多くの先生方から共感をいただけてきました。そして、先生方と一緒に考える中で、更に多くの多岐にわたる疑問が湧き起こりました。その場で解決に至ったものもあれば、「今後、考えていきましょう。」と、先送りにしたものもありました。そしてなによりも研修では時間が足りませんでした。

本資料は、先生方が実際に授業の中で出合う疑問や課題を基にして、絵に表す活動に関する基本的な考え方から、表現方法、用具等の使用に係る具体的な指導について、また、近年課題となっている表現と鑑賞の一体的指導の方向性、そして指導に関する多くの疑問・質問への回答を含めた総合的な資料となるように作成しました。

本資料を、先生方が絵に表す活動の授業をされる際に傍らに置き、指導に生かしていただきましたら幸いです。

本資料の使い方

- 必要な内容にたどり着きやすくするために、内容をページ毎に区切るようにしました。そのため、重要なポイントについては、それぞれのページに繰り返し出てくるように作成しています。
- **〈留意すること欄〉**を設け、指導する上で気を付けることを強調しています。
- **〈Q&Aコーナー〉**は、関係している内容についてのよくある質問と回答を掲載しています。また、巻末の**〈逆引きQ&Aコーナー〉**では、質問から知りたい内容を見付けることもできるようになりました。
- **〈コラム欄〉**には、文章の構成上、本文中で触れることができなかったけれども大切な内容を掲載しています。先生方からの質問が多い内容の中でもより詳しく説明が必要な内容や、図画工作科・美術科教育を語る上で重要な切り口となる内容となっています。ぜひお読みください。

目 次

はじめに

1	「よい作品」とは、どのような作品なのでしょう。	1
2	育成すべき資質・能力（全体）	3
3	育成すべき資質・能力（内容のまとめ「絵や立体に表す」）	4
4	造形的な視点と〔共通事項〕	6
5	絵に表す活動の基本的な過程	7
6	「思い(主題)」をもたせることの重要性	8
7	「思い(主題)」をもたせるポイント（題材設定～導入）〈低学年〉	9
8	「思い(主題)」をもたせるポイント（題材設定～導入）〈中学年〉	10
9	「思い(主題)」をもたせるポイント（題材設定～導入）〈高学年・中学生〉	11
10	発想を広げるポイント	13
11	導入における授業の流れ	15
12	線描の材料と用具	18
13	線描のポイント〈低学年〉	20
14	クレヨン、パスによる表現	21
15	線描のポイント〈中学年〉	23
16	線描のポイント〈高学年・中学生〉	24
17	水彩絵の具による彩色のポイント（基礎編）	28
18	彩色のポイント（各学年）	30
19	モダンテクニック	31
20	彩色のポイント（作品を基に）	33
21	見る視点と教師の言葉掛け	35
22	仕上げるポイント	36
23	失敗を生かすポイント	39
24	鑑賞のポイント	42
25	評価のポイント	46
26	絵に表す活動における学年、内容のまとめごとの評価規準	48
27	授業チェックシート	50
※	逆引きQ&Aコーナー	53

おわりに

※ 参考・引用文献

※ 表紙及び本文中の児童生徒作品は、鹿児島県図画作品展の特別賞受賞作品及び学級での作品です。制作者本人及び保護者の皆様の御厚意により、鹿児島県の美術教育のために使わせていただいております。

目 次

Q & Aコーナー 〈思いをもつ場面〉	16
Q & Aコーナー 〈材料と用具〉	19
Q & Aコーナー 〈線描する場面1〉	22
Q & Aコーナー 〈線描する場面2〉	26
Q & Aコーナー 〈彩色する場面〉	32
Q & Aコーナー 〈仕上げる場面〉	41
Q & Aコーナー 〈鑑賞する場面〉	45
Q & Aコーナー 〈評価〉	49

コラム① 〈作品展（コンクール）の入賞作品と授業での作品〉	2
コラム② 〈児童の苦手意識と資質・能力〉	5
コラム③ 〈「絵に表す」と「思い(主題)」について〉	8
コラム④ 〈参考作品の生かし方〉	12
コラム⑤ 〈創造性の発揮について〉	17
コラム⑥ 〈図画工作科・美術科において造形的な視点を働かせる価値〉	17
コラム⑦ 〈下がきなしで、割り箸ペン(墨汁)で直接かかせた方がよいのですか〉	18
コラム⑧ 〈マニラボール紙について〉	19
コラム⑨ 〈よい作品とはどんな作品なのかを考えさせましょう〉	20
コラム⑩ 〈絵に苦手感がある児童がかいた葉〉	24
コラム⑪ 〈対象を見えたようにかくこと（観察的表現）について〉	25
コラム⑫ 〈「関節」という視点に気付かせる（アリさん人間モデル）〉	27
コラム⑬ 〈観察的表現について「算数」から考える〉	34
コラム⑭ 〈線をかき込むことの効果について〉	37
コラム⑮ 〈仕上げる場面での指導例〉	38
コラム⑯ 〈失敗することが許せない児童が増えていませんか〉	40
コラム⑰ 〈鑑賞する場面での工夫「鑑賞アドバイスシート」〉	44
コラム⑱ 〈「自らの学習を調整しようとする側面」と指導と評価の一体化〉	49
コラム⑲ 〈この苦手感は、どこから生じるのでしょうか〉	56

参考資料① イメージマップとアイデアスケッチのワークシート	14
参考資料② 鑑賞ワークシート	43
参考資料③ 読書感想画に取り組む際のポイント	51
参考資料④ 児童の発達の段階・実態、表現活動の特徴及び活動を見る視点	52

1 「よい作品」とは、どのような作品でしょうか。

児童に絵に表す活動に取り組ませる際、教師が、「全ての児童に『よい絵(作品)』をかかせたい。」という願いをもっていることは、当然のことです。それでは、

『よい作品』とは、どのような作品でしょうか。

世の中には、「よい作品」についての様々な考え方があり、人によって異なることも多いのが実際のところですが、しかしながら、そうは言っても教師が、「よい作品とは、どのような作品なのか。」という目的を間違えていると、指導そのものが違ってきますので、まずは、「よい作品とは、どのような作品なのか。」ということについて、考えていきましょう。

「よい作品」として、まず思い浮かぶのが、作品展（コンクール）での入賞作品ではないでしょうか。展示会場で出合う素晴らしい作品の数々に、「どんな指導をしたらこんな作品ができるのだろう。」と感動することがあるかも知れません。それらの作品を、**参考作品として活用することはとても価値があることですが、同じような作品をかかせようとするのは、残念ながら間違いです。**（次頁コラム①を参照）

「何のために児童に絵に表す活動に取り組ませるのか。」と考えると、答えはもちろん「**児童に資質・能力を育むため。**」です。いわゆる**出来映えのよい絵をかかせるためではありません。**それでは、どのようにして資質・能力は育まれていくのでしょうか。



児童は、自分の「思い(主題)」を基にして自分の途中の作品や活動を見つめ、「この形で合うかな。」「こんな色はどうだろう。」と、視点をもって自分との対話(自己内対話)を繰り返しながら試行錯誤し、表現していきます。この視点が〔共通事項〕であり、図画工作科における「知識」として、実際に活用しながら理解が深まっていきます。そして、「思い(主題)」を達成するための自己内対話や試行錯誤、友達との意見交流の中で発揮され、高められていくのが「思考力、判断力、表現力等（従来の「発想・構想の能力」と「鑑賞の能力」）」です。また、「思い(主題)」を実現するために発揮され、高まっていくのが「技能(従来の「創造的な技能」)」です。さらに、題材全体を通して「思い(主題)」を実現するために粘り強く表現したり、表現の進み具合をコントロールしたり、作品を大切にしたりする中で育まれるのが、「学びに向かう力、人間性等」です。つまり、「思い(主題)」の実現に向けて、主体的に試行錯誤しながら表現することで、児童には資質・能力が育まれていきます。

つまり、「思い(主題)」を実現するために試行錯誤して完成した作品は、結果的にどのような仕上がりになっていたとしても、児童の「思い(主題)」を実現するために取り組んだ試行錯誤の結果であり、児童の成長(資質・能力の育成)に必要な作品であったということになります。これがその児童にとっての「よい作品」であり、「よい作品」は、児童の数だけ存在するのです。

〈留意すること〉「偏った指導を行っていませんか。」

指導しているとどうしても作品の出来映えが気になりがちです。しかし、教師が出来映えを気にすると、教師がイメージする「よい絵」に誘導する画一的な指導になりがちであり、「思い(主題)」を実現する中で資質・能力を育成するという目的を実現することが難しくなります。小学校学習指導要領解説【図画工作編】(平成29年)では、「一つの型や方法に固執した指導や、特定の表現のための表し方を身に付けるような偏った指導が行われることのないように、更に留意する必要があります。(p.30)」と、明確に述べられています。御注意ください。

〈作品展（コンクール）の入賞作品と授業での作品〉

作品展（コンクール）の審査会では、複数の審査員が、一面に並べられた作品の審査に当たります。審査員は、作品から伝わってくる主題や物語、それを伝えるための表現の工夫、作品そのものの美しさ、メッセージ性など様々なよさを読み取りながら、**作品展（コンクール）のテーマに合致している作品**を選んでいきます。

そうやって選ばれた入賞作品に共通していることは、**見る人に、何らかのメッセージを伝える作品**であるということです。作品から伝わってくるメッセージは、「色っておもしろいね。」「遠足のお弁当がおいしかったよ。」「ようやくできた。」「友達とこんなところで遊びたい。」「とても暑かった日。」「働く人はすごい。」「毎日通った通学路への感謝。」など、作品の数だけ存在します。

審査員は、児童生徒が表現する瞬間に立ち会うことができない訳ですから、審査をしているその瞬間に、作品から発せられるメッセージを**間接的に受信**します。そして、審査員が受信できるメッセージは、審査員がもっている「受信アンテナ」つまり「視点」によって異なるのです。例えば、幼児教育の表現に深く関わってきた審査員は、幼児の表現から実に多くのこと（家庭の様子や園の様子など）を読み取ります。小学校教育に関わってきた審査員は、児童の「思い(主題)」だけでなく、授業の様子まで思い浮かべます。中学校教育に関わってきた審査員は、生徒の「思い(主題)」や技能だけでなく、作品の充実度や時数についても考えます。常に制作をされている審査員は、作品そのものの強さや美しさ、個性、メッセージなど美的な観点で深く審査します。このように、それぞれがもつ「造形的な視点」も含めた様々な「視点」によって審査されているのです。複数の審査員で審査するのは、そのためです。

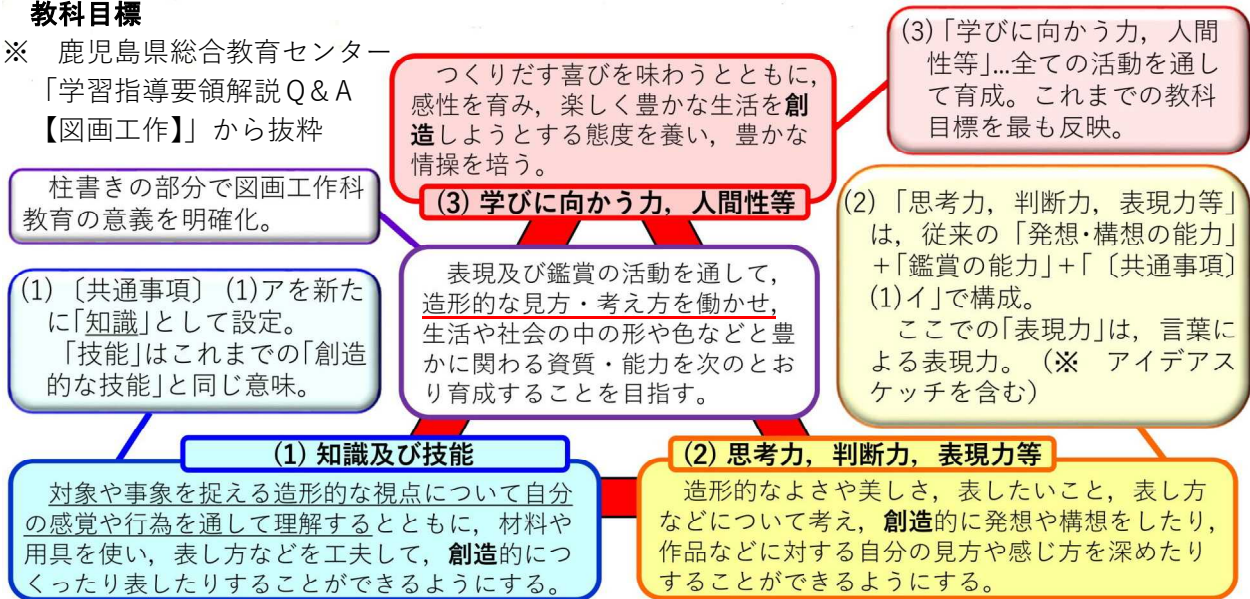
授業者である先生方は、**審査員が決してもつことができない大切な視点**をもっています。先生方は、授業の中で、実際に絵に表している児童生徒に**直接**寄り添い、児童生徒の「思い(主題)」や表現する上での悩み、新たな表現への挑戦などを見て指導や助言をしてきている上に、児童生徒の資質・能力がどのように発揮され、それまでの姿からどのように成長したのかについても見てきています。そして、それらは全て、先生方の作品を見る「視点」となります。つまり、**先生方が児童生徒の作品を見ている視点は、審査員とは大きく異なる**のです。先生方が、「どうしてこの作品が選ばれるのだろう。」という疑問をもつのは、ごく当然のこととなります。しかしながら、この「視点」のズレを審査員側に揃え、作品展で選ばれようような作品をかせようとするのは、図画工作科・美術科の目標から大きく外れてしまうことになります。

選ばれた作品については、児童生徒が表現する瞬間に居合わせなかった審査員にも思いが伝わったわけですから、大いに称賛してください。そして、重要なことは、授業で表現された作品ですから、作品展等で選ばれなかったからといって、選ばれなかった作品が選ばれた作品より劣るわけではないということです。先生方は、授業において、全ての作品がもっている価値、つまり児童生徒が「思い(主題)」をもち、それをどのように試行錯誤しながら実現していったのか、その際、どのように資質・能力が発揮されたのか、その全てが込められた大切なものであるということを意識し、児童生徒の取組を理解し、しっかりと受け止め、称賛してください。これは、**授業をされた先生方にしかできないこと**なのです。

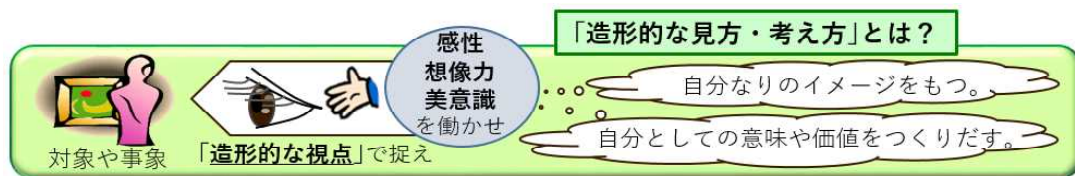
2 育成すべき資質・能力(全体)

1 教科目標

※ 鹿児島県総合教育センター
「学習指導要領解説Q&A
【図画工作】」から抜粋



ここで、注目すべきなのは、表現及び鑑賞の活動を通して働かせる「造形的な見方・考え方」です。



対象や事象を「造形的な視点」で捉え、自分なりのイメージや自分としての価値をつくりだすことを、発達の段階に応じて、全ての活動で意識させることが大切です。この「造形的な視点」を豊かにする指導事項が、〔共通事項〕であり、図画工作科・美術科の「知識」となります。

2 育成すべき資質・能力

図画工作科において育成すべき資質・能力は、学習指導要領で示された教科目標で三つの柱に整理された資質・能力そのものですが、概略は次のようになります。

(1) 知識・技能 ア 知識 〔共通事項〕について、自分の感覚や行為を通して理解する（造形的な視点として活用する）。 イ 技能 ○ 材料や用具に十分に慣れたり、適切に扱ったりする（材料や用具を適切に扱う）。 ○ 活動を工夫してつくり表したり、表し方を工夫して表したりする（創造的な技能を発揮する）。
(2) 思考・判断・表現 自分なりのイメージをもつ。自分にとっての価値を見付ける。※〔共通事項〕との関連に留意 ア 発想・構想の能力 ○ 造形的な活動や表したいこと(主題)を思いつく（発想する）。 ○ どのように活動したり、表したりするかを考える（構想する）。 イ 鑑賞の能力 ○ 感じ取ったり考えたりする（自己内対話によって生まれる）。 ○ 見方や感じ方を広げたり深めたりする（他者との交流によって生まれる）。
(3) 主体的に学習に取り組む態度 ○ 粘り強い取組を行おうとする（「思い(主題)」の実現へ向けて試行錯誤する、失敗を生かす）。 ○ 自らの学習を調整しようとする（題材全体を見通し、時間内にまとめ、仕上げようとする）。

授業を進めていく中で、〔共通事項〕を意識し、児童に思考させていくことが重要です。なお、絵に表す活動で育成すべき資質・能力の詳細については、次頁を参照してください。

3 育成すべき資質・能力(内容のまとめ「絵や立体に表す」)

1 内容のまとめ「絵や立体に表す」で育成すべき資質・能力

(1) 知識及び技能

ア 知識

- ㊦ 自分の感覚や行為を通して、形や色などに気付くこと。
- ㊧ 自分の感覚や行為を通して、形や色などの感じが分かること。
- ㊨ 自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解すること。

【共通事項】(1)ア「造形的な特徴を理解すること」です。図画工作科では、この(1)アのみが「知識」となります。詳しくはp.6の【共通事項】を参照。

各学年の☆…「材料や用具に十分慣れたり適切に扱ったりすること」です。

各学年の★…「活動を工夫してついたり、表し方を工夫して表したりすること」です。「思い(主題)」の実現のために、これまでに学んだ材料や技能を用いて試行錯誤する際に発揮される創造的な技能のことです。

イ 技能

- ㊦☆ 身近で扱いやすい材料や用具に十分慣れること。
 - ★ 手や体全体の感覚などを働かせ、表したいことを基に表し方を工夫して表している。
- ㊧☆ 材料や用具を適切に扱うこと。
 - ★ 前学年までの材料や用具についての経験を生かし、手や体全体を十分に働かせ、表したいことに合わせて表し方を工夫して表すこと
- ㊨☆ 表現方法に応じて、材料や用具を活用すること。
 - ★ 前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしたり、表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして、表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。

(2) 思考力、判断力、表現力等

ア 発想・構想の能力

- ㊦○ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。
 - 感じたこと、想像したことから、表したいことを見付けること。
- ㊧○ 好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること。
- ㊨○ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。
 - 感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを見付けること。
 - ◎ 表したいことや用途などを考え、形や色、材料などを生かしながら、どのように表すかについて考えること。
- ㊨○ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。
 - 感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことから、表したいことを見付けること。
 - ◎ 形や色、材料の特徴、構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、どのように主題を表すかについて考えること。

各学年の○…【共通事項】(1)イ「イメージをもつこと」です。中学校美術科では全て知識ですが、小学校図画工作科では、「思考力、判断力、表現力等」に入ります。

全ての活動において、形や色、材質などの造形の要素などを基に、自分なりのイメージをもつことです。

各学年の●…主に発想することに関する力です。低学年に加えて中学年では「見たこと」が加わり、高学年では「伝えたいこと」が加わっています。発想のきっかけが広がっています。

各学年の◎…主に構想することに関する力です。形、色、素材の特徴、技法などを考えながら、「思い(主題)」をどのように表すかについて考えます。

※ 「思考力、判断力、表現力等」の中の「発想・構想の能力」は、題材の導入部分だけではなく、題材を通して発揮されています。

各学年の△…〔共通事項〕(1)イ「イメージをもつこと」です。

参考作品や、自他の途中の作品、または、完成した作品に対して、作者の「思い(主題)」に思いをはせながら、形や色、材質などの造形的な視点を基にして、イメージをもつことです。

各学年の▲…形や色、材質といった造形的な視点を基に、自他の作品や、その製作の過程などの造形的なよさや美しさ、面白さ、表現の意図、表し方の変化などを自分自身で感じ取り、考え、それを基に友人と意見交流をすることを通して、自分と同じ、または異なる見方や感じ方に気づき、自分の見方や感じ方を広げ、深めていきます。

※ 「思考力、判断力、表現力等」の中の「鑑賞の能力」は、鑑賞の時間だけでなく、表現の中でも、自分の作品を見つめる中で、常に発揮されています。

イ 鑑賞の能力

㊦△ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。

▲ 自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、感じ取ったり、考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。

㊧△ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。

▲ 自分たちの作品や身近な美術作品、製作の過程などの造形的なよさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方について、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。

㊨△ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。

▲ 自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、生活の中の造形などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり、考えたりし、自分の見方や感じ方を深めること。

(3) 学びに向かう力、人間性等

㊦ つくりだす喜びを味わい、楽しく表現したり、鑑賞したりする学習活動に取り組むこと。

㊧ つくりだす喜びを味わい、進んで表現したり、鑑賞したりする学習活動に取り組むこと。

㊨ つくりだす喜びを味わい、主体的に表現したり、鑑賞したりする学習活動に取り組むこと。

低:「楽しく」、中:「進んで」、高:「主体的に」というキーワードで捉えることができます。

「思い(主題)」の実現のために、粘り強く試行錯誤しながら表現していけるように声を掛けます。

題材の時間配分を理解し、時間内に完成するように見通しをもって取り組むように声を掛けます。

コラム ②

〈児童の苦手意識と資質・能力〉

鹿児島県総合教育センター令和2年度長期研修者である山下泰弘教諭（鹿児島市立玉江小学校）の研究によると、「児童が絵に表す意欲を失う原因は、『発想』、『線描』、『彩色』、『鑑賞』等への苦手意識であり、それらの苦手意識は、それぞれに関する資質・能力が育成されていないために起きているのではないか。」という指摘がなされました。そして、「それぞれの苦手意識を解消するために丁寧な指導を行ったところ、苦手意識が改善されると同時に、絵に表す活動について高い意欲を保ち続けることができた。」とのことでした。

児童に題材を与えると、子供らしい発想をして、伸び伸びと表現してくれるという私たちの感覚は、おそらく低学年の早い時点で終わり、中学年以降の多くの児童生徒は、自分の「思い(主題)」と自分の表現とのギャップに苦しんでいることが予想されます。学習指導要領解説「図画工作編」「美術編」により、該当する学年での育成すべき資質・能力を確かめ、授業に反映させていくことが求められています。

4 造形的な視点と〔共通事項〕

1 〔共通事項〕に気付かせる

資質・能力の中で、特に留意したいのが、「知識」である**〔共通事項〕**です。〔共通事項〕は、図画工作科・美術科の全ての活動において働かせる「**造形的な見方・考え方**」の鍵となる「**造形的な視点**」を豊かにするために、題材ごとに設定する必要があります。

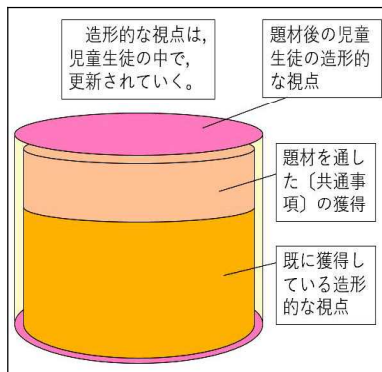
「形、色、材質、光」といった**造形の要素**については、**全ての題材において普遍的に扱う〔共通事項〕**であり、そのまま「**造形的な視点**」となります。さらに、**題材の中で特に大切にしたい題材特有の〔共通事項〕**（例えば、小学校中学年での「重なりによる奥行き表現」等）を設定する必要があります。（詳しくは指導資料「図画工作科・美術科第45号」を参照。）この〔共通事項〕は、語句として題材の冒頭で覚えさせるのではなく、**児童に実感させながら気付かせる**ようにします。例えば、児童は参考作品を鑑賞することを通して、「色や形を工夫することで、作者の思いが伝わるんだ。」「こんな視点で考えると工夫できるんだ。」と、〔共通事項〕を発見することができます。そして〔共通事項〕を授業で繰り返し活用する中で「造形的な視点」として活用できるようになり、表現や鑑賞の活動だけでなく、日常生活の中でも生かせるようになるのです。

	ア 造形的な特徴を理解すること	イ イメージをもつこと
小学校 低学年	形、線、色、触った感じ、大きさなど ↓ 形や色など ↓ の感じ ↓ 動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさ、方向感、材質感、時間的な変化、量感、場所や空間の特徴など ↓ 造形的な特徴	気付く ↓ 分かる ↓ 理解する ↓ 実感を伴いながら理解する
小学校 中学年	形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じ、色の明るさ、前後の感じ、質感など ↓ 形や色など ↓ の感じ ↓ 動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさ、方向感、材質感、時間的な変化、量感、場所や空間の特徴など ↓ 造形的な特徴	○ 偶然見付けた形や色からイメージをもつこと。 ○ 自分の感情や行為とともに、自分自身と一体となったイメージをもつこと。 ○ 形や色の感じ、自分の思いや経験など、様々な手がかりを基にイメージをもつこと。 ○ 外観から立体の構造や空間を把握したり、心に描いた情景や像などから形や色を考えたりするなど、中学年よりも具体的な特徴に即してイメージをもつこと。
小学校 高学年	形や色彩、材料、光などの造形の要素、性質、感情にもたらす効果、色彩の色味・明るさ・鮮やかさ、材料の性質や質感、組合せによる構成の美しさ、余白や空間の効果、立体感や遠近感、量感や動勢など、また、それらが感情にもたらす効果 ↓ 造形的な特徴	○ 対象の全体に着目し、造形的な特徴を基に… ○ 見立てたり、心情などと関連付けたりして全体のイメージで捉えることを理解すること。 ○ 作風や様式などの文化的な視点で捉えることを理解すること。
中学校	形や色彩、材料、光などの造形の要素、性質、感情にもたらす効果、色彩の色味・明るさ・鮮やかさ、材料の性質や質感、組合せによる構成の美しさ、余白や空間の効果、立体感や遠近感、量感や動勢など、また、それらが感情にもたらす効果 ↓ 造形的な特徴	○ 対象の全体に着目し、造形的な特徴を基に… ○ 見立てたり、心情などと関連付けたりして全体のイメージで捉えることを理解すること。 ○ 作風や様式などの文化的な視点で捉えることを理解すること。

※ 小・中・高等学校学習指導要領解説【図画工作・美術・芸術(美術)編】を基に作成

※ 知識、思考力、判断力、表現力等

※ 高等学校においては、中学校の〔共通事項〕の内容を考慮して設定する



※ 授業で、〔共通事項〕を活用することを通して、体験的に理解した児童たちは、「造形的な視点」を更新していきます。

〈留意すること〉 小学校と中学校の〔共通事項〕

小学校の〔共通事項〕では、(1)イは「思考力、判断力、表現力等」に含まれますが、中学校では、(1)イも「知識」となっています。これは、中学校においては、アを「木を見る視点」、イを「森を見る視点」として捉えており、どちらも物事を捉える際の視点として扱っているからです。理解したことを基に思考し（図画工作）、その思考して理解したことが、また次に見たり考えたりするときの知識となって思考する際に働く（美術科）…小学校と中学校は繋がっています。

5 絵に表す活動の基本的な過程

絵に表す活動の過程は、児童の実際の活動から、通常「①線描→②彩色^{さいしき}」の二つの場面で考えられがちです。しかし本資料では、児童の思考の流れや、育みたい資質・能力に合わせて、右の五つの場面を設定することを提案します。

特に、「④仕上げる場面」は、「思い(主題)」の実現へ向けて意識的に工夫する場面であり、「③彩色する場面」との違いを児童に意識させることで、資質・能力をの育成が期待できるため、**あえて分けた方がよい**と考えます。

- ① 思いをもつ場面
- ② 線描する場面
- ③ 彩色する場面
- ④ 仕上げる場面
- ⑤ 鑑賞の場面

〈各場面における指導のポイント〉

場面	児童の姿	指導のポイント（特に配慮したいこと）
① 思いをもつ場面	○ かきたい「思い(主題)」をもつ ○ 題材のねらいを見付ける・分かる ○ 自分の表現したい「思い(主題)」をもつ	○ 「思い(主題：かきたい気持ちや、対象にかける思い、こだわり)」を高められるような工夫を行う。(※ 児童の実態に応じて変化する。) ○ この題材でどんな資質・能力を高めたいのか・どんなことを工夫すればいいのか・何をがんばるのか等について気付かせる。 ○ 参考作品との出会いの中で、児童自身に〔共通事項〕(造形的な視点)に気付かせるようにしたり、理解させたりする。 ※ 毎回、〔共通事項〕を特別に取り上げて授業を始めることはしない。児童が気付き、意識できるようにすることが大切。 ○ 〔共通事項〕…【形(構図)、色、光、彩色方法、イメージ】を基本とするが、学年・題材によって異なる。〔共通事項〕は題材の核となる知識であり、児童の思考を助ける「造形的な視点」である。 ○ 自分の「思い(主題)」をもたせたい。ただし、「思い(主題)」をもつことには発達の段階の違いにより個人差があるので、題材の途中で明確になることもある。必ず「思い(主題)」をもってから表現活動に入らなければならないという限定はない。 ○ 発達の段階に応じて、定まった自分の「思い(主題)」を文字で記録させておくと、その後の指導が児童を主体としたものとなる。
② 線描する場面	○ 構図を決める ○ 下がきをする	○ イメージマップ等の思考ツールを用いて、自分なりのアイテアを広げさせる。そのものどおりでなければならないという固定概念から解き放つ必要がある。 ○ 見てかく場合は、色々な見方、対象の捉え方を引き出したり、対象とするものを見せたりし、自分のイメージや思いに合う形、構図を探らせる。 ○ 題材によっては、小さなアイデアスケッチに取り組みせ、構図を数多く試させる。 ○ 導入で見つけた〔共通事項〕(造形的な視点)を基に、自分の思いと照らし合わせ、自分のかきたい形や構図を確かめさせ、試行錯誤させる。
③ 彩色する場面	○ 彩色する	○ 本題材における彩色の基本的な方法(技能)を提案し、児童が「思い(主題)」とつなげて表現できるようにする。なお、表現方法は、児童が試行錯誤しながら選ぶものであり限定しない。 ○ 基本的な技法(決まり)については、表現の基本となるので、指導する。 ○ 試行錯誤を価値付ける。 ○ 水彩絵の具等による色の美しさを感じさせながら彩色させる。
④ 仕上げる場面	○ 自分の「思い(主題)」に合うように仕上げる	○ 自分の「思い(主題)」と作品を〔共通事項〕(造形的な視点)で照らし合わせ、「思い(主題)」が伝わるか確かめながら、試行錯誤させる。 ○ 児童がよりよく改善したり、自分で「思い(主題)」に近づけられたりする方法を複数提供する。(周囲の児童の考えもアドバイスとして引き出すこともある。) ○ 「思い(主題)」を達成するために発揮する技能が「創造的な技能」である。 ○ 児童に提供できる改善策をもっていきたい。
※ ②～④の場面の中に「中間鑑賞」を設定することも効果的です。隣席等の友人と「中間鑑賞」を行うことにより、「自分の『思い(主題)』思いを確かめる」「友達の見方・感じ方を知る」「発想を広げる」「方向性を見付ける」ことや「見せることへの抵抗感の減少」等が期待できます。		
⑤ 鑑賞の場面	○ よさを見つける ○ 振り返る	○ 本題材で大切にしてきた〔共通事項〕(造形的な視点)を改めて示す。 ○ 相互鑑賞させる。友人の作品に感じたよさを造形的な視点で分析し、具体的に言葉にして伝えさせる。 ○ 相互鑑賞を基に自他の活動を肯定的に振り返らせる。 ○ 表現を豊かにするために、造形に関わる言葉を増やせるようにする。

6 「思い(主題)」をもたせることの重要性

1 「思い(主題, テーマ, 個人のめあて)」をもたせることで生まれる変化

題材の導入から展開にかけて、児童に「これを表現したい。」という明確な「思い(主題)」をもたせることで、授業に次のような大きな変化が生まれます。

ア 児童の活動へ向かう姿勢が変わる。

なんとなく表現している。 → 何としても思いを実現したいと試行錯誤する。

イ 教師の指導が変わる。

こんな絵をかかせたいという教師主導の指導。

→ 児童の思いを実現させるための指導。

ウ 児童の絵をかくことへの認識が変わる。

かかせられる消極的な活動。 → 思いを実現するために挑戦する活動。

授業で絵に表す活動に取り組ませる本来の目的は、絵に表す活動を通して資質・能力を育成することです。決して見栄えがよい絵にすることではありません。資質・能力は、「思い(主題)」を実現しようとする主体的な活動の中での「こんな色はどうだろう。」「どんな形がいいかな。」「どの方法が合うかな。」といった試行錯誤によって育まれます。ですから、活動の中で「思い(主題)」を明確にもつことが極めて重要ですし、児童が「思い(主題)」をもちやすい題材の設定が必要となるのです。

〈留意すること〉 「思いは変わるものです」

児童の「思い(主題)」を大切にするとは言うものの、児童の「思い(主題)」は、活動の途中で変わっていくことがよくあります。教師としては、「最初の思いから決して変わってはいけない(絶対にブレない。)」といった硬直した指導ではなく、変化した意図をよく聞き取りながら、受け入れたり、方向性について助言したりしたいものです。そして、表現の折々において「思い(主題)」をもっていることを確認しながら、「『思い(主題)』を実現するために表現する。」ことからブレないように指導していくことが大切です。

2 「思い(主題)」をもたせることと題材の設定

「題材の成功は、導入にかかっている。」とよくいわれますが、これは、導入において児童に「思い(主題)」をもたせ、主体的な活動にすることを意味しています。「思い(主題)」をもたせることと題材の設定は切っても切れない関係にありますので、「導入」と言うよりも、「**題材の成功は題材設定から導入までにかかっている。**」と言った方が、正確かも知れません。

題材設定の最大のポイントは、児童が受け入れやすい「設定(物語)」をつくることです。この設定は、教科書に掲載されている題材等を参考に、ある程度、想定することはできますが、最終的には、それぞれの学校の環境(例えば海辺である、山林に囲まれている等)や、学級の児童の発達の段階、興味の実態などに応じて、児童が「思い(主題)」をもちやすい題材を設定し、導入においていかに仕掛けるかが大切になります。ですから、年間題材計画は、各学校で決定することになっています。

コラム ③

〈「絵に表す」と「思い(主題)」について〉

小学校学習指導要領における「絵に表す」という呼び方の「に」に違和感を感じる方がいらっしゃると思いますが、よく考えると、「に」である理由が分かります。単に「絵をかく活動」ではなく、**児童の「思い(主題)」を「絵に表す」から「に」なのです。**つまり、先にあるのは、「絵をかく」という行為ではなく、表したい「思い(主題)」なのです。

小学校では、明確な思いをもたないまま活動が始まり、活動しながら次第に「思い」が定まり、最終的にこんな「思い」を表現した。ということがあるので、「思い」を明確にすることについては、柔軟に表現されていますが、中学校学習指導要領では、全ての活動において「主題をもつこと」が強調されています。このことから活動の原動力となる「思い(主題)」の重要性が分かります。

7 「思い(主題)」をもたせるポイント(題材設定～導入) 〈低学年〉

1 低学年の題材設定と導入

低学年の児童の絵は、見たものを描写するのではなく、再現の絵になります。つまり、嬉しかった思い出や、体験して感じたこと、関心のあることから想像したことなどを再現する中で生まれます。ですから、児童にとって楽しい活動や強く印象に残る活動の直後に絵に表す活動を設定すると、直前の活動の思いが反映した絵が生まれます。このように、児童が「どうしてもかきたい」と思える題材を設定することが大切になります。

児童の「思い」を膨らませるためには、「体験したときの楽しかった、うれしかったことをかきたい。」といった思いを会話等で引き出す必要があります。導入においては、教師や友達と言葉を交わし、全体で体験を紹介し、「思い」を膨らませる時間が必要です。「〇〇が楽しかったよ。」と、児童が実感を伴って振り返ることを通して、発想を広げ、「これをかきたい。」という思いが高まっていくのです。

また、想像を広げて絵に表すためには、導入において、いかに豊かに、具体的にイメージを膨らませるか、夢の世界へ引き込むかといった点にポイントを置き、児童の中にストーリーが生まれるような仕掛けを工夫することが必要になります。もちろんその際は、教師自身が楽しく演じることが大切です。教師は、「役者」でなければならないのです。



2 低学年の題材設定の例

- 児童にとって楽しい活動や印象に残る活動をさせた直後に、絵に表す活動を設定する。

例) 遊具を使って楽しく遊んだこと。授業で初めてできたことや嬉しかったこと。生活科での体験活動(町探検、栽培活動、収穫祭、飼育中の観察、感動)

- 児童を空想(夢)の世界へ引き込み、想像を膨らませてから絵に表す活動を設定する。

例) 不思議な卵の中から、どんな生き物が出てくるかな。

不思議な窓を開けたら、向こうにどんな世界が広がっているかな。

3 思いを引き出す導入の例

「これが、とっても楽しかった。」「嬉しかったことをかきたい!」「夢の世界でこんなことをしてみたい!」といった児童がもっている思いを会話や動作、導入のストーリーで引き出します。

T:『どんなことをかくのかな。』 C:『お友達と遊んだことです。』

T:『楽しかったんだね。』 C:『うん。とっても楽しかったよ。』

T:『じゃあ、とっても楽しい感じにかけるといいね。』 C:『はい。』

T:『どこで遊んだの。(何を)したの。どんな面白いことがあったかな。どんな様子だったの…。』

C:『遊園地でびゅーんってジェットコースターに乗ったよ。…』

T:『実は、先週、不思議な老人が学校にやって来て、この卵を置いていきました。…』

T:『この窓は、魔法が使える人に作ってもらった不思議な窓です。こんな世界があるといいなと思って開けると、その世界が見えるんです。先生は、大好きなお菓子だらけの…』

〈留意すること〉「他教科・幼稚園とのつながりを大切に」

身近な生活の場面を題材とする生活科は、児童が気付いた喜びや感動を味わいながら活動しており、絵に表す題材の宝庫です。同様に体育や音楽等の他教科でもできた喜びや達成感があり、主題として取り上げることが可能です。教科のつながりを意識した題材設定を工夫してください。

また、小学1年生の学びは、幼稚園での学びの上に成り立っています。夢を広げながら表現することを楽しんできた児童に、もっと夢を広げながら表現させ、型にはまらない、表現そのものの楽しさを味わわせ、「絵に表すことが大好きです。」という状況で中学年へ進級させてください。

8 「思い(主題)」をもたせるポイント (題材設定～導入) 〈中学年〉

1 中学年の題材設定と導入

中学年の児童は、低学年での感じたことや想像したことに加えて、見たことから着想を得て表したいことを見付け、表現することができるようになります。「これがかっこいい。」「ここがきれいだ。」「これはすごい。」といった見た感動を基に、「これを表現したい。」という強い思い、つまり**主題へのこだわりをもつことができ、児童の主体的な対象の観察や表現の工夫を引き出す原動力となります。**そのため、「どこをすごいと思ったのかな。」「何を一番かきたいのかな。」「どんな感じにしたいのかな。」といった「思い(主題)」をさらに明確にする問いかけが重要です。

また、中学年は、低学年のように自由闊達に表現する児童から、高学年や中学生のように精細な表現を好む児童まで、個人差が大きく現れる学年です。そこで、**児童の実態を把握し、興味や関心を引きつけ、多様な表現が可能になる「幅のある題材設定」が必要**になります。題材設定をする前に児童の実態を知ること(情報収集)が大切になります。

2 中学年の題材の例

- 特徴的な形の建物、乗り物、植物等から「面白さ」や「美しさ」を見付けてかく
対象に面白さや美しさといった感動を感じるところが導入です。面白さや美しさをどこからそう感じたのかを明らかにして、そこにこだわらせてかせます。観察的表現の第一歩になります。
輪郭線を追うことで形の面白さに気付いたり、色にこだわることで単純ではない色の変化の面白さに気付いたりできます。絵に表しながら視点をもって観察することで、「世界は不思議で面白い。」「世界は美しい。」ことに気付きます。形や色の正確さが大切なものではありません。自分が概念的な表現とは異なる表現ができることに気付かせ、喜びを味わわせてください。
- 空想の世界を広げる
「もしも、こんなものがあったら。」といった空想の世界を、身近な人や生活と関連付けたり、「タイムスリップできたら」、「宇宙まで伸びたら」、「海底だったら」、「とても小さくなれたら」など、**全く異なる条件をもとに多様な視点から発想**させ、広げていくことができます。全体の場で、いくつかの発想の方向性を見せることや、自分のこだわりのあるものと関連させることで、無限に広がる発想を楽しませたいものです。条件を限定することで、その範囲での深い工夫が始まったり、逆に無制限にすることで広い発想を引き出すこともできます。

3 思いを引き出す導入の例

児童が、「絵に表したい。」という気持ちになる導入を工夫しましょう。

T:『外で絵を描くときに大切なのは、かこうと思ったものや場所の何に感動したのかをはっきりとさせることです。例えば、この作品では、作者は、どこに感動したのかな。』

C:「タイヤに感動したんだと思います。」

T:『同じように感じた人がいますか。なるほど。では、どこからそう思ったのかな。形かな。色かな。』

C:「ここの、大きなタイヤの、ギザギザしたところの形や色がすごいことから、これだと感じました。」

T:『どうですか。ここから、作者の「思い」が伝わってくるね…。絵って、かきたい「思い(主題)」を、形や色で工夫して表すことが大切なんだね。』

※ 『何を一番かきたいのかな?』『何(どの瞬間)が楽しかった?』『どんな感じにしたい?』等の「思い(主題)」から一歩進んだ「こだわり」を引き出す教師の問い掛けが重要になります。

T:『こんな大きな木があったとしたら、皆さんは、どんなことをしたいですか。』

C:「中にみんなで泊まれる基地をつくりたいです。」「遊園地にしたいです。」…

※ 途中で、「みんなでつなげて大きな一本の木にしたい。」などの要望が出た場合は、全体で合意形成を図りながら、共同制作にチャレンジすることがあるかも知れません。

- ワークシートの「思い(主題)」の欄や、画用紙の裏に「思い(主題)」を書かせておくと、活動の中で確認することができ、指導をしやすくなります。



9 「思い(主題)」をもたせるポイント（題材設定～導入）〈高学年・中学生〉

1 高学年・中学生の題材設定と導入

高学年から中学生になると、事物や事象について深く考えることができるようになり、自己を深く見つめた主題を設定できるようになります。また、意識や活動範囲は身近な家族や友人といった範囲から社会的に広がっていくので、他者へ伝えたいことや社会に訴えたいことから主題を生みだすことができるようになります。

ここで大切なのは、題材の設定を通じて、**自分が表現しなければならぬ必然性を感じることができるか**ということです。例えば、「感動したこと、人の営みのよさやその人の思い、社会の課題などを、見る人へ伝えたい。絵に表したい。」といったメッセージ性のある主題をもてる題材を提示することも有効です。そのような題材であれば、試行錯誤する中で、自分の思いだけではなく、多様な視点から自己の表現を見つめることが必要となり、広く、深い思考が必要となります。また、それに伴い、教師の言葉掛けも、「どんなことを見る人に伝えようとしているのか。」「どんな作品にしたいのか。」「主題に迫ることができる内容になっているか。」といった**児童生徒の主題を明確にする言葉**や、「なぜその場面なのか。」「見る側は、どのように受け取るだろうか。」といった**主題と表現と見る側をつなげて考えさせる言葉**など、**児童が自分の考えや表現を、問い続けていけるような言葉掛け**に変化していきます。

つまり、高学年以降の題材の成否を決めるのは、教師が常日頃から題材設定へ向けて、児童生徒の興味・関心を捉えておくことはもとより、児童生徒の課題意識や地域での実体験、地域社会の状況、世間一般の話題、児童生徒の教育活動を受け入れてくれる地域人材、商工会議所等の学校とのコラボレーションを期待する団体といった、**児童を取り囲む状況について情報を収集し、教材化へ向けてのアンテナを高くしておくことが極めて重要になる**のです。



2 高学年・中学生以降の題材の例

- 学校や地域のおすすめ・お気に入り・感謝を表す
自分が紹介したいものやことを絵に表します。対象を意識させることが重要になります。
- あったらしいこんなもの（こと）、行ってみたいこんなところを想像して表す
学校や地域にあったらしいと思うものやこと、行ってみたい場所を想像を広げて表現します。
- 自分を見つめて表す

もしも、児童生徒が思いをもてない題材ならば、児童にとって絵に表す題材としては適切ではないのかも知れません。「題材ありき」ではなく、常に児童生徒目線での題材の検討が必要です。

3 思いを引き出す導入の例

方法例	児童生徒の意識	実施上の留意点
思い出の場所を思い起こさせ、選ばせる。	思い出を詰め込みたい。残したい。伝えたい。	安全管理のため、いくつかの場所に絞り込み、教師が同伴するか、校内で設定する。
ふるさとの美しさ・よさに気付かせる。	こんな素晴らしい場所・ものがあるんだ。	写真での紹介、先輩の作品での紹介から発想を広げ、写真の再現にならないようにする。
人の営みの素晴らしさに気付かせる。	働いている人ってかっこいい。一生懸命働く人になりたい。	参考作品で、働く人物が入っている作品を紹介し、表現上の工夫を見付ける。

T：『どんなことを見る人に伝えようとしているのか。』『なぜその場面なのか。』
T：『どうしてこの場所を選んだのか。』『どんな絵にしたいのか。』

〈参考作品の生かし方〉

導入について語っているとよく話題になることがあります。

「参考作品に影響を受けてしまい、児童の発想がそっくりになってしまうので、参考作品を見せづらいんです。」

という御意見です。とても悩ましい問題です。この問題があるために、「教科書を見せられない。」という状況も発生しているようです。そっくりになるのを防ぐために、一つではなく、「複数の参考作品を見せる。」という方法もありますが、根本的な解決には至らないようです。しかし、参考作品を見せずに表現を進めると、新しい学びが生まれないことがよくあり、前学年と同じような表現が繰り返され、結果として頑張っているのに発達の段階に応じた表現をすることができず、ついには表現への意欲を失ってしまうこともあります。

それでは、導入についてよく話題になるもう一つのこと。

「参考作品を見せたいけれど、どの作品をどうやって見せたらいいのだろう。」

という疑問です。では、「何を見せるか。」ということから考えましょう。

参考作品としてまず浮かんでくるのは、教科書に掲載されている参考作品です。それらの作品は、教科書会社が全国から集めた題材の中から吟味を重ね、発達の段階も考慮されて選ばれた作品です。ぜひ参考作品という視点で教科書を見直してください。また、参考作品としてもう一つ浮かんでくるのが、作品展（コンクール）の入選作品です。ネット上で検索することで多くの作品を見ることができます。ちなみに、ネット上で見付けた作品を授業で参考作品として見せることは、著作権法の第35条で保証されています。これらの作品も、作品そのものから作者のメッセージが審査員に伝わったという作品ですから、授業でぜひ生かしていただきたいところです。

では、どのように生かせばよいのでしょうか。

最も有効なのは、作者の思いがどのように工夫して表現されているかについて、〔共通事項〕を視点として深く鑑賞させることだと考えます。次のような手順をお勧めします。

- ① 作品から伝わってくるイメージを基に、作者が表現したかったことを予想する。
- ② **どこからそう思ったのか**を、形や色といった〔共通事項〕を視点として、よく考え、意見交流を行う。同時に、「作者がどうしてその色を使ったのか。」「他の色ではダメだったのか。」といったことまで語り合い、表現していた作者の思考にまで思いを馳せるようにする。可能であれば、児童が考えた後に、作者のコメントなど、作者の思いを確認できる資料を基に意見交流する。
- ③ 意見交流を基に、本題材に取り組む中で大切にすること、題材を通して自分が成長する点を確認する。

このように、参考作品の鑑賞において「**作品からは、作者の思いが伝わる。だから思いが伝わるように形や色、表現方法を考えてこだわって表現することが大切である。**」ということを実感することができれば、児童の絵についての認識が変わり、自分の思いを表していくために試行錯誤していこうとする準備ができます。そして、「思い(主題)」をもつことができたら、ある程度**時間をかけて発想させる**ことで参考作品に引きづられるということが少なくなります。

全ての題材において共通することですが、導入時に、本題材で学ぶ価値に気付かせたり、「表現したい。」という思いを高めることが、題材を通して主体的に活動に取り組む原動力となり、資質・能力を育むことにつながるのです。



10 発想を広げるポイント

1 「思い(主題)」をもち、さらに詳しく書く

まずは、「思い(主題)」をもたせることが大切です。児童は、「〇〇で遊んだこと」、「キャンプ」など簡単に書くことが多いのですが、ここで終わってはもったいないのです。もう少し踏み込んで、「〇〇で遊んで、□□が△△したところがとても面白かった。」、「キャンプで、自分で火をおこして、料理をしているときに、上手に切れてとても嬉しかったこと。」等、少し詳しく具体的に書くことで、作品の方向性が生まれます。作品の方向性が生まれると、教師は、その実現のために一緒に考えたり、助言したり、指導したりすることができるようになります。

2 発想を広げる

(1) イメージマップ等の思考ツールを活用する

授業の中でも「何をかけばいいのか思いつかない…。」と苦悩する児童を見かけることがあります。導入で「思い(主題)」をかき立てることができても、発達の段階が上がるにつれて、さっと絵に表すことはできなくなしていきます。それは決して悪いことではなく、**自分の「思い(主題)」を達成するために発想を広げるのは簡単ではないと気付いた成長**なのです。しかし、そのままにすると、苦手意識から、絵に表す活動への拒絶が始まります。発想に困りだした児童には、発想を広げる基本的な方法について、丁寧に指導する必要があります。

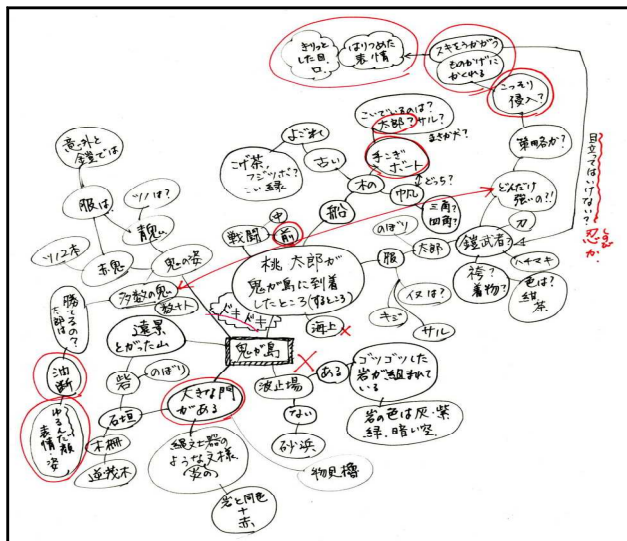


図1 イメージマップ「桃太郎」

図1は、読書感想画において、「桃太郎が、鬼が島に到着したところ」を主題として書いた**イメージマップ**です。「人物、場所、物、衣装、色、形、材質」といった視点を持ち、連想しながらイメージを広げていきます。イメージマップについては、他教科等でも取り上げられてきているので、すらすらと書ける児童もいるでしょうが、初めのうちは、視点を多様にもつのが難しいので、一緒に考えながら作成するのがよいでしょう。特に、造形的な視点については、丁寧にやりたいところです。広がったイメージから、絵に表したいことを○で囲み、絵に表す準備ができます。

(2) アイデアスケッチの効果

イメージが広がっても、すぐに絵がかけられるものではありません。発達の段階が上がるにつれ、真っ白い画用紙を前にして、かけなくなる児童が多くなります。先の見通しがもてないことへの不安ですから、これも児童が成長している証です。そこで、児童の実態にもよりますが、イメージマップで見付けた事柄を基に、たくさんのアイデアスケッチ 図2に挑戦する経験を与えて

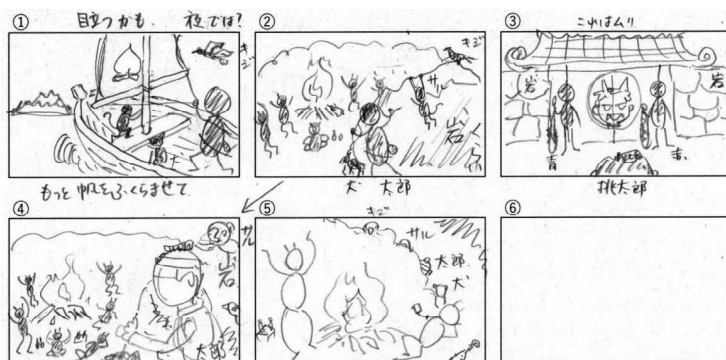


図2 アイデアスケッチ「桃太郎」

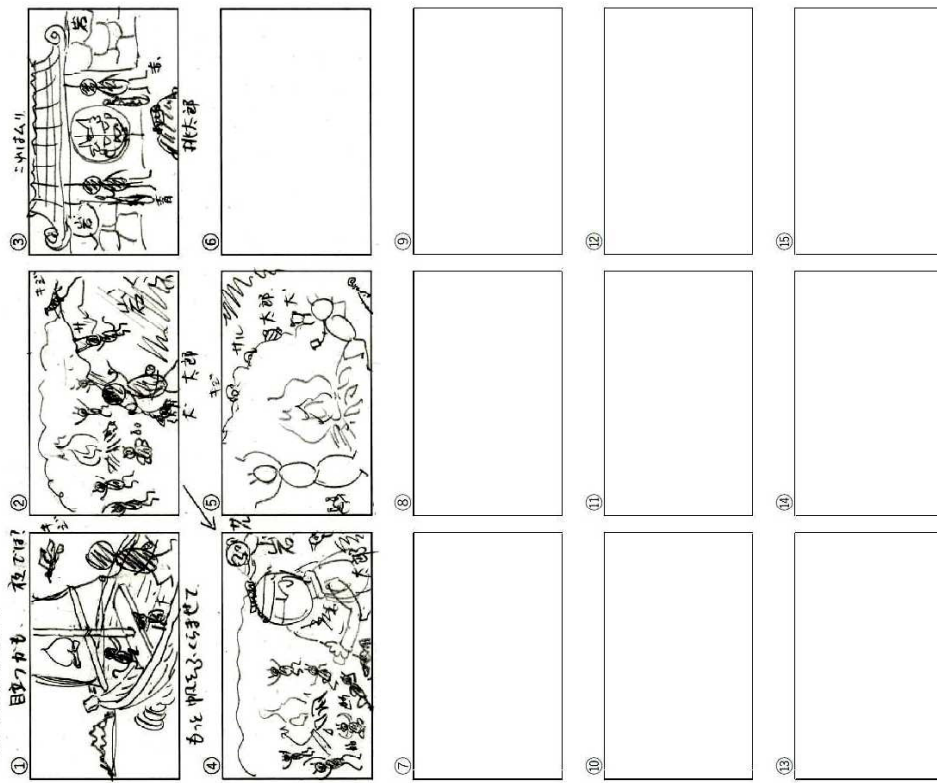
ください。その中に児童自身が納得する構図が生まれ、白い画用紙が恐くなります。

〈留意すること〉 アイデアスケッチをすることだけが目的とならないように

発達の段階によっては、多くのアイデアスケッチを必要としない児童もいます。アイデアスケッチを絶対にかくことが目的となったり、どの授業でもアイデアスケッチに取り組ませたりといった硬直した指導になると、表現への息苦しさを感じ、表現から遠ざかってしまう児童がいるかも知れません。ある題材では、アイデアスケッチで多視点から考える経験をさせ、ある題材では、希望する児童のみといった、児童の発達の段階や個人差を考慮した取組ができるように留意してください。

〈参考資料①〉 イメージマップとアイデアスケッチのワークシート

- 5 アイデアスケッチ…「質は量の中にあり！」たくさんかいてみましょう。
簡単でもいいので、アイデアスケッチをたくさんかいてみましょう。見る角度を変えたり（前、後ろ、横、ななめ上、ななめ下）、ななめにかたむけたり、背景を変えたり、細かいところをかいてみたり、大小のバランスを変えてみたり、小物だけをかいてみたり、人物のポーズを変えたりと、できることはいっぱいあります。どれだけでもかきこんでみることをおすすめします。



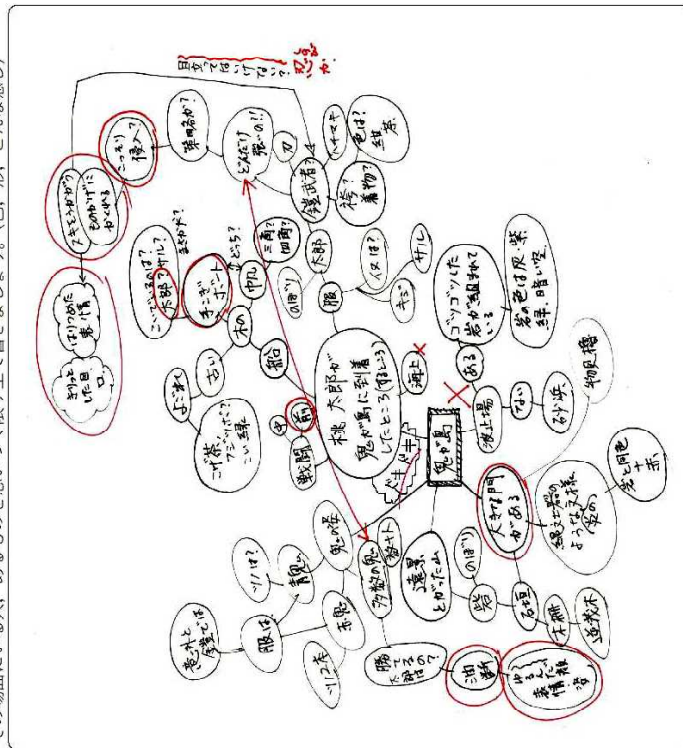
〈参考資料〉 題材の導入で使用する「読書感想画ワークシート」(例)

読書感想画ワークシート

() 年 () 組 名前 () 記入例

- 1 本の題名 桃太郎 (〇〇社)
- 2 主題 (どんな場面をどのような感じにかきたいですか? どのようなことを伝えたいですか?)
桃太郎が鬼ヶ島に乗り込むときの場面を緊張感が伝わるように。
(物語ではさっと通り過ぎてしまったけれど、実はすごく緊張する瞬間だと想像したら、ドキドキしてきたから。)

- 3 イメージマップ(ウェビング)
その場面にいる人、あるものを思いつく限り全て書きましょう。(色、形、どんな感じ)



- 4 書いたものの中から、書くものをしほりこみ、赤えんぴつで○をつけましょう。

11 導入における授業の流れ

導入における2時間の流れは次のような例になります。

過程	主な学習活動	時間	指導上の留意点（◇評価）	備 考
思いをもつ・見通す	1 参考作品を鑑賞し、活動への意欲と見通しをもつ。 ・「〇〇な感じ」が伝わってくるな。 ・どこからそう感じるのかな。形かな。色かな。構図かな。筆のタッチかな。 ・「思い(主題)」を表すための工夫って伝わるんだな。 ・すごいな。自分もこんな工夫をしたい。	(分) 10	○ 見通しをもち、主体的に活動に取り組むことができるように、参考作品を提示する。 ○ 作者が、「思い(主題)」が伝わるように工夫して表現していることに気付かせるために、参考作品から受け取った感じを造形的な視点を通して考えさせる。 ○ 鑑賞を通して題材特有の「共通事項」である「色の鮮やかさ」を実感的に理解させる。 ◇ 「思い(主題)」を伝えるためには、形や色の造形的な視点を基にして工夫することを理解し、意欲を高めている。 【話合いの様子、ワークシート】	プロジェクター 参考作品 組画用プレート ワークシート① 「見通し」
	2 題材のめあてをもつ。 心に残った出来事を、思いが伝わるように表現しよう。	2	○ 題材への意欲を高めるために、題材全体を通して目的とすることを明らかにする。	ワークシート① 「見通し」
	3 活動の見通しをもつ。 ・ 8時間で鑑賞までするぞ。 ・ 今日はがんばって発想しよう。できれば下がきまで。	3	○ 活動の見通しをもたせるために、題材全体の計画を示す。 ◇ 題材全体の大まかな見通しと、本時の見通しをもっている。 【ワークシート】	ワークシート① 「見通し」
	4 「思い(主題)」をもつ。 ・ どんな行事があったかな。 ・ キャンプの中でも、たき火で炊飯をしたことに感動したな。火がとてもきれいだった。	10	○ いろいろな行事を思い出させるために、思い出した行事について話し合わせる。 ○ 明確な「思い(主題)」をもたせるために、「キャンプ」といった行事名だけではなく、そこでの、どのような感動を表現したいのかまで書かせる。 ◇ 思いを明確にしている。【ワークシート】	ワークシート② 「思い」
	5 イメージマップで発想を広げる。 ・ そのときの色は？形は？どんなものが？	15	○ イメージマップを用いて、感動したそのときの様子を造形的な視点を用いて連想させていく。「共通事項」を意識させ、色の美しさについても考えさせる。 ○ イメージマップの中から、絵に表したいものを赤丸で囲むようにし、作品のイメージを捉えさせる。	ワークシート③ 「イメージマップ」
	6 アイデアスケッチをかく。 ・ いろいろな方向から考えたら面白いな。 ・ こんなものもあると、感じが出るな。	20	○ 「思い(主題)」に合った構図になるように、多方向から見た図や、状況を変化させた図、登場人物の配置を変えた図など、多様なアイデアスケッチに挑戦させる。 ◇ イメージやアイデアを広げているか。 【ワークシート、アイデアスケッチ】	ワークシート④ 「アイデアスケッチ」
	7 中間鑑賞を行う。 ・ 自分の思いは「〇〇の△△な感動を伝えたい。」です。このアイデアスケッチが一番いいなと思っているのですが、アドバイスをください。 ・ みんなのアイデアをメモしておこう。	15	○ 自信をもって下がきができるように、自分の思いを基にしたアイデアスケッチを紹介し合い、意見の交流をさせる。 ○ 参考になる意見はワークシートに記録しておくようにする ◇ 自他のアイデアスケッチを造形的な視点を通して鑑賞している。 【中間鑑賞ワークシート】	ワークシート⑤ 「中間鑑賞」
表す	8 下がきをする。 ・ どんな大きさでかこうかな。 ・ こころは詳しくかきたいな。	10	○ 児童が表現に合わせて選べるように数種類の用紙を準備する。 ○ 次の活動でも下がきを継続することを伝える。	各種用紙 描画材
	9 学習を振り返る。 ・ これまで発想は苦手だったけど、うまくいったよ。	5	○ 学びを深め、意欲を高めるために、この時間に発見したことや分かったこと、自分ができるようになったこと、次時に頑張ることなどをまとめる。	ワークシート① 「振り返り」



Q① スケッチ大会では、題材選びにいつも悩めます。特に高学年にはどのような題材を選ばせたらよいでしょうか。

A スケッチ大会などの対象を見て表現する活動は、児童が絵に表したい「思い(主題)」を基に、対象を観察して対象の造形的な特徴を発見しながら絵に表すことに意義があります。高学年の児童に育成したい資質・能力が他にありましたら、スケッチ大会ではなく、他の題材を設定してはいかがでしょうか。児童が「表現したい。」という高い意欲をもてる題材づくりを、社会科や総合的な学習の時間といった他教科等の関連を探ってみることをおすすめします。

Q② インターネット上で見付けた作品を、参考作品として見せても大丈夫ですか。

A 大丈夫です。著作権法第35条によると、著作者の利益を不当に害することとなる場合を除き、「授業の過程における使用に供することを目的とする場合には、必要と認められる限度において、公表された著作物を複製することができる。」とありますので、インターネット上で見付けた作品を参考作品として見せることは問題ありません。

Q③ 絵に表す単元が少なくなっている中で、どのように指導の工夫をすればよいでしょうか。

A 小学校学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」において、「工作に表すことの内容に配当する授業時数が、絵や立体に表すことの内容に配当する時数とおよそ等しくなるように計画すること。」とあり、年間における絵に表す題材数が少なくなっています。児童の資質・能力をよりよく育成できるように、題材ごとにねらいを定めた計画を立ててください。

Q④ 児童の興味・関心を引く導入の在り方…こんな作品をつくってみたいという思いを導入で引き出したいと思っていますが、何をかいたりつくったりすればよいのか決めるのに時間をかけ過ぎないようにしたいです。よい方法があれば教えてください。

A 児童生徒が意欲的に取り組みたくなるように、単に「かく・つくる」のではなく、その背景(必要性)の物語をつくったり、設定したりするなど、表現の必要感を感じさせる題材設定を行い、導入を工夫しましょう。「これをしたらよい。」という絶対的な題材はありませんので、児童を知っている教師のアイデアが大切です。また「何をかいたりつくったりすれば思いが伝わるのか」と思考し、判断することは資質・能力を育成する上で重要なことです。イメージマップ等でイメージを広げ、小さなアイデアスケッチに取り組みさせるような時間を設定してください。じっくり時間を掛けるためには、題材全体の時数を見直す必要があります。

Q⑤ 図画工作の時間全体を通して、友達作品をまねする児童がいます。その児童の感じたことやかきたいことを引き出すにはどうしたらよいでしょうか。

A まずは、「まねをすることは悪いことか。」ということから考える必要があります。発想が広がらないとき、児童は教室中を見渡します。もちろん友達のアプローチも見ます。それに影響を受けて発想する児童もいます。全く「同じ」→「自分なりの広がりや工夫」へと導いてください。

また、まねが生まれにくい題材にするためには、自分事になるような題材設定も効果的です。「私だけの…」、「私の思い出の風景」等。そして、参考作品の鑑賞から。「思い(主題)」をどのように工夫して表現したかを読み取る鑑賞をすることで、本題材で何を目的とするのか判ります。そして発想・構想に十分な時間をかけることです。イメージマップやアイデアスケッチに取り組ませてください。

コラム
⑤

〈創造性の発揮について〉

鹿児島県総合教育センター令和元年度長期研修者である尾前智子教諭（鹿児島市立広木小学校）の研究によると、創造性を育むためには、創造活動を繰り返すことが大切であること、また、「発想前構造」と呼ばれる発想の素になるものがあると、児童の発想が進んでいくことが明らかになりました。また、発想を生み出すための、「ひらめきカード」（下図）は、児童のみならず、大人でも発想を広げていく際に参考になるものです。一覧表のまま提示しても面白いですが、一枚一枚を切り離し、カード状にして提示することで、より発想への刺激になるようです。

☆☆☆ ひらめきシート ☆☆☆

形をかえることは できないかな	物語を考えてみよう	ならべてみよう	色から考えてみよう	まず、題名から 考えてみよう	「まるで○○のよう だ」と、たえてみよう	はつきりさせよう
見えなかつたものを 見えるようにできな いかな	一つだけ アビールしてみよう	さかさまに してみよう	数を数えてみよう	細かいところから やってみよう	「どうしたら○○で きるか」と、 自分にきいてみよう	まねをしてから 変化をつけよう
小さくしてみよう 大きくしてみよう	組み合わせでみよう	バランスを くずしてみよう	くり返してみよう	いろいろなものを 組み合わせてみよう	思いつく中を ながそう	フワフワするかな
素材を変えてみたら どうなるかな	動植物や自然から ヒントをもらおう	明るくしてみよう 暗くしてみよう	小さな 歩を ふみだそう	「もし、○○だったら くと、考えてみよう	失敗を 成功にかえよう	誰かに聞いてみよう

知的創造研究会編著 「ひらめきスイッチ大全」 2018年 日本経済新聞出版社 参考

コラム
⑥

〈図画工作科・美術科において造形的な視点を働かせることの価値〉

私たちの身の回りには、様々な形や色彩、材料や光といった造形の要素が働き、それらが複雑に組み合わせり様々なイメージがつくりだされています。私たちは日々、それらに出合いながら生活しています。

例えば、身近にある「はさみ」にふと目をとめ、その握りの形や素材のよさ、色合いの面白さ、刃の形の工夫などを感じ取り感動した人は、そのよさを生み出した作り手の試行錯誤に思いをはせるかもしれません。また、そのよさを話題にして友人とコミュニケーションが進むかもしれませんし、そこから新たなアイデアが生み出されるかもしれません。造形的な視点を発揮できることが生活を豊かにし、コミュニケーションの基盤となるのです。

しかしながら、同じものを見てもよさや美しさを感じる人もいれば、そうでない人もいます。どれだけ多くのよさや美しさが自分の身近な生活の中にあっても、造形的な視点が身に付いていなければ、気付かずに通り過ぎてしまいます。そして、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力も十分に育っていかないのです。

12 線描の材料と用具

主な描画材として彩色に水彩絵の具を使用することを前提として、支持体である用紙と、線描材についてまとめました。様々な用紙と線描材を体験した上で、**児童が自分で選択できることが望ましい**のですが、予算の都合上難しいかも知れません。**多くの用紙と、多様な線描材があり、何を使って表現してもよいことを教師が理解していることが大切**です。

1 用紙の特徴

用紙	特徴(よさ)	配慮すべき点など
画用紙	吸い込みがよい。 拭き取りは少々できる。 多用途であり、校内に多く準備されている。	価格は重量による。 給水し、波打つことがある。 ケント紙に分類されることもある。
ケント紙	発色がよい。水張りができる。 拭き取りは少々できる。	一枚あたりの単価が高い。 (値段は質による)
色画用紙	背景色が既に存在している。 白も色として使える。	パス・絵の具の発色が変わる。(補色関係に注意)
マニラボール紙 白ボール紙	拭き取りが可能。 波打つことはほとんどない。	吸水しない。重色ができない。 梱包用であり、画面が堅牢である。
キャンパス紙	凹凸があり、重色やドライブラシに適する。 発色がよい。ある程度拭き取れる。	一枚あたりの単価が高い。 凹凸に抵抗感を感じることもある。
水彩紙 (ワトソン紙など)	吸い込みがよく、透明水彩の発色に適する。 拭き取りは不可能。基本的に重色する。	一枚あたりの単価が高い。

2 描画材(線描材)の特徴

描画材	特徴(よさ)	配慮すべき点など
鉛筆	消すことができる。	彩色すると見えにくくなる。
クレヨン パス	発色・太さ・粘度等、高性能である。水彩絵の具のはじきも期待できる。高学年もOK。	細い線をかきづらくなる。(折って角を使う方法がある。)
色鉛筆	細い線がかけ、細部まで彩色できる。色数が豊富。重ねて混色も可能。	発色が弱いので、絵の具と併用すると見えなくなる。
水性サインペン	細いが強い線が引ける。色々な色がある。水彩絵の具との併用でにじみが出る。	にじむために彩色で悩むこともある。
油性ペン	水に流れない。にじまない。強い線が引ける。水をはじかない。	均一の線になりがちになる。
割り箸ペン (墨汁)	線に意外性(面白さ)がある。 水に流れない。墨汁独特の輝きがある。	思いどおりの線にならない。墨容器の扱いに注意。洗える墨汁は水でにじみ色が濁る。
スケッチペン	ペン先が平たくなっているので、細線と太線をかき分けられる。水に流れない。	特別に購入するため、別途、費用が必要となる。

コラム ⑦

〈下がきなしで、割り箸ペン(墨汁)で直接かかせた方がよいのですか？〉

そもそも、下がきなしに割り箸ペン(+墨汁)でかかせる意図は何でしょうか。

「線の面白さ(意外性)が自然に出るので、児童らしい絵になる。線の揺れや間違えたところも児童らしい。」等の、「**児童らしい、面白い絵をかかせるため。**」という教師側の意図で使わせるのであれば、「**目的を完全に間違えています。**」と言わざるを得ません。

どんな描画材でも、楽しく自在に線描できる児童が、「**輝く墨汁の線を生かしたい。**」と、自ら選んで使用したり、教師の「**様々な描画材を体験させたい。**」という理由であえて使わせたりするというのであれば、使うことがあるかもしれません。

各学校でクロッキータイムなどの時間が確保され、児童が下がきなしで一気にかく経験を積み重ねていた20年以上昔ならば、児童は割り箸ペンを用いて、下がきなしに思うままに線描することができたかもしれませんが、絵に表す時間自体が減少している現在です。経験させていないことを無理に要求するのは児童にとって極めて酷な話だと思いませんか。

**Q① 用具や材料について教えてください。**

A 文部科学省のホームページに「図画工作科で扱う材料や用具」のページがあります。授業前～授業後までの扱いが詳しく掲載されていますので、参考にしてください。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zukou/index.htm

Q② 絵をかくときの紙は、マニラボール紙がよいのですか。

A 絵をかくための支持体は、画用紙だけでなく、色画用紙、水彩紙など、様々な紙がありますので、マニラボール紙はその中の選択肢の一つです。数種類の用紙を準備をすることができるのでしたら、児童自身が自分の思いを表現するのに最も合う紙質や大きさ、形、色を考えて、紙を選ぶことができるような手立ても考えてみてください。

Q③ 低学年の線描材は、クレヨンその他にはどのようなものがありますか。クレヨンだと、細かいところが線でかけないので、困ってしまう児童がいます。

A 学習指導要領解説では、低学年での身近で扱いやすい用具として「クレヨン、パスなどの描画材料」と例示されていますが、「など」ですので、児童が使いやすければ、どのような描画材を使っても構いません。細かい部分をかきたいのであれば、カラーペンや色鉛筆もよい描画材になりますし、クレヨンを折って使えば、ある程度は細い線进行かくことも可能です。クレヨンのよさは線そのものの美しさや、重なりによる混色、塗りつぶしによる彩色などと、表現の幅が広く、扱いやすいことです。児童の思いを受け止めて柔軟な対応をしてください。

コラム

⑧

〈マニラボール紙について〉

マニラボール紙は表面がコートされている紙とベースになる紙とが積層して作られた紙です。そのため、水彩絵の具で彩色しても、ほとんど波打つことがなく、絵の具は、乾いても表面の上で固まっているだけですから、水分を含ませることで容易に拭き取ることができます。これらが、マニラボール紙が好んで使われている大きな理由でしょう。

ところが、水彩絵の具は、本来、水分と共に紙に染みこみ、水分が乾燥することで定着し、美しく発色するようにつくられています。彩色の方法としても、水分を多く含ませ透明に溶いた色を重ねて彩色する「重色」や、水が乾かないうちに次の色を置いてにじませる技法で表現しますが、これらの方法はマニラボール紙ではできません。また、コート面はパスが滑るので、パスとの相性もありよくありません。パレット上で混色してつくった色を重厚に重ねて彩色する方法を中心に表現するのであれば、マニラボール紙は優れた支持体ですが、表現方法はかなり限られたものになります。

鹿児島県では、以前からマニラボール紙に絵をかくことが慣例となってきましたが、実は、マニラボール紙に絵をかくのは鹿児島県独特のものです。記録がありませんが、おそらく、遠い昔に先輩方が、「彩色が苦手な児童でも、失敗を恐れず、自由闊達に絵をかける紙は何か。」という研究の末に、マニラボール紙にたどり着いたのではないかと推察します。先輩方の児童の表現への熱い思いは受け継ぎながらも、失敗を拭き取り、なかったことにして表現していくのではなく、失敗は当然あるものとし、それを生かして表現したり、工夫して改善したりすることに価値があると考えていくことを大切にす時代が来しました。先生方が、「マニラボールでなければならない。」という既成概念から解き放たれ、選択肢の一つとして認識して下さることを切に願います。

13 線描のポイント〈低学年〉

低学年の児童は、見たものをじっくりと観察して正確に表現するというよりも、思い浮かんだことや楽しかった思い出、空想の物語などを好んで表現することが多いようです。つまり、**低学年の児童の絵は観察的表現ではなく、再現の絵であることを理解するのが基本**となります。そして、何よりも表現する楽しさを存分に味わい、絵をかくのが大好きな状態で、中学年へと進級させてください。

1 低学年に見られる線描の傾向と指導のアイデア

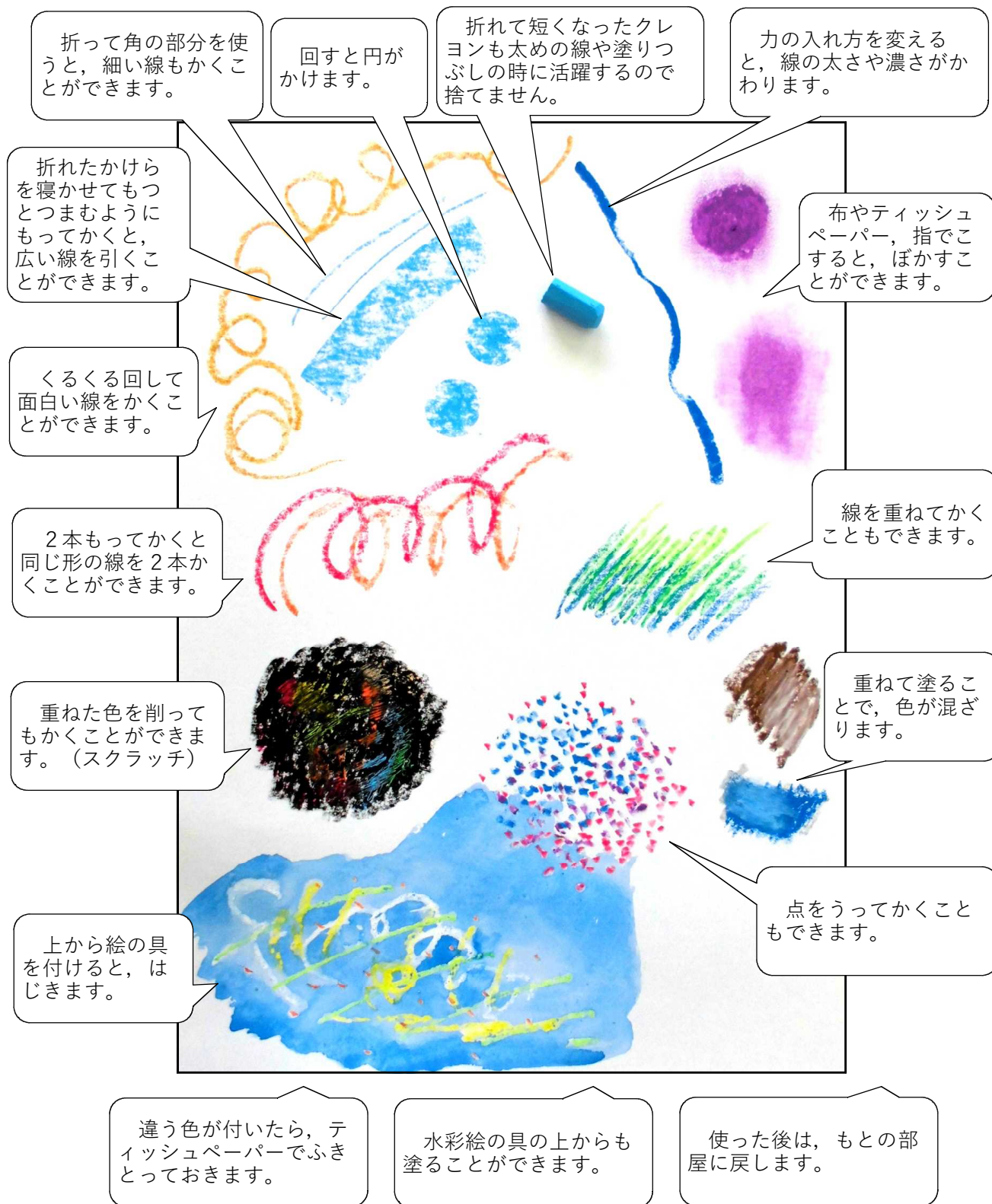
- この時期は、線描と彩色が未分化であり、線をかいてから色を塗るという順序性も特に気にすることなくかいています。そのため、クレヨンやパスなどの、線もかけて面も塗れる描画材が表現に適しています。
 - クレヨン・パスでなければならないわけではありません。水性・油性ペンを使っても線描も効果的です。
 - 水性ペンで線描する場合は、水彩絵の具での彩色でにじみ流れることも考慮してください。
- 気持ちと、手や体全体の感覚が一体となった時に、表現する楽しさを味わうことができますので、指や手、体全体を動かしながら表現できるような、表現方法や環境設定の工夫が大切です。
 - 立ってかかえると、動きながら全身でかくので、ダイナミックな表現ができます。
 - 下に新聞紙を引くと、はみ出すことを気にせずにかくことができます。
- 概念化されて表現されるので、形は単純化されます。
 - 「よく見てかきなさい。」では難しい。何があるのか、どんな感じなのかを問いかけてください。
- 児童となるべく話をして「何をしているところなのか。」「何が楽しかったのか。」などを引き出します。
 - 画面がさびしく、児童の思いが達成されていない場合は、『ほかに楽しかったことはない?』、『いっしょに誰がいたの?』、『これからどんなことをしたい?』、『もっと楽しくなるには、どうすればいいと思う?』と、児童の発想を広げる支援を行います。
 - 自分や友達を画面にかき入れると、画面の中でお話が広がり、思いが伝わりやすくなります。
- 画用紙の大きさに対して主人公が小さくなりがちです。
 - 空がき（指がき）で、画用紙の大体どこにかくか、当たりをつけて見通しをもたせます。
 - ※ そのとおりにならなくてもよいです。楽しく想像を膨らませ、広げていくことが大切です。
 - 必要に応じて、一番かきたいものを大きくかくことの大切さを共通理解します。また、中心になる人やものの大きさをどのくらいの大きさでかくか考えさせることもあります。
- にぎる手や走っている足など、人や動物などの動きを意識させます。表現が正確（見えたとおり）である必要はありません。その気付きと気付きを表現できたことを大切にします。
- よく見て考えながらのゆっくりとした線もよいし、勢いのある線も美しい。制限はしません。
- 決められた色だけではなく、好きな色で（いろいろな色で）表現できると明るくなります。

コラム 9

〈よい作品とはどんな作品なのかを考えさせましょう〉

発達の段階が進むにつれ、児童は自他の作品を比べ、「上手であるか」が気になりがちです。特に見たことから「思い(主題)」を定めて表現する題材を設定し始める中学年以降では、作品が完成した後、何も配慮しないでいると、「『できればのよい絵』や『詳細に表現された絵』がよい絵である。」という認識が発生し、「自分ではできなかった。」と感じた児童に、絵をかくこと自体への「苦手意識」が生まれてしまいがちです。これは防ぎたいところですので、教師は、表現している途中から、**児童の「思い(主題)」が工夫して表された多様な表現を、それぞれの表現の価値を明らかにしながら称賛していることが大切です。**また、互いの作品を鑑賞する際には、**それぞれの作品の表現が、作者の「思い(主題)」とどのように関連しているのかを見付けたり、自分が感じるよさを伝え合ったりする活動を通して、互いの表現を大切なものとして認め合うことが重要**になります。ぜひ低学年の頃から繰り返し取り扱ってください。

14 クレヨン、パスによる表現



※ クレヨンは、中学年以降も活躍します。絵の具セットへ入れておきましょう。

〈留意すること〉 個人用の水彩絵の具は中学年で紹介されています

小学校入学と同時に水彩絵の具を購入することが多いようですが、小学校学習指導要領解説「図画工作編」では、水彩絵の具は、中学年に登場しています。低学年での水彩絵の具の使用は、絵の具の「まぜまぜ大会」になりがちであり、作品をよりよくするために工夫して彩色するというよりは、作品を壊してしまいがちです。低学年では、ちょうどクレヨンをはじく程度に溶いた共用の絵の具、共用の筆を準備することをおすすめします。



Q① 絵が小さくなってしまいう児童，何回も消しゴムで消してかき直す児童が多いと感じています。思いっきりのびのびとかかせる指導法や声掛けがあれば教えてください。

A そのように気になる表現をする児童にはそれぞれの理由（背景）がありますので，どうしてそのような表現をするのかなと推察することは大切なことだと思います。「これまでに絵が上手ではないと言われたのかな。」，「見栄えがよい絵でないと許せないのかな。」，「絵をかくことに慣れていないのかな。」等々。その児童が思いっきりかけるようになるにはどうすればよいかも，対処法は，それぞれになります。アイデアでは，線描のポイントにありますので参考にしてください。

もう一つの考え方としては，「小さな絵ではダメなのか。」ということです。小さい絵をかきたい児童もいます。小さい絵を台紙に貼ることで価値付けることもできます。大きくする必要があるならば，本人の許可を得ながらになりますが，小さくかかれた作品をコピー機で画用紙に拡大コピーをすることも，可能性として考えて頂きたいと思います。

Q② 児童のかく人物が，まんがやアニメの絵のようになってしまいうのですが，どのように考え，指導したらよいでしょうか。

A 他の児童による人物表現と比較することなく，そのように，人物表現できたことを称賛してください。児童は，大好きなまんがやアニメの人物をかきたいと，日頃からその人物の形をじっくりと観察し，形を発見しながら練習し，ついには形やバランスを理解し，見ないでもかけるようになるわけです。これは，その児童が，自ら造形的な視点で対象を捉えていた証です。そのように資質・能力を発揮しながら一生懸命かけるようになった絵を「そうかくのではない。」と，教師の「児童画はこうあるべきだ。」という固定観念から否定するのは，実に悲しいことです。ですから，まずは，本人が「思い(主題)」を実現するために，人物がかけたことを称賛しましょう。その上で理解しておきたいことは，児童がかくまんがやアニメのような人物表現は，概念的な絵であるということです。児童が，自分の「思い(主題)」を達成させるためにはこの人物表現ではできないと感じたその時に，観察的表現を児童に提供することができるとよいと考えます。

※ 美術の世界は，作者の「思い(主題)」が表現されていれば，基本的にどのような表現でも作品として認められる世界です。その流れで考えると，まずは，児童の表現を認めるところから始めてください。

Q③ 自分なりの表し方ができない児童にはどのような指導をすればよいですか。

A 自分なりの表し方ができない理由の一つは，かいて表現することに慣れていない上に，画用紙一枚で勝負をしなければならない緊張感（プレッシャー）が大きいのではないかと思います。自分を表現することに積極的な低学年の児童であっても，真っ白な画用紙一枚に絵をかいていくことに苦痛を感じることはあります。例えば，小さな紙に試作ができたり，画用紙が2枚あったりといった余裕のある設定をすることができれば，もっと，自分なりに工夫した表現をすることができると考えます。

現代芸術の中では，「完全なオリジナルの作品は存在しない。」という考え方があります。既にある何かから影響を受けて，またはひらめきを感じて新しいオリジナルが生まれるという考えです。児童の表現も同じです。友達の表現，参考作品に影響を受けることは当然あります。「自分だけのオリジナルでなければならない。」という概念が，児童の表現を窮屈にしているかも知れません。その児童らしさは，元来もっている，既にあるものではなく，様々な影響を受けながら新たに創り出していくものです。模倣は悪いことではないということを前提とし，全てを写し取るのではなく，少し自分なりの工夫をできることを称賛したいものです。

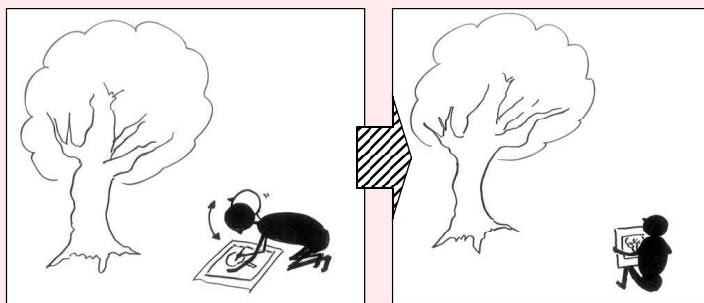
15 線描のポイント〈中学年〉

1 中学年に見られる線描の傾向

- 「思い(主題)」にこだわりをもって表現できる学年ですから、**かきたいものにこだわり、そこから順に奥や周辺へ広げながら表現していく**ことが多いようです。
- 奥や周辺の表現による遠近感を、「**重なり**」や「**大小関係**」で表現することができるようになる学年です。〔共通事項〕として設定し、活動中も繰り返し声を掛けます。
- **重なっている後ろの部分は見えないこと**(重なり)への気付きは理解しやすいので、知ることで、活用することができます。同様に、**手前にあるものは大きく、奥にあるものは小さい**という大小による遠近についても、気付かせるようにします。
- 見たことから「思い(主題)」をもつことができます。形の特徴を捉えられるように、よく観察させることも大切です。輪郭線を追いかけてかくことに気付くと、概念的な表現から、見て発見したことをかく表現に変わっていきます。
- 「思い(主題)」を伝えるためには、くわしくかくことが必要であることに気付かせます。
… 「くわしく」が伝わりにくいので、具体的に話します。**細かいところまで観察**し、そこにあるものや**輪郭線**を丁寧な線でかき込むことが大切です。
- 想像をふくらませ、画面を楽しく構成できるのもこの年代の特徴です。
- 画面から線がはみ出すと**画面の外にまで世界が広がる**ことに気付ける学年です。
- えんぴつでかき始める児童が増えます。自分だけの世界から、友達との関係性が広がる発達の段階から考えて、より慎重になるのは当然のことです。後でペンでかくときにつぶれないように、大きめにかくことを助言しておく必要があります。

〈留意すること〉 対象と画面の方向をそろえる

対象を見て描くとき、画用紙が下にあると、対象を見て、形や色、質感について発見したことをかこうと、視線が画面に動いている間に、見たことが抽象化されてしまいます。画面をなるべく対象と同じ方向に設置し、首を振る距離を短くし、視線の移動だけでかけるようにすると、見て発見できたことを、画面に表現することができるようになります。観察的表現の基本になります。



〈留意すること〉 スケッチ会でのちょっとしたポイント

- スケッチは、対象を見つめることを通して、特徴を発見し、絵に表す活動です。対象を造形的な視点で見つめ、対象の造形的な特徴を発見することが大切です。
- 画用紙の上で空がき(指がき)し、およそどこにかくか、当たりをつけるのはどの学年でも有効です。
- 風景をかく際に、指で四角をつくり、風景を切り取ってみるのもイメージをつかみやすいので有効です。(中学年以上。)
- 中心から外へ、「手前・近景」から「遠景」へかくことを意識させます。自然な重なりや大小表現から遠近が表現できます。
- ないものをもってきても、あるものをなくしても全く構いません。
- 天候、季節、時間を実際のものから変更しても全く構いません。
- 「思い(主題)」を伝えるために必要であれば、そこにいなくても人物を入れるのも効果的です。人物が入るとそこに何らかの意味が生じ、見る側が物語の存在を意識します。「思い(主題)」に応じて提案します。
- 屋外でスケッチをする際は、最初の10分間だけでも、一人きりで、しゃべらず真剣に構図を考え、しっかりと見てかく時間をもたせると、絵に表す世界に没頭できます。



16 線描のポイント〈高学年・中学生〉

1 高学年・中学生以降に見られる線描の傾向

絵をかくといっても写実的にかけなくても全く構いませんし、児童が工夫した作品には、必ずよさがあり、それを認めていくことが教師の仕事です。しかしながら、学年が上がるにつれて児童の方が、「写実的にかきたい。」という思いをもつようになるようです。そして、その思いが達成されなければ、「自分はかけない。」「才能がない。」といった否定的な感情が生まれてしまい、絵をかくこと自体を嫌いになっていきます。小学校学習指導要領解説図画工作編にも次のような記述があります。

～(前略)～一方、ある表現形式に対して苦手意識をもったり、感じたことや考えたことを話すことを躊躇したりすることや、**自分が表したいことやもののイメージと、実際に表したこととの違いを感じ、表現することに苦手意識をもつこともある。**この時期の児童の特徴を踏まえた指導計画を作成することが重要である。(p.94)

「こんな感じにかきたいのにかけない。」「できる人がいるのに自分はできない。」という強烈な挫折感、孤独感を味わわせてきたのかも知れません。図画工作科の指導に苦手感を感じている教師は、おそらくこの危機を乗り越える手段を身に付ける機会に恵まれなかったのではないのでしょうか。

実は、この苦手意識を解消する最重要ポイントは、絵をかく技能ではなく「見る力」なのです。

2 造形的な視点で対象を見る

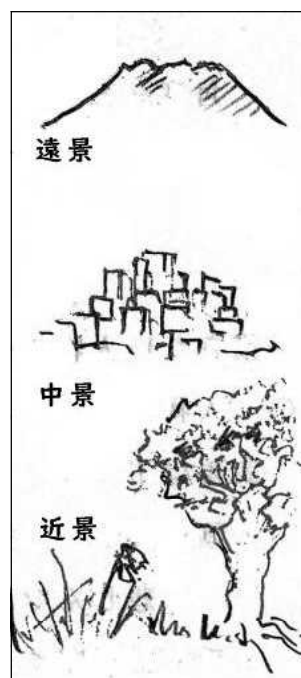
人は、対象を見ているようでよく見ていないことが多いものです。**よく見るためには、「視点」が必要です。**それが、図画工作科・美術科では「形、色、材質、光」といった造形の要素をはじめとする「造形的な視点」です。「どんな形をしているのか。」「色はどうか。」といった視点があってはじめて対象の特徴を捉えることができます。さらに形を捉えるためには、**対象の「輪郭線」を見付ける**必要があります、このことに気付いていない児童もいます。自分の「思い(主題)」を達成するために、視点をもって見ることで思考できるように、視点を与えてください。

- 『自分の思いがよく伝わるのはどの構図だろう。』と、「見る(かく)角度を変える」視点や「画面構成の工夫」という視点で対象を見させる。
- 立体感、遠近感や動きのある構図になるように「斜めの線」を意識して見付ける。
- 「近景・中景・遠景」の区別があると意識して見る。

線描に関わる〔共通事項〕の例 小学校学習指導要領解説 図画工作編から作成

学年	内 容
低	形、線、大きさなどに気付く
中	形の感じ、前後の感じ、重なりなどが分かる
高	動き、奥行き、バランス、方向感、時間的な変化、場所や空間の特徴などを理解する

- 近景の線は太く、遠景の線は細いなどの、「線の強弱」という視点で遠近を考えさせる。など。



コラム 10

〈絵に苦手感がある児童がかいた葉〉

右の写真は、絵の苦手な児童(小5)が「本物そっくり」という造形遊びの中でかいた絵です。実物をすぐ横に置いて、葉の輪郭線のぎざぎざを、方向や長さを意識して追いかけてかくことを助言すると、児童は実物の特徴を捉えた形を表現することができました。児童は、かきながら形を発見していたのです。

児童がかけたのは、視線がずれなかったことが大きな理由だと考えられます。通常、対象を見てかくことがうまくいかないのは、視線のズレが大きく、見てからかくまでのわずかな間に、脳が「見たもの」を「知っているもの」に置き換えてしまうからだと考えられます。



〈対象を見えたようにかくこと（観察的表現）について〉

現代社会において児童は、様々な情報の中で成長しています。児童を取り巻く造形的な情報というと、「漫画」、「アニメーション(アニメ)」、「ゲーム」、「書籍の挿絵」、「テレビ番組」、「CM」等、分類しきれないほどの情報があります。このような状況の中で、児童が、「対象を見えたようにかきたい。」、「思いを表すために本物らしさを表現したい。」という願いをもつことは、ごく自然に生じるものです。児童がこのような強く思い始めるのは、成長の過程においては、メタ認知を身に付け始める頃（およそ中学年後半の頃）からであり、友達と自分の違いを意識し始める頃です。「児童らしい感性や表現を失わないで欲しい。」と願うのは大人の自由ですが、現状はその願いを叶えられる方向には向かっていません。かたくなに写真や資料を参考として見ることを否定される先生方もいらっしゃいますが、児童が「思い(主題)」を実現するために必要としている資料を与えないというのは、あまりにも現実と乖離しているのではないのでしょうか。

さて、児童が求める「対象を見えたように描く」という**観察的表現**は、19世紀英国の哲学者であるコリングウッドが、「人が何かものを描くのは、そのものを見るためだ。描いてしまうまでは、そのものがどんなものであるか判らないからなのだ。」と述べているように、**視点をもって対象を観察し、様々な発見をすることによって成立しています。**

絵を描くことに苦手感をもたれていた先生方が、図画工作科の研修の中で、思っていた以上に描けることに驚かれることがあります。これは、『**観察的表現をするために必要であるが、児童の頃に獲得できなかった「造形的な視点」を理解し、その視点で対象を観察し、対象の特徴を発見したことにより、線で形どることができた**』と捉えることができます。その造形的な視点は次の内容になります。

図1は、顔の各部の一般的な配置を、**顔全体の縦の長さを「1」としたときの全体における比率(バランス)**で説明したものです。顔全体の横の長さを「1」として、幅を決めることもできます。

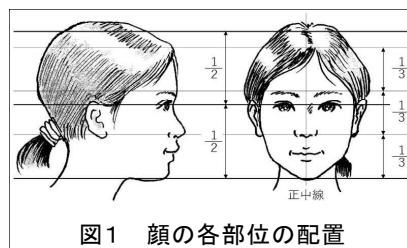


図1 顔の各部位の配置

また図2は、対象の中に自分で基準線を決め、その他の部分が**基準線とどのような関係になっているのか**を発見し、確かめながら描いていく考え方です。「この幅は基準線の1.2倍だ。」とか、「この線は基準線の1/3の部分につながる。」、「基準線に対してこの位の角度で伸びている線だ。」といったように、基準線を基にして対象の形を構成する要素を発見し、表現することができます。

図1、図2のどちらの考え方も、観察的表現の基本となる捉え方であり、中学校美術科の教科書や美術資料集、高等学校芸術科【美術】の教科書等には、このような「比」の視点を用いて対象を捉え、表現する考え方が記載されています。前述した、思っていた以上に描けたと感じた先生方は、何気なく見ていたら気付かない形の特徴について、「**全体における比率**」、「**基準線に対する長さや角度の関係**」といった**造形的な視点**で対象を捉え、新しい発見をすることができたのです。

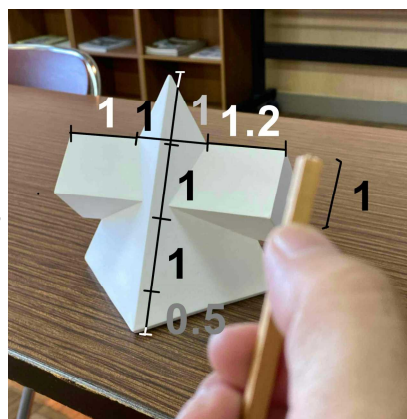


図2 基準線を基にした計測

また、「長さ」や「角度」だけでなく、「質感」や「色」などを視点(「造形的な視点」)として**観察することで、対象の表面の様子(質感)や、微細な色の変化についても発見することができ、それがまた表現に生かされ、実在感を与えていく**のです。

ここで、留意しておきたいのは、小学校図画工作の段階で、この観察的表現を全ての児童に教えるとなると、それは、画一した表現方法を強いることにつながるかも知れません。児童が必要としたときに与える知識であり、技能です。



Q① 「見本がないとかけない。」という児童が多いです。動物や魚をかく活動でも「図鑑を見ないとかけない。」、実際に図鑑を見てかかせる「写真と同じようにかけていない。」と納得しない児童もいます。どのように指導したらよいでしょうか。

A 「本物らしくかきたい。」という児童の思いは、現段階でのその児童の真実の姿です。小学校の時期は、高学年へ向けて、本物そっくりの「写実的な表現」への興味が増す時期です。この児童は何らかの理由で、本物そっくりにかくことについてのこだわりが増していると思われます。本人が「そっくりに描きたい」というこだわりをもっているのも、もし、図鑑等を見ずに概念的な絵をかくと、自分のイメージと自分の絵との違いから、絵に表すこと自体に嫌悪感を感じてしまうかもしれません。何らかの対象を見ずに本物そっくりにかくことは大人でも無理です。「思い(主題)」を達成するために、何らかの資料が必要なわけですから、図鑑等の資料を見てかくことは必然であると言えます。その際、どのような視点をもつかについては「コラム⑪」をご覧ください。

また、「写実的な表現のよさ」だけではなく、いろいろな作品のよさを見付けられる参考作品の鑑賞を行い、特に「思い(主題)」を工夫して表現することのよさを実感させたり、全く具象ではない表現に取り組ませたりすることで、「本物そっくりでなければならない。」という児童の意識を変え、考えて自由に表現していく楽しさを味わわせたいものです。

Q② 構図の取り方が上手いかず、似たような絵になってしまいます。よい指導法はありますか。また、発達の段階に応じた構図の指導のポイントがありますか。

A 構図に関する指導は、中学校美術科で行いますので、図画工作科では指導をする必要はありません。似たような絵になるのは、十分に構図を練ることができていないからです。つまり、下がきをするまでが大切になります。自分の思いを伝えるためにはどんなものの配置(構図)がいいのかを試すことができると、絵に変化が生まれます。イメージを広げ、小さくてよいので多くのアイデアスケッチを試す機会を設定してください。(p.14を参照)

低学年の児童にはアイデアスケッチは難しいですので、構図を考えさせる方法としては、紙販画が指導しやすいでしょう。部品をつくり、それを画面上でいろいろなところに置いてバランスを取ることで画面をつくる面白さを感じながら表現することができます。

Q③ 絵に表す活動で、背景をかかせようとすると、苦手な児童は空に雲と太陽をかいてしまうことが多いのですが、よい指導方法はないでしょうか。

A 自分の「思い(主題)」を実現するためには、そもそも背景が必要なのか、児童に考えさせることが大切です。必要であるとなったときに、何をかくのか思考することになりますが、「何か背景をかこう。」という助言だけでは、児童の思考は進みません。児童が空に雲と太陽をかくのは、その空間に何かを存在させる必要性を感じた結果です。太陽を手で隠して見てみると、太陽が必要であることを感じるができるでしょう。雲と太陽でない何かが必要であるならば、「思い(主題)」を実現するために、どのような背景がよいのかを、いくつかの方向性を挙げて考えさせ、試し紙に試させるなどの挑戦する機会を与えてみると、違う表現に至るかも知れません。出来映えのよい作品をかかせることが目的ではありません。試行錯誤して表現する中で資質・能力を育むことが大切です。

Q④ ダイナミックにかかせるコツを教えてください。

A 絵に表す活動はダイナミックでなくても構いません。ダイナミックにかかせることなしに目標を達成できないのならば、ダイナミックにかける環境(新聞紙を敷いて、はみ出せるようにする)や、ダイナミックにかきたくなる仕掛け(物語や必然性)を考えることが大切です。

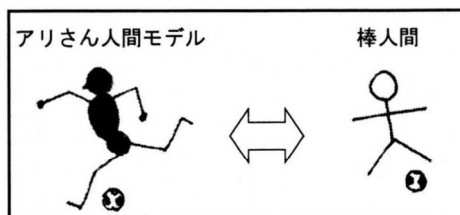
「関節」という視点に気付かせる（アリさん人間モデル）

児童には、人物は正面からかくという固定概念があるようです。意欲的に横顔に挑戦する児童もありますが、体は正面を向いていることが多いようです。観察し、人の形を発見し、かく経験を積み重ねなければ、人の姿をかくのはなかなか難しいことです。

そんな中で、本講座資料の様々なところで活躍している「アリさん人間モデル」。関節や顔の向きに気付かせるのによりショート題材になるかもしれません。

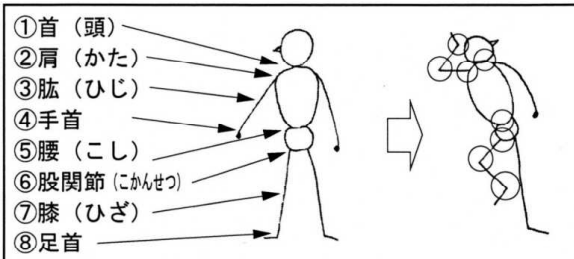
1 アリさん人間モデルについて

頭や胴を黒く塗りつぶした楕円で表現し、腕や足は線で表現します。児童がよくかく「棒人間」とは異なります。デザイナーや漫画家がよく使う人体モデルに近い考え方です。



2 人の体の動くところを調べよう

人の体は、関節で動きます。人の絵をかくときに大きく関係するのが、右図の八つの関節です。（背骨は意識しづらいのであえて外してあります。）この八つの関節を曲げることで人の体は動いて見えます。

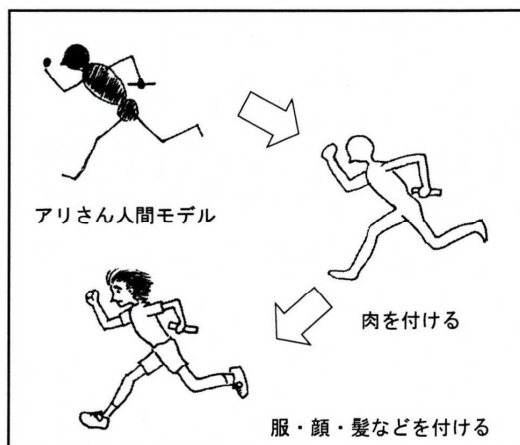


首を曲げてかくのは難しいので、頭の向きを変えることで表します。顔の向きは鼻で表現します。気を付けることは、絶対に曲がらない方向があることです。

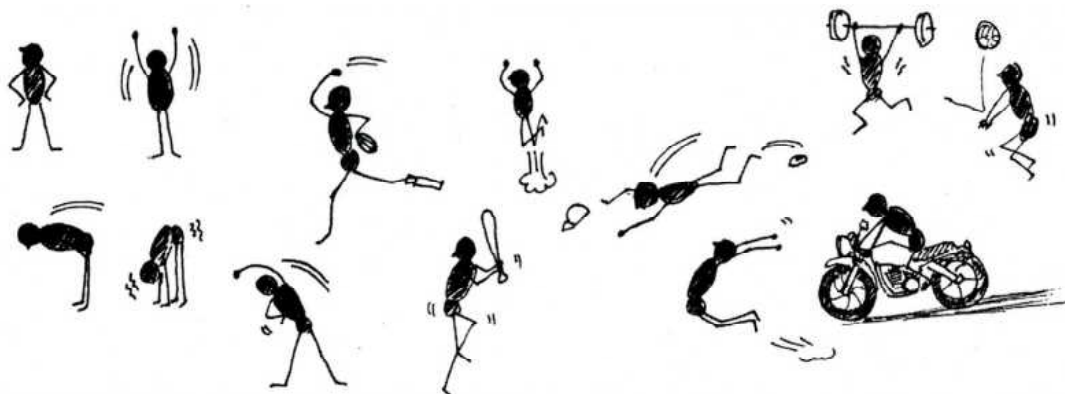
3 アリさん人間モデルを絵に生かす

想像で人をかくときには、このアリさん人間モデルが活躍します。

表したい動きをアリさん人間モデルでかいておき（黒く塗りつぶさない方がよい）、筋肉を付け服を着せると、人体ができます。頭部も、鼻の位置に気を付け、顔のパーツと髪をかくと、人物ができあがります。



4 アリさん人間モデルでの動きの例



17 水彩絵の具による彩色のポイント(基礎編)

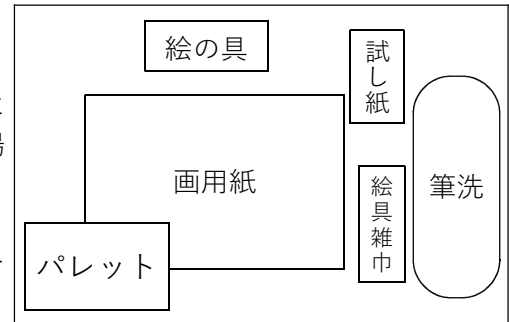
児童向けの水彩絵の具セットとして販売されている水彩絵の具は、「半透明水彩絵の具」です。透明水彩絵の具と不透明水彩絵の具（ガッシュ）のよいところを併せ持つ性質です。基本的には水をよく含ませて彩色する淡水彩の使い方をし、そこから必要に応じて強い表現へと工夫していくことがコツになります。まずは、淡水彩での表現ができるように、水彩絵の具の準備をしましょう。

1 美しく多彩な色を使えるようにするために

児童が彩色する際は、必要と思われる概念的な色(例：木ならば緑と茶色)をパレットに出して、色の変化の少ない作品になりがちです。指導をしなければごく普通にそうやってしまいますので、基本的なことは毎回確認しましょう。

(1) 用具の配置（右図は右利き用。左利き用は逆。）

- 筆洗は、筆を握る手の側に置きます。
 - ※ 筆洗を床に置くと水を使いにくくなるので、机上に置くようにします。用紙が大きくて筆洗を置けない場合は、図工室のような工作台での活動を検討します。
- パレットは手に持つか、机上に置きます。
- 試し紙の他、絵の具雑巾もしくはティッシュペーパーを準備します。



(2) 全色をパレットに出す

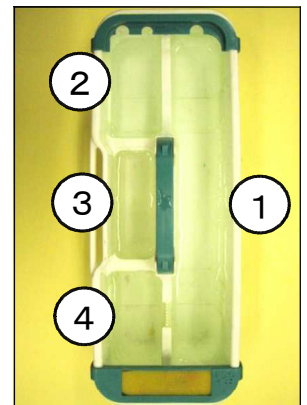
- 最初に、絵の具の全色をごく少量、順序よくパレットの小部屋に出します。
 - ※ 出したからには使いたくなるので、色数が増えます。
 - ※ 全色出すところまでが準備になります。毎時間確認をする必要があります。
 - ※ 同一題材であれば、小部屋に残った絵の具を洗い落とさないうという選択もあります。学級のルールによります。



(3) 水彩絵の具は「水が命」

水彩絵の具での彩色では、水が重要です。

- 筆洗の水の量は、半分以下にします。移動の際の事故を防ぎます。
- 筆洗の各部屋は、「①洗う」、「②すすぐ1」、「③すすぐ2」、「④つくる」の部屋があります。（右写真）
- 色が濁るときは、水が濁っていることが多いようです。色をつくるための水の部屋(④)が汚れ始めたら水替えの時期です。



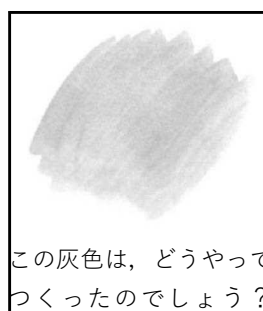
(4) 水のふくませ具合で色が変わる

- 水のふくませ具合で色が変わることを教えましょう。（灰色の写真）

※ 黒と同様に、数色に水を含ませ、グラデーションを見せると、水の含ませ具合で色がつくれることを実感できます。

- 水を多く含ませた透明な色合いで彩色をしたときに、水彩絵の具のよさが発揮されます。その後の重色で、工夫しながら美しく仕上げていくことができます。

※ 油絵のような重厚感のある彩色も可能です。しかし、水の基本的な使い方を身に付けるために、淡水彩の方法から学ばせましょう。



この灰色は、どうやってつくったのでしょうか？



水の含ませ具合で色が変わることを体験させましょう。

(5) 混色の際に注意すること

- 基本的な混色の順番等は必ず教えます。

「①明るい色」+「②暗い色」= 3色（「新しい色」と元の2色）

※ 「明るい色」を先にパレットの混ぜる部屋に出します。逆順になると、明るい色を延々と足して混ぜることになり、気付けば色のプールができています。そして、児童はもったいないので、たっぷり作った色を全面に塗ることになります。…全面○色の絵！

※ 世界で一つだけの自分だけの色（自分の好きな色・きれいな色）を作り出していくことを意識させます。

※ 1色+1色=1色ではなく、1色+1色=3色になるように混ぜます。

- パレットの小さな部屋は冷蔵庫（冷蔵庫で料理する人はいません。）で、混ぜる部屋は調理台のイメージです。混ぜる部屋は、混ぜる場所がなったらティッシュを水でぬらしてふき取ります。
- 混ぜてつくる色の量は10円玉～500円玉くらいの大きさにします。
→「それでは色が足りない。」という児童には、具体物を一緒に見つめ、たとえ同じ色が塗られていても、光の具合や、映り込み、影のために、様々な色が存在していることに気付かせ、変化のある色の方が、実感があることを実感させてください。
- 自分の世界です。そのもの本来の色と違っていても構いません。
- 試し紙があると、自信をもって彩色できるようです。また、試し紙は、そのまま取っておき、絵の具セットに入れておくと、自分がつくれる色として参考にできる可能性があります。
- 彩色の際に、一度作った色を画面上に散らす（点在させる）と、画面に安定感が生まれます。
- 片付け前に、余った絵の具で混色力アップタイムを！…試し紙が重要です。
- 高学年の児童には、影をつけられることが喜びにつながります。「青or藍色」+「茶色」等を水でよく溶き、透明な色にして、もともとの色に重ねると影を表現できます。色は工夫してください。

〈問題〉
①をパレットに先に出すとき、正しくない混色の順番は、A、Bのどちらでしょう。 答え「B」

	①	+	②	→	
A	黄		青		緑
B	赤		黄		橙

(6) 絵の具雑巾（ティッシュペーパー）を活用する

- 「思い（主題）」と合わない色をつくってしまった、そのまま色をつけてしまい、「失敗した。」と頭を抱える児童がいます。色を付けてもすぐに押さえて色が取れるように、机上に「絵の具雑巾」もしくは、「ティッシュペーパー」を準備します。必需品です。

2 後片付けの工夫

- 数分で片付けるコツ…時間が掛かるのは水場です
※ パレットの広い部屋の部分を、濡らしたティッシュペーパーで拭き取ったり、筆洗の①の部屋に漬けて筆で洗ったりすると、机の上でパレットの洗浄が終わります。あとは、水場で筆洗と筆を洗うだけです。
- 絵の具チューブの口は拭いてから蓋をきちんと閉め、乾燥を防ぎます。
- 筆の水分をよくしぼり、穂先を整えながら拭き取ります。
- カビを防止するため、筆洗やパレット、筆の水分を拭き取ってから片付けます。

〈留意すること〉 3原色を混ぜて色をつくることについて

「赤」、「黄」、「青」の3原色と「白」と「黒」で、ほぼ全ての色をつくることができます。このことを生かして、3原色を基にして12色相環をつくり出す混色指導を行うことができます。彩色の際に3原色だけを使わせる先生方は、この原理を生かした指導をされています。基本的な混色を学ばせるためには有効な手立ての一つです。ただし、ここで知っておいて頂きたいのは、3原色で12色相環をつくり出す学習は、不透明水彩絵の具を用いる中学校美術科で行うので、図画工作科であえて行う必要はないということです。そして、半透明水彩絵の具の3原色は厳密な3原色ではないのと、不透明水彩絵の具でないため、混色を進めていくと彩度が落ち、次第に色がくすむので、12色相環を美しく仕上げることは困難です。また、絵の具チューブから出した色が発色がよいことを考えると、彩色の際には全ての色を使える方がよさそうです。

18 彩色のポイント(各学年)

1 低学年

- 1年生に絵の具の使い方を教えるのはとても難しいです。まぜまぜ大会になってしまうので。
- 学級で準備した共用の絵の具数色を、薄く溶いて、筆と一緒に深めの皿に準備しておきましょう。
- 低学年の絵では、線描が美しいので、彩色についてはその線描を壊さないように、水を多めに含んだ絵の具がよいでしょう。
※ 混色せずに、原色を薄め、その色のもつ美しさを生かします。(グループに一皿の絵の具など)
- 「狭いところはパスでぬる。広いところは絵の具でぬる。」といった提案をするとよいようです。その際、「広いところ」＝「手のひらより広いところ」と具体的に指示すると区別しやすくなります。
- もちろん白いところが残って当然です。

2 中学年

- 中学年の絵では、自分なりの色をつくる混色を大切にします。本物の色にこだわらず、自分の好きな色、合う色を自分なりにつくり出して彩色する中に多くの学びがあります。
- 中心(こだわりのあるところ)から彩色します。
- 混色による失敗をしがちなので、最初は、水をしっかりふくませて、透明感のある彩色(淡水彩)をさせることが大切です。拭き取り、重色で復活できます。
- 「思い(主題)」に合わせて、点描などの筆使いの工夫や、にじみ、ぼかしなどを含めたモダンテクニックも楽しく工夫して使える学年です。(p.31を参照)

3 高学年

- 画面の彩色の手順を考えさせましょう。
 - ・ 遠景から彩色すると、近景の細かい彩色を2度行わなくて済んだり、近景の上に遠景の色がはみ出し、色の重なりが遠近の逆になることもありません。
- 遠くのものほど青くかすんで見える空気遠近法にも気付いて生かします。
- 主調色を工夫し、表現したい感じを出すこともできます。
- 表現方法を工夫させます。その際、重色、点描、ドライブラシ、にじみ、ぼかし等を提案できるように表現技法についての知識が教師に欲しいところです。
- 明暗のコントラストも意識させると、工夫できます。

4 その他…共通すること

- 空・海・地面などは筆を横に滑らせる(もしくは点描にする)ことで、遠近感が出ます。縦に筆を使うと物質的な意味が生じてしまい、空・海・地面に見えず、雨や風、物体(障害物)として感じてしまいます。これも気付かせることができるとよいですね。

〈留意すること〉 濁りに注意!

混色は楽しいので、初めて絵の具を使うと「まぜまぜ大会」になりがちです。色を混ぜると違う色ができる楽しさについては、時間を確保して、十分に味わわせてください。

2色+白(黒)程度の色数による混色が理想的です。3色以上になると、補色の関係の混色が生まれやすく、濁る可能性が高くなります。

〈留意すること〉

淡水彩から始めましょう

水を多く含んだ薄い色での彩色は水彩絵の具独特の表現であり、とても美しいものです。淡水彩といいます。しかし、児童によってはもっと強く表現したい児童もいるでしょう。そのときは、混色した色や、白を混ぜた不透明な色を重ねていくことで強い色合いを生み出すことができます。

〈留意すること〉 色のバランス

単調な色になるのは、対象物の固有の色だけを使おうとするからです。パレットに、最初に全色を出すのは、それを防ぐためでもあります。対象物の固有の色は確かにありますが、そこには、光の具合や、影、近くの物の照り返しなどで、違う色も必ず存在しています。そのため、対象物に違う色も少し入れていくことで、存在感を出すことができます。しかも、画面全体の色のバランスがとれるので、いろいろな色を使うことを助言してください。コツは、一度つくった色を画面の他の所にも使っておくことです。

〈留意すること〉 色による構図

色のバランスにも関係しますが、例えば「赤」を画面の中に大きく円を描くように配置していくと、画面の中に、丸い構図が発生します。意識すると、画面上でバランスを取る際に一工夫を加えることができます。

雨や風、物体(障害物)として感じてしま

19 モダンテクニック

意外な効果の出る表現方法として、意図的な効果を狙った表現方法として、また、児童の発想の源にもなるモダンテクニックです。授業中に提案できるように、先生方が経験しておきましょう。

A スパッタリング

網とブラシを用いて、ブラシに付けた絵の具を散らして表現します。

星空の表現で使用したり、型をつくり、ずらしながら色を付けたりと、幅広く生かします。



B ドリッピング・吹き流し

〈ドリッピング〉

絵の具をたっぷり付けた筆を振り下ろし、画面に絵の具を散らせます。

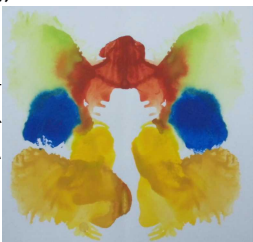
〈吹き流し〉

水分の多い絵の具に、ストローで息を吹きかけます。



C デカルコマニー(合わせ絵)

二つに折った紙の片側に絵の具を付け、再び折ってよく押しつけます。左右対称の図と、独特の模様ができます。対称の部分を生かしたり、模様を切り取って生かしたりします。



D マーブリング(墨流し)

マーブリング彩液や墨汁など、水より軽い液体の色を紙に写し取る技法です。

部品として使える他、2回目、3回目の写しを背景に用いることもできます。



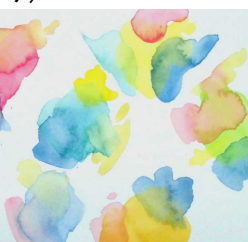
E バチック(はじき)

ロウやクレヨン等でかいた上から、水彩絵の具を付け、はじかせることによって表現します。水彩絵の具の色の上にクレヨンでかき込み、更に上から水彩絵の具ではじかせることも可能。



F ウェット・イン・ウェット(にじみ)

先に付けた色が乾かないうちに次の色を差し込む技法です。色を付ける前に、画面を水で濡らしておくことさらににじみやすくなります。



G スtring(糸引き)(糸目転がし)

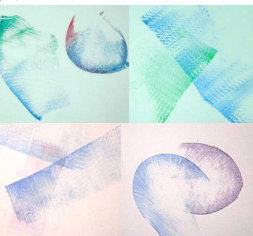
太めの木綿糸に絵の具を付け、上下2枚の画用紙で挟む。

〈糸引き〉

糸を引き抜く。

〈糸目転がし〉

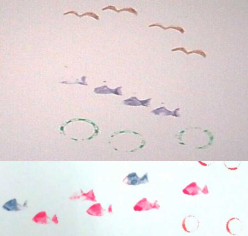
紙の間で糸を転がす。



H スタンピング

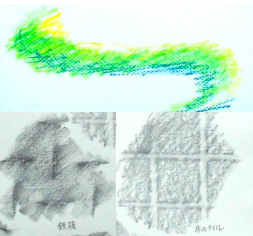
版になるものに絵の具を付け、画用紙に押しつけ、転写して描画する方法。

レオ・レオニの絵本「スイミー」が有名。



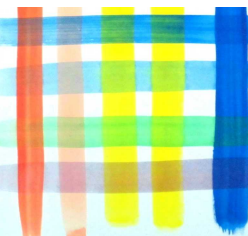
I フロッタージュ(こすりだし)

凹凸の模様がある面に紙を押し当て、鉛筆やクレヨン、パスでこすり、模様を写し取る。できた模様を切り取り、部品として貼り付けるなどして生かす。



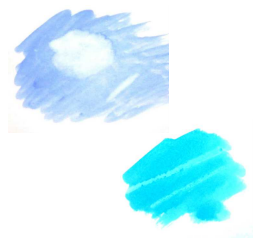
J 重色

水で薄く溶いた色を重ねることによって、重ねた部分に色をつくり出す技法です。透明水彩絵の具の美しさが生きます。



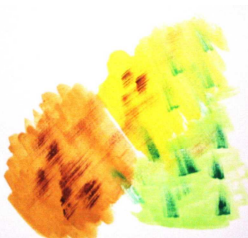
K リフティング(ふきとり)

絵の具が乾く前に、布やティッシュ、綿棒などで拭き取ると紙本来の色が出てくる。雲や波などの自然な表現ができる。



L ドライブブラシ

水分をよく拭き取った筆に、水分少なめの絵の具を取り、筆先をかすらせるようにして表現します。下の色を残すようにすると、深みが出ます。



※ この他、「ビー玉転がし」「スチレンローラー」などがあります。

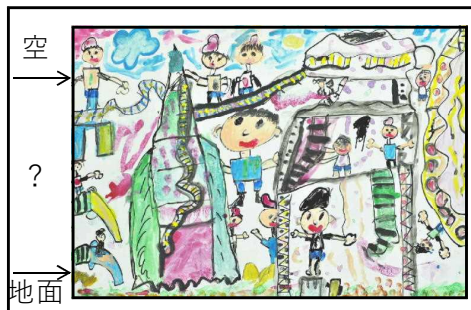


Q① 下絵はよいのに、彩色をどこからすればよいか分からずに、きれいに仕上がらないことがあります。何かコツはありませんか。

A 多くの児童は、画面の主人公になる部分などの、本人が色を付けたいところから色を付け始めます。それが自然な流れですので、「どこから色を付け始めなさい。」といった指示は、意欲を失わせたり、や思考する機会を奪ったりする可能性があります。低学年については、用具の使い方などの特別な指示が必要でなければ、全体への指示は少ない方がよいと考えます。中学年以降で、奥行きや背景を児童が必要としている場合は、「時間の短縮(効率)」という視点で考えさせることもできます。手前のものから彩色すると、後方の背景で再度細かい彩色が必要になりますので、背景や後方から彩色する方が時間が短縮できることに気付かせることができます。

Q② 背景に、白いところが残っていてもいいのですか。

A 低学年の児童には、まだ「空と陸との境目」や「物の向こうにも物がある」といった空間を認識できていませんので、当然、画面上には説明できないスペースが存在します。つまり、「下：地面」と「上：空」と「中間：何でもない空間」の三層構造ができていくことが多くなります。そうすると、「何でもない空間」は画面上の処理ができませんので、当然、色がつけれられません。その部分には、画用紙のものの色がそのまま残ることになります。



昔、「何も塗らないところがないように。」と教わったのは、中学校美術のデザインの授業ででしょうか。私たちの「～べき。」には常に注意が必要です。

Q③ 木版画の下絵をかかせる際に、気を付けることがありますか。

A まずは、しっかりと絵をかかせることが大切です。彫るためには、線がはっきりしている必要があるからです。また、木版画は、基本的には、白と黒で表現されることになりますので、下絵をかく段階から、「彫るところ(白)」と「残すところ(黒)」の明暗のバランスを考えておく必要があります。また、左右が反転しますので、文字、数字には注意させてください。版木に転写した後は、マジック等で、黒く残す線を目立たせると、彫るときに迷わずにすむようです。目を細めて、画面の明暗に注目させ、バランスがよいか確かめさせるのも有効です。

Q④ 同じような色ばかりで彩色してしまう児童がいます。どのような指導をすればよいのでしょうか。また、主調色という言葉も聞いたことがありますが、それと同じなのかが分かりません。

A その児童が、同じような色ばかりで彩色する理由を見付けたいものです。「実は絵の具が切れている。」「パレットに全色を出していない。」「特定の色にこだわりがある。」「色覚に特性がある。」等、理由が分かれば、対応することができます。観察し、聞き取り、寄り添ってください。

また、自分の「思い(主題)」を伝える一つの方法として、主調色を決めて彩色していく(仕上げていく)方法があります。色調を「寒色」「暖色」で分けて彩色したり、「青に近い色」「赤に近い色」「茶に近い色」「緑に近い色」といった基本となる色に近い色を多く用いて彩色することも考えられます。色はそれだけで感情やイメージといった意味をもちますので、もう一工夫したいという児童には紹介してみることもあるでしょう。

20 彩色のポイント(作品を基に)

1 低学年…パスなどでのびのびと、お話をつぶやきながら

低学年の児童は、夢や思い出などを再現する絵です。児童がその思いをつぶやきながら、物語を語るように描画できる状況をつくるのが大切です。

〈指導のポイント〉

画面の構成物がさびしく、児童自身が思いを達成できていないと感じているときは、発想を広げる質問します。

「それからどうなるの。」どんどん想像を膨らませられるように声をかけます。

児童となるべく話をして、何をしているところなのかを引き出します。

握っている手や走っている足など、人や動物などの動きの感じを意識させると、様々なことに気付きます。

画面の中に自分や友達を入れると、お話が広がり、思いが伝わりやすくなることもあります。

背景は、下が地面、上が空、真ん中は何でもない世界(白のまま)の三色構造になることが多いです。

太陽は、児童にとって必要だから描かれています。もちろん描かれていても問題ありません。太陽がなくなると画面構成のバランスが崩れることが多いようです。(本作品には太陽はありません。)

立って描くと、全身で動きながら描くので、ダイナミックな表現になることもあります。

用紙の下に新聞紙を敷くと、はみ出すことを気にせずに描けるようになります。

「他に楽しかったことはないかな。」「一緒に誰がいたのかな。」「これからどんなことが起きるのかな。」「もっと楽しくなるには、どうすればよいかな。」

限られた色だけでなく、いろいろな色で表現できると画面が明るくなり、描く楽しさが増します。

線を引く速さに決まりはありません。ゆっくりとした線にも、勢いのある線にもよさがあります。



図1 小学2年生の作品

2 中学年…かきたいものから順番に奥へ。かきたいものにこだわってかく。

中学年の児童は、中心とその他のものとの関係性に気付いた表現ができます。また、かきたいものにこだわることで、描写が広がります。

〈指導のポイント〉

奥行きの表現を、重なりや大小の違いで表せることに気付くことができます。

画面から線がはみ出すことで世界が広がることに気付くことができます。

中心と周りの様子の関係にも気付くようになります。

描きたいものがはっきりしていると、よく観察し、形の特徴を捉えられるようになります。概念的な表現から変化し始める児童もいます。

描きたいものを伝えるためにくわしくかくことができるようになります。



図2 小学3年生の作品

低学年の発達の段階から、高学年の発達の段階の児童まで、幅広く存在する学年です。どの表現も素晴らしいことをしっかりと説明し、実感させなければ、上手下手の認識が始まってしまいます。

必要に応じて人物をかき込むと、画面の中に物語が生まれます。

細かいところまで観察し、丁寧に輪郭線を描くことができますようになります。

想像を広げ、画面をより楽しく構成できます。

全体の形のゆがみも作者の見える真実です。

本人のこだわりが伝わってくる作品が多くなります。

3 高学年…伝えたい思いを明確に、対象の特徴を発見しながらかく

高学年では、自分が伝えたいことを明らかにして伝えることができるようになります。絵に表す題材にも「心象表現」と「機能表現」の違いが生まれますので、ねらいの違いを意識しながら各題材のよさを生かして指導する必要があります。

〈指導のポイント〉

観察的表現を求める児童が多くなるので、形の特徴を捉えるための造形的な視点を準備しておきます。

思いが伝わる角度、主題の大きさ、配置などを考えて画面構成をすることができますようになります。小さなアイデアスケッチに数多く取り組ませることが効果的です。

風景をかく場合、指で四角をつくり、風景を切り取ることもイメージをつかむためには有効です。

描きたいものを伝えるために、より一層くわしくかくことができますようになります。

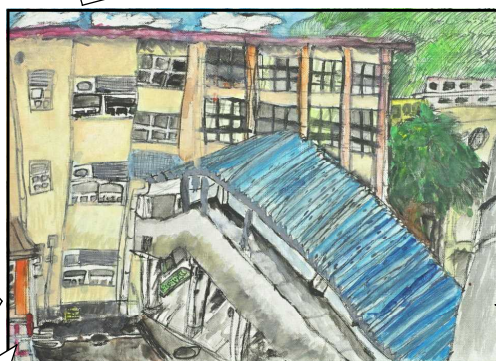


図3 小学6年生の作品

概念的に描くことから、対象を観察することによってしか学べない知的な理解を基にかくようになります。

風景をかく際は、「斜めに見える線」に気付くことができると、自然に、立体感や簡単な遠近感が表現できるようになります。

近景、中景、遠景の違い(大小、詳細さ、線の太さ、色合いなど)を意識させることもできます。

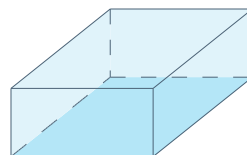
風景をかく場合は、対象と画面をなるべく同じ方向に設置し、視線がずれないようにすることで、対象の概念図化を防ぐことができます。

- 自分なりの世界を表現していくので、アイデアを広げさせます。そのものどおりでなければならないという固定観念から解放する必要があります。
- 見てかく場合は、色々な見方、対象の捉え方を引き出したり、提供したりし、自分のイメージや「思い(主題)」に合う形を探させます。
- 「思い(主題)」に合った形・構図であることを確かめさせます。
- 発達の段階に応じて、定まった自分の「思い(主題)」を文字で記録させておくと、その後の指導が児童主体のものとなります。
- 導入で見つけた〔共通事項〕(造形的な視点)を基に、自分の「思い(主題)」と照らし合わせ、自分のかきたい形や構図を確かめさせ、試行錯誤させます。

コラム 13

〈観察的表現について「算数」から考える〉

観察的表現のための考え方を抵抗なく理解するためには、児童が「立体を平面に表現する等角図法の基本的な認識」や、「比についての基本的な考え方」、「比を用いてももの大きさを捉える見方」などについて理解していることが大切になります。それぞれどの学年の「算数科」で学習するのでしょうか。「立体」について学ぶのは第4学年、「比」について学習するのは高学年です。なお、「等角図」については、中学校技術家庭科の技術分野で学習することになります。つまり、観察的表現について児童が抵抗なく理解し、表現に生かせるようになるのは、概ね高学年以降ということになります。そうすると、たとえ「観察的表現」が描画の基本的な表現技法であったとしても、その考え方を小・低学年の児童に一律に教えることは、中・低学年の児童に「比」を教えることと同じことであり、発達の段階から考えて、無理があると分かります。



21 見る視点と教師の言葉掛け

1 基本的な立場

当然のことですが、児童の絵は、それぞれの児童の独自の世界を反映しています。未完成な大人ととらえてはいけません。

アメリカの美術教育学者であるV・ローエンフェルドは、著書「美術による人間形成」の中で、「**教師は次第に成長していく児童生徒の要求に自己同一化することが、優れた指導をしていくためには絶対に必要なことである。**」としています。自己同一化とは、教師が一人一人の児童の心に寄り添い、児童の「思い(主題)」や意図を理解し、児童の創造活動を助けていくことです。したがって、大人である教師が教師個人がもつ感覚のみでアドバイスをすることは適切ではありません。教師が会話を通して、その児童が表現しようとする思いや意図を理解し、同時に対象を見つめ、児童が表現を通して自己実現できるように指導していくことが大切です。同様に、絵を見る際は、児童の思いや意図を十分に捉えようとして見るのが大切であり、そのために**児童が行った工夫を見付け、そのよさを見付け大いに賞賛することが大切です。**

2 視点と言葉掛けの例

図画工作・美術の時間は、全ての児童の活動をほめて、さらに思考を促すことができる非常に貴重な、教児共に幸せな時間です。下の「作品のよさを見付ける視点と言葉掛けの例」は、視点によっては、他の視点と矛盾する内容もありますが、どれも認めて称賛できるのが図画工作科のよさです。言葉掛けでは、**どこによさを感じたのかを、指さしながら伝える**ことが大切です。

〈作品のよさを見付ける視点と言葉掛けの例〉

よさを見付ける視点	言葉掛けの例
○ 独創的、個性的である、自由がある	この工夫に○○さんらしさを感じますよ。
○ 概念的でない面白さがある	ここは、よく考えたね。特別な感じがするよ。
○ 自信にあふれている	この堂々とした線が素敵だね。
○ 生き生きとしている	この線も形も楽しそうにしているね。
○ 迫力がある、勢いがある	ここが、すごい迫力だね。今にも出てきそうだね。
○ 躍動的に表現されている	ここに動きを感じるね。画面全体が踊っているよ。
○ 驚きがある	感動したのが、ここから伝わってくるよ。
○ 形を工夫して構成している	ここは面白い線ができているね。形の工夫がすごい。
○ こだわりがある	この線のこだわりが、素晴らしい。
○ 空間を表現できている	この重なりで距離が表現できたね。奥深いね。
○ 彩色の方法をよく工夫している	この色の工夫が、とても効果的だね。この色が素敵
○ のびのびしている、たくましい	この部分がダイナミックで、力に満ちているね。
○ 心で感じ取ったことが表現されている	○○な感じが伝わってくる色を出せたね。
○ 明るい色彩	ここは明るくていい色だね。幸せな感じがするよ。
○ 丁寧、誠意、誠実感、慎重さ	ここをがんばったね。丁寧な表現から伝わりますよ。
○ 主題をはっきり捉えて表している	この形、色から主題がちゃんと伝わってくるよ。
○ 授業のねらいを受け止めて工夫している	ここに、今回学んだことを生かしているね。すごい。
○ 努力している、真剣である	ここから、一生懸命にかいたことが伝わってくるよ。
○ 挑戦している	この表現は、挑戦したんだね。なるほど。
○ 内容が豊かである	感じ方が豊かだから、こんなに豊かにかけるんだね。

3 言葉掛けのポイント

- 教師がよいと思うところ、児童の工夫しているところを見付けて、ほめます。
- 「思い(主題)」の実現を造形的な視点、題材の〔共通事項〕で分析的に見て伝えます。
- あえて少し大きめの声でほめます。…周囲の児童はその声からも学んでいます。
- 教師が精一杯ほめることができるように、児童に一生懸命に取り組ませることが大切です。

22 仕上げるポイント

児童は、色を付け終わると「できた。」と完成の喜びを感じます。しかしながら、ここからが大切なのです。仕上げる場面は、自分の「思い(主題)」が作品に達成できているかを、〔共通事項〕(造形的な視点)である造形の要素「形」、「色」、「材質(絵に表す活動では筆づかいや貼り絵等の表現方法など)」、「光」で自分の作品を見つめ、「本当にこれでよいのか。」と自問しながらよりよい表現について考え、試行錯誤を繰り返す重要な時間です。この場面は、「創造的な技能」を発揮させやすい場面であり、資質・能力を自ら大きく育成する場面であり、そうした工夫をしている児童の様子が教師にもよく見える(つまり、評価と指導を一体的に行える)大切な場面なのです。ですから、最初から「仕上げる場面」があることを伝えておきましょう。

1 思い(主題)の達成へ向けて仕上げる

一回、色を付け終わった状態では、自分の「思い(主題)」は達成されていないことが多いので、自分の「思い(主題)」が、作品で達成されているかを、造形的な視点(〔共通事項〕)で確かめることが必要です。低学年の児童には難しい面もあるので、次のような方法を用いると児童自身が発見しやすく、考えやすく、納得して工夫することができるようです。

主人公にしたいものが、主人公になっているかを見付けさせる。

- ① 絵をひっくり返し、一度、画面を見えないようにしてから、「パッ。」と表を出します。
※ 「いないいない、ばあ。」とか、「1, 2の3」といったかけ声を掛けると、次回から、児童が友人とお互いに実施しやすいようです。
- ② 画面を見た瞬間に目に入ってくるものが画面の主人公ですので、自分の「思い(主題)」が達成されているかが判断できます。
※ 作者本人はずっと画面を見ていますので、どれが主人公になっているのか気付かないこともあります。そのときには、周囲の友人を鑑賞者にして指摘してもらうとはっきりします。
- ③ 自分がかきたかったものが主人公になっているか、思いが伝わるかどうかを自分で確かめさせ、どうすれば主人公になるのか、どうすれば思いが伝わるのかを自分で考えさせてください。
T:『〇〇さんは、このことを伝えたいんだね。これが主人公だね。』
C:「あれ、ちがうものが目立ってる!」
T:『どうしたらもっとこれ(主題)が目立つと思う?』
※ ここから改善策へ向けて思考が始まる
その他、『もっとどんな感じにしたい?』、『どうしたらもっとかっこよくなると思う?』、『もっと楽しくするにはどうしたらよいか?』、『どんな色がいいのかな?』など、視点を示し、どうしていけばよいのかを、本人に考えさせてください。思い浮かばないときには、近くの児童を参加させ、アイデアを求め、複数の提案ができるようにしましょう。

2 仕上げる際のポイント

主題となっているものやことを絵の主人公にするためには、また、「思い(主題)」が伝わるようにするには「周辺との違いを生み出すこと」が大切になります。基本的には、次の視点で作品を見つめてみてください。

自分が最もかきたかったこと(主題)を画面の主人公にするために

- ① 主題を、他の部分よりも細かいところまで線でかき込む。色を加える。色を変化させる。
- ② 主題と周辺の構成しているものの色の対比を激しくする(補色の関係を生かす)。
- ③ 主題以外の部分で、強いところをふき取っておさえたり、ぼかしたりする。

これらは、児童でも十分に気付けるものですが、教師もいくつかの方法を提案し、周囲の児童から出されたアイデアも含めて、その中から児童が選択することができると考えられます。

※ 教師の指示で変えたのではなく、自分で決めて変えることが大切です。

3 仕上げる際によく使う技法 (p. 37のモダンテクニックも参照してください)

(1) 重色

- すでに彩色された色の上から透明な(水分を多く含ませた)色を重ねて色をつくります。
- 色を重ねることで、少し違う色をつくったり、色に深みを出したりします。
- 隣り合ったものはお互いの色の照り返しを受けているので、隣り合った色を薄く重ねると、そこに並んで存在している感じが増します。
- 影を表現するのにも有効です。
- 重ねるために何度も筆でこすると下の色が溶けて、混ざってしまい、重色ではなく、混色になることがあるので、下の色が乾燥していることに気をつけます。

(2) もう一度線描する (かき起こす)

- 必要に応じて何度でも線描しても大丈夫です。その際、描画材を工夫する(水性サインペン・色鉛筆・パスなどに変更する)と、変化が生まれ、表現に深まりが出ます。

(3) ぼかす・ふき取る

- 主人公の他に強い色があり、どうしても見てしまうときには、色を薄める必要があります。
- 水を含ませた筆の穂先でくすぐるようにして色を浮かせます。(「コチョコチョ」する。)→ 色が浮いたら絵の具ぞうきんもしくはティッシュペーパーで押さえます。
※ 画用紙・キャンパス紙・水彩紙は**ふき取ると表面が痛みます**。
- せっかく付けた色ですので、完全に拭き取らずに残すことも意識してください。重色やドライブラシをする際の下地の色として活躍することがあります。
- 空の青をふき取ると、白い雲にもなります(リフティング)。

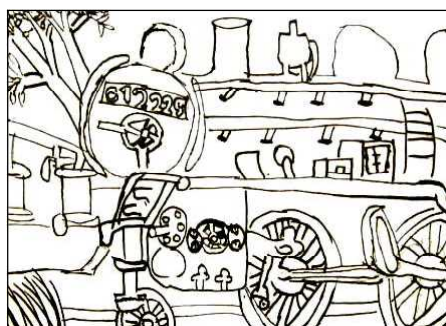
(4) 異なる彩色方法を加える…ドライブラシ、点描、パスなど

- ドライブラシは、水分をよく拭き取った筆(硬い毛がよい)の穂先に、水をあまり含ませていない絵の具をつけ、かすらせるように彩色します。かすれて下地の色が見えるので、深みのある仕上がりになります。白を混ぜて不透明色にすると、少々水分が含まれていても可能です。
- 点を重ねることで色をつけていく方法(点描)もあります。
- 絵の具の上からクレヨン・パスで彩色する方法もあります。

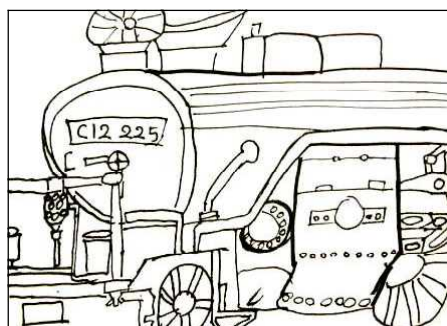
コラム 14

〈線をかき込むことの効果について〉

次のA、B二つの絵は、5年生がかいたものです。まずは、しばらくご覧ください。



A



B

どちらも素晴らしい作品です。迷いのない勢いのある線から、絵をかくのが好きなことが伝わってきます。それでは質問です。決して優劣を付けるわけではありませんが、「どちらの作品の方を長く時間をかけてご覧になりましたか。」

この、「どちらを長く時間をかけて見るか。」ということを各種研修会で話題にすると、「作品A」を選ぶ方が多いのです。何が違うのでしょうか…。いくつか要因があると思いますが、大きな違いは、かき込みの量(気付きの量)ではないかと考えます。見る側は、線に沿って作品を見るので、それだけ時間がかかるのかもしれませんが。そして時間をかけて見た分だけ、作者のその作品へのこだわりを理解できるということになります。仕上げの際に、様々な線描材で線を加筆していく方法も主人公を際立たせるのに効果的です。

〈仕上げる場面での指導例〉

いったん裏返し、「いないいない…ばあ。」で、パッと見た後に改善策を一緒に考えます。



T:『何か問題があるかな?』

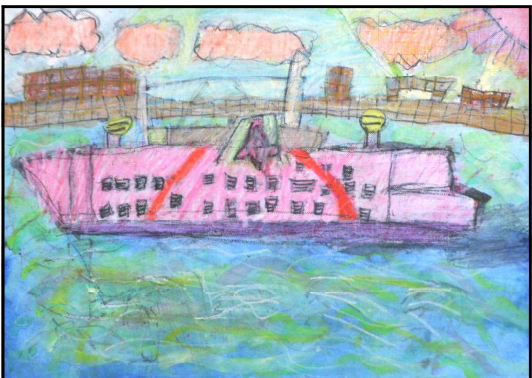
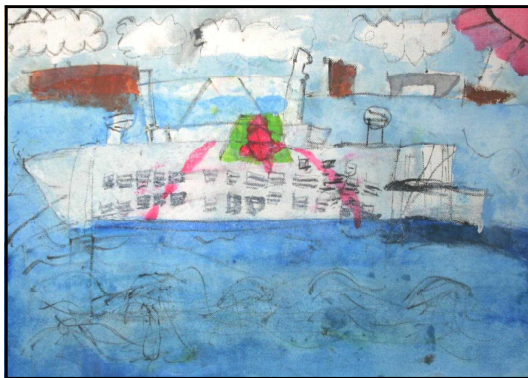
C:『一番かきたかった入口のところが一番に見えないんです。赤い屋根が目立ちすぎて。せっかくかいた線が青で見えなくなっているし、なんか木だけがよく見えます。』

T:『どうしたら、入口が目立ってくるかな?』

C:『線をもう一度かいてみるといいかも。』

T:『じゃあ、パスや、違うペンを使ってみるといいかもね。屋根はどうする?』

C:『屋根の色を拭き取って、その上に違う色のパスで重ねて、色を変えてみます…。』



T:『ぱっと見て気になるところは?』

C:『海にかいた波の線が気になります。それと太陽がすごく目立っていて、メインの船が目立ちません。それから、向こうの建物がなんかおかしいです。海の汚れ（船の右側下部分）も気になります。』

T:『海の線はどうしたらいいかな?』

C:『違う色を上から塗って目立たなくしてみようかな。』

T:『何色を塗るかな。海の色って何色だったけ。青だけだったかな?』

C:『いろいろな色がありました。』

T:『じゃあいろいろな色をつけてみようか。→何色をつける?』

C:『緑、紫…。』

T:『試してみようね。太陽はどうする。どうして目立っているのかな?』

C:『一つだけ赤いから目立っているんだと思います。…うすくしようかな。』

T:『それもいいね。それから、他の所にも赤を使ってみてもいいかもね。』

※ 教師は数カ所、一部に赤を入れることを想定してアドバイスをしましたが、児童は全面に赤色を入れると理解しました。本人は「夕方の絵だ。」と作品の出来映えに大変満足していましたが、全面的に赤が入った結果、元来の船や雲の白の美しさが消えてしまったかも知れません。…多くの提案から本人が選べるようにしたいものです。

23 失敗を生かすポイント

1 リカバリー(復活)する

「失敗した。」とがっかりしている児童に、ぜひ画面を復活させ、「失敗を基にして更によくなった。」
「工夫すれば、なんとかなるんだ。」という実感を味わわせたいものです。

水彩絵の具は、水を媒体とするため用具を取り扱うことが容易な反面、画面上の修正には、知識や技術が必要になります。教師が実際に表現したり試したりしてすることで、指導や助言に幅ができ、児童の選択肢も増えることになるので、ぜひ教材研究を深めてください。

(1) 失敗したと感ずる傾向(その原因)と対策(リカバリー)方法

ア 同じ色をべったりと広く付けている → ふき取り+色を重ねる		
原因	A : パレットに数色しか出ていないので色幅が小さい。	対策
	B : 混色方法を失敗して、求める色を作れていない。大量にできた絵の具を諦めて使っている。	
		A : 少量ずつパレットに全色出しておく。 B : ①明るい色+②暗い色という混色の順番を教える。 B : 問題の色を拭き取るか、違う色を重ねる。 B : できた色の一部を別の枠(部屋)に移して、改めて色をつくる。

イ 画面が濁った色になっている。暗くなっている。 → ふき取り+色を重ねる		
原因	A : パレットか筆洗の水が汚れている場合が多い。	対策
	B : 屋外で色を付けると色の見え方が変わり、彩色が暗く鈍くなる。	
		A : 筆洗の使い方を確かめる。 A : パレットの混ぜる部屋をふき取らせる。 A : 絵の具に白を混ぜ不透明色にし、水分を少なくしてどろどろ絵の具で重ねる。(ドライブラシ) A : クレヨン、パスで線描、彩色して強調する。 A : 暗さを改善していくのは、明るい色のクレヨン、パスが有効。 B : 室内で(飾るところを想定して)仕上げる。

ウ 原色が強い → ふき取り(色を残して)		
原因	A : パレットの絵の具を出す部屋から直接付けている。	対策
	B : 茶色・緑色は強く発色する傾向にある。	
		A : 一度必ず広い部屋に出して、10円玉くらいの大きさに広げ、水の含ませ具合を試してから付ける。 B : 児童に気付かせて、どうするか考えさせる。 ふき取り、パスで上塗り、白系の絵の具で重ねて彩色してもよい。

エ 塗り絵のようにきっちりと塗り分けられている → 重色、混色		
原因	A : 一回色を付けたらそれが完成であると思っている。 塗り分ける経験しかない。 「これは○色だから全て○色。」と、概念的に考えている。	対策
		A : 色を重ねていくことで、色の深みや自分だけの色が出せること、工夫した色合いの方が、作品を「思い(主題)」に近付けられることに気付かせる。 A : 実際に物を見せて、同じ色で塗られたものであっても、周囲の色が映り込み、異なる色があることに気付かせる。 A : 上から異なる色を重ねる。(重色) A : 基の色を残しながら部分をふき取る。 A : 彩色された色の上でにじませたり、混色したりする。(にじみ) A : 他の描画材(パス等)でかき足していく。

カ ふき取り又は塗り重ねすぎて線描が薄くなったり、見えなくなったりした → かき起こし			
原因	A： 線描が見えなくなった。	対策	A： 何らかの方法でかき起こす。
			A： ふき取り，色を薄くする方法もある。
			A： 他の描画材で線描してみる挑戦をする。

キ 中心となるものが見えない作品 → 中心を見えるようにする。			
原因	A： 中心より周りが強くなっている	対策	A： 周りの色を薄めたり，中心を周りの色と対比の大きい色にしたりする。
			A： 中心を細かいところまでかき込む。
			A： 筆づかいを変える。(点描) A： 異なる描画材を用いてかき込む。

ク 破れてしまった → 裏側から補修する。			
原因	A： 乾く前に強くこすってしまい，穴が開いた。 B： 破れてしまった。	対策	A： 穴が開いた場合は，裏側から同じ用紙を水糊で貼り付ける。
			A： 画面の上から，部品となるものを貼り付けて，画面になじませる。
			B： 裏からテープや用紙の短冊を貼り，補修する。表から破れた部分をよく押しつけ，なじませる。

コラム 16

〈失敗することが許せない児童が増えていませんか〉

図画工作科では，偶然の結果として思いがけないものが生まれることが多々あります。児童が失敗したと感じていても，別の視点から捉え直すことによって新しい発想や構想が生まれ，最初に考えたことよりも気に入った発想や構想になることもあります。

表したいことを思ったように表せず，意欲の低下した児童には，たとえ，思ったようにできていなくても，見方を変えると新しい発見があることを伝え，励まし，実感させることが重要です。また，児童が失敗だと思っている箇所を改善する材料や用具，方法を教師が知っておくことで，児童の思考も変わりますので，教材研究の中で試作することは大切なことです。「失敗した。」で終わらせることはせずに，逆に「失敗」をチャンスと捉え，失敗を生かし，表現を充実させることで成功に変えられることを児童に経験させたいものです。

このような失敗を成功に変えた経験は，「どんなことでも成功につながるから，諦めずにがんばろう。」といった認識をもたらししていくので，「学びに向かう力，人間性等」を涵養していく点でも大切にしたいことですし，それはすなわち，将来，児童が世界を拓いていく時にも必ず生きていくことになります。

「失敗にも意味がある。」「失敗しても大丈夫なんだ。」そんなことを，経験を通して教えたいものです。そして，こういったことを「確かにそうだ。」と実感できることが，図画工作科の素晴らしさの一つでもあるのです。



Q① 児童がアドバイスを求めてきたときに、的確に助言する自信がありません。どうしたら的確な助言をすることができますか。

A 助言は、出来映えのよい絵をかかせるための助言ではありません。児童の「思い(主題)」を実現させるための、資質・能力を育成するための助言です。考えられる助言は次のようになります。

まず、**児童がどんな「思い(主題)」をもって表現に取り組んでいるのかを理解**することが大切です。児童は、自分の「思い(主題)」を忘れることもあります。変わっていくこともあります。その時々、児童がどんな「思い(主題)」を持っているのかを確認することも大きな助言です。

次に、**児童が今、どんなことに悩みをもっているのかを理解**します。児童自身が何に困っているのか曖昧なこともありますので、一緒に作品を見つめ、課題を見付けてください。見付ける方法は、児童自身の「思い(主題)」と、それが実現できているかを確かめるための「形、色、材質、光」といった造形的な視点です。

そして、課題が見つかったら、すぐに**答えを示すのではなく、答えに向かう方向性を**、一つではなく、**複数出す**必要があります。方向性が浮かばないときには、他の児童にもアイデアを出してもらいましょう。次の試行錯誤へのきっかけをつくるのが大切なのです。教師が普段思っているような「こうしたらいいよ。」という類の助言は、実は、児童が思考する機会を奪ってしまうので、発しないように気を付けた方がよいのです。

最後に重要なのは、児童の才能ではなく、**思考と努力を称賛すること**です。児童の表現への意欲を高め、資質・能力を育成する最大の助言がここに 있습니다。

Q② 2・3時間続きの図工の時間をすると、途中で集中力が切れ、他の児童の邪魔をする児童がいます。時間を区切って活動していますが、どのように指導すればよいでしょうか。

A 児童には、本時のゴールが見通せるようにしましょう。また、授業の最初に高まった児童の意欲は、2時間の内には自然と低下していきます。途中で新しい技法を紹介したり、友達の表現を見に行くちょっとした鑑賞の時間を設定して、刺激を受けさせたりすることで、意欲を高める手立てを講じてください。さらに、「思い(主題)」を表現することが大切なのだということを実感できるようなショート題材で経験を積み上げ、表現への意識を高めておくことが大切だと考えます。

Q③ 本人が満足した絵にアドバイスをするのが難しいです。「こうしたらもっとよくなるよ。」とめあてを確認しながら伝えていますが「僕の絵は下手だから…」と言われたことがあります。どのように指導すればよいでしょうか。

A 本人が満足してしまうと、それ以上はなかなか難しいです。最初から「仕上げる場面」を設定し、「思い(主題)」を実現するために表現するという意識を高めておき、「思い(主題)」を実現するためには、どうすればいいかな。」と、「思い(主題)」と照らし合わせて助言できるようにしましょう。

Q④ 一つの題材で作品を仕上げるのにかかる時間の個人差がとても大きいです。早い児童や時間のかかる児童へ、どのように声掛けや支援を行えばよいでしょうか。

A 「主体的に学習に取り組む態度」の一つの側面に「活動を調整する側面」があります。全員が題材全体の見通しをもてるようなワークシートや、その時間のゴールを示し、終了できるような手立てを講じます。それでも早く終了した児童には、同内容のショート題材に取り組ませるようにし、思考力を高めさせてください。例えば、「早く終わった人は読書タイムにします。」という設定は、「早く終わって楽をしたい。」という意識を生じさせ、せっかくの表現活動がいい加減なものになりますので、適切ではないでしょう。

24 鑑賞のポイント

鑑賞の活動は、見る事が中心となる活動と、表現活動の中で行う活動の2種類があります。ここでは、表現活動の中で行う鑑賞活動について説明します。

1 参考作品の鑑賞

絵に表す活動においては、これまでに述べてきましたように、題材の導入場面で、参考作品の鑑賞をすることに大きな価値があります。題材で理解させたい〔共通事項〕を視点として読み取ることができるような作品を選ぶことになります。(p.12を参照)

2 中間鑑賞

終末の鑑賞では、既にお互いの作品は完成しているので、互いの作品のよさを見付ける活動が中心となります。お互いに意見を交流し、見方や感じ方を広げ、深め、表現する中で実感できるよさがあるのは、中間鑑賞です。表現活動の中で必要に応じて行うわけですので、長い時間をかけるのは、児童の表現への意欲を妨げてしまいます。短い時間で、小グループで効果的に実施できる工夫が必要です。実施方法としては、次のような方法が考えられます。

(1) 仕上げる場面でのグループ鑑賞 (p.43のワークシートを参照)

ほぼ1回目の彩色が終了し、これからどうやって仕上げるか考える場面の設定です。前述の「いないいない、ばあ。」による確認もこの時期の鑑賞です。自分の「思い(主題)」を実現するためにどのような工夫をしてきたのか、今後どうしていくつもりなのかを説明し、今後の仕上げについてアドバイスを交流します。アドバイスを取り入れるかどうかを決めるのは作者次第です。

(2) アイデアスケッチ後のグループ鑑賞

線描する前ですので、最もアドバイスが効果的な場面になります。作者も、友達からのアドバイスを受けて線描には入れるので、自信をもって表現できます。

(3) 毎時間の「ちょっと鑑賞タイム」

表現活動の途中で、列やグループなど、人数を限定して他の列やグループの表現の様子を見に行きます。作者との意見交流もできます。ローテーションを組んで全員が鑑賞します。刺激を受けたり、進捗の確認をしたりと効果が大きい鑑賞になります。



2 終末の相互鑑賞

作品が完成しているので、基本的によさを伝え合う鑑賞となります。

(1) 書き込み型の相互鑑賞 (p.43のワークシートを参照)

- 作品のタイトル、作者名の他に、伝えなかった思い(主題)や、それを達成するためにどのような工夫をしたのかを見る側が分かるように書いたワークシートと作品を机の上に置きます。
- 児童は、〔共通事項〕を基に作品からよさ・工夫したところを見付け、ワークシートに書き込みます。コメントを書いた本人の名前も書きます。鑑賞の評価に生かすことができます。
- 書き込み型の相互鑑賞では相互理解が深まり、学級内の人間関係の向上にもつながります。
- 教師はよき鑑賞者のモデルとして、鑑賞に参加します。教師の〔共通事項〕を視点としたコメントは、児童に造形的な視点を育みます。

(2) 掲示して相互鑑賞

- 作品にはかいた児童の思いや工夫したところが伝わる作品票をつけます。
- 付箋やメッセージカードを使って、相互に意見交流ができるようにします。
- 全ての作品の作品票やワークシートには、教師からの「よさを称賛するコメント」を書き込みましょう。



〈留意すること〉 「上手」「下手」の概念を崩す

世の中のどれだけ多くの人が「下手」という言葉に傷ついてきたでしょう。見栄えのよい作品もよいですが、「思いを伝えるために工夫をした作品が素晴らしい。」という考えを育てたいものです。また、絵をどのように見て、どのように伝えるのか、造形的な視点と、そこで発する言葉も教える必要があると考えます。鑑賞アドバイスシート(p.44 コラム17)」を参照してください。

中間鑑賞ワークシート

名前（ ） 記入例

【タイトル】	クジラ型メッセージボード（仮）
【テーマ】	○ 大好きなクジラの形をしたメッセージボードで、見ると楽しい感じにしたい。
【現在、工夫していること】	○ クジラの形を工夫して、文字が書ける部分を大きくするようにしている。 ○ 楽しい感じになるように、おもしろい形の波を工夫している。
【今後の見通し】	○ ひもをかけるところを考えていなかったで、バランスがとれるところに穴を開けたい。
【友達や先生からのアドバイスを受けて】	○ □□さんから、「クジラの尾ひれが見えらるともおもしろいかも。」というアイデアをもらったので、尾ひれがくると見えるように形を工夫したい。 ※ □□さんが入るように指導する。（□□さんの評価情報となる。）

MEMO

相互鑑賞ワークシート

（ ）年（ ）組 名前（ ） 記入例

1 作品名	くじらからのメッセージ
2 工夫したところ・がんばったところ	○ 文字がたくさん書けるように、くじらのおなかの部分が大きくした。また、クジラの尾ひれがくるとすることで、クジラが楽しく泳いでいるようにした。目も笑っているようにした。 ○ 楽しい感じになるように、波の形を飛び出すようにした。
3 鑑賞コーナー（友達から一言）	友達作品のいいところを見つけ、その理由まで書きましょう。自分の名前も書きましょう。 例「きれいだね。」→「○○の色が◇◇のようで、とてもきれいだね。」 「かっこいいね。」→「□□の形が☆みたいでかっこいいね。」
4 鑑賞を終えて	友達のコメントを読んで、思ったことを書きましょう。 (書ききれなくなったら裏へ)

クジラのおなかが大き く出ていて、文字をたく さん書けそうだと思いま した。□より	波の形が大き く動いていて、何か が起きそうな気が します。△より	クジラの表情がとて もいいですね。☆より
波の色を白と青を交互 にぬっているのが、いい なと思いました。どこか でこのアイデアを使って みたいです。◇より	クジラのかぶっている 帽子が赤色なのでよく目 立っていて、タイトルが はっきり見えてます。す ごい工夫だと思います。 ▽より	クジラがとても 楽しそうなので、 メッセージも楽し い言葉で書きた くなると思います。 ※より

〈鑑賞する場面での工夫「鑑賞アドバイスシート」〉

鑑賞の場面で、何も指導しなければ、「いいね。」とか「かっこいい。」で終わってしまいます。どこが良かったのかを造形的な視点で見つめさせ、説明させることが大切です。その際、造形的な見方・感じ方と同時に伝える言葉についても指導したいものです。

下は実際に5年生の授業で使った鑑賞アドバイスシートです。造形の要素である「色」「形」「材質(表現の工夫)」と、「作者の『思い(主題)』」の表出(イメージ)を視点に、どんな言葉で伝えていけばよいのかということをもとめて例示しました。示した授業の時は、児童の言葉は模倣したものが多かったのですが、回を重ねるごとに、自分なりの言葉が増えていきました。また、その鑑賞での教師の言葉も非常に重要だと感じています。児童が鑑賞で発する言葉の参考となるように声を掛けたり、コメントを書いたりしてください。

図画工作科鑑賞アドバイスシート

「かっこいい」・「すごい」・「きれい」を、
さらに詳しく伝えるために…

こんな言葉で伝えと、見る側の気持ちがより一層^{いっそう}、伝わりますね。



色

カラフルだね(色がたくさんあるね)。きれいな色だね。やさしい色だね。さわやかな色だね。色の強弱があってかっこいい。強い色だね。すぐ目に入る(目立つ)色だね。まるで〇〇のような色だね。この色、とても気に入りました。大好きな色です。色合い(色の組み合わせ)がいいね。ここの〇色がとてもいいと思う。全体がいい雰囲気の色になっていますね。

形

〇〇のような形だね。ダイナミックだね。すごく高いね。すごく低いね。細かいところまでつくっているね。バランスがいいね。ねじれているね。広がっているね。どうして立っているのか分からないなあ。このでこぼこがいいね。〇〇している形がいいなあ。

発想・表現方法の工夫(材質)

〇〇がとてもいい感じをつくっているね。この形をつくるとは、アイデアがいいね。キラキラしているね。〇〇をうまく利用してつくっているね。こんなことをする発想がすごい。

「作者の思い」に目を向けて

＜「色」・「形」・「発想・表現の工夫(材質)」をもとにして＞

こんな所から、こんな思いが分かります。〇〇な感じにしたかったんだね。〇〇な感じに見えるよ。〇〇が好きだからこの形(色)にしたんだね。なるほど。

その他

心に残ります。リアルだね。行ってみたいです。かざってみたいです。これ欲しいです。〇〇にビックリした。タイトルがすごい。〇〇がきれい。さすがです。

**Q① 鑑賞の指導での声の掛け方を教えてください。**

A 鑑賞は、作品に対する知識や、見方を教わる活動ではなく、作品を見ることを通して、思考することを大切にする活動です。アメリカで始まり、現在、美術鑑賞の主流になりつつある「VTS: Visual Thinking Strategies」の対話による鑑賞が参考になります。教師の代表的な問いかけは、児童が作品を見て思ったこと、感じたことを聞いた上で、その根拠を問う「どこからそう思ったの。」と、作品をじっくりと見つめさせる「作品の中で何が起きているの。」といった問いです。「形、色、材質、光、表現方法」などの造形的な視点で語らせてください。

Q② 鑑賞では、具体的に何をポイントに見させるとよいのですか。また、見方・感じ方が、児童一人一人それぞれ違うので、どのように評価していけばよいか難しいです。どのようなことが書けていたら◎や○などの評価になりますか。

A 鑑賞の活動は、児童が作品等を見て、思ったことや感じたことについて、どこからそう思ったのかを、「形や色、材質、光」といった造形的な視点で分析し、表現させ、交流させます。これは、表現の中での鑑賞についても、独立した身近な作品の鑑賞についても基本的に同じです。自分の感じたことや思ったことが始まりになりますので、児童それぞれの答えがあります。つまり、一つの決まった見方・感じ方をさせることが目的ではありません。鑑賞で育成するの力は、「自分なりの見方・感じ方を発揮すること。」と、「見方・感じ方を広げ、深めること。」です。一人一人が異なる見方・感じ方ができているのであれば、とても喜ばしいことです。また、一人一人の見方・感じ方が異なっているからこそ、意見交流を通してお互いの見方・感じ方を広げたり、深めたりすることができます。評価については、学習指導要領解説図画工作編から目標を設定し、評価規準を定めてください（p.47を参考）。評価規準の具体化によりますが、概して読み取れていたら○、驚くべき読み取り、広がりや深まり（えええ～のA）をしていたら◎になります。

Q③ 鑑賞の指導で、友達作品を見て回り、コメントを書く活動をしています。他にどのような鑑賞の指導ができるのか知りたいです。

A 鑑賞は、自分が作品を見て、思ったことや感じたことを、造形的な視点で分析して言葉にし、意見交流を行うことが大切になりますので、その意見交流の方法を工夫してください。例えば、一つの作品について、まず自分の考えを持ち、グループで意見交流し、互いの考えの違いを楽しみながら見方・感じ方を広げたり、互いの考えが同じことを楽しみ、どうしてそう思うのかを深めたりする方法があります。また、作家の作品を鑑賞する場合などは、自分が作家になりきり、表現したい「思い(主題)」について、ここを工夫して表現したと発表するような「なりきり鑑賞」や、いくつかのアートカードの中から自分の好きな作品を選び、その理由について語る鑑賞などもあります。ぜひ様々な方法を工夫してみてください。

Q④ 作家と作品をどのように選び、説明、話をすればよいでしょうか。

A 作家と作品については、児童の作品だったり、児童が親しみやすい作品がよいです。学習指導要領解説を御覧ください。大切にするのは、児童がその作品を通して思考し、意見を交流して見方・感じ方を広げたり、深めたりすることですので、作家や作品について解説することは、児童がどうしても知りたいと求めたときに後から付け加えるものになります。作品に至る作家の背景や当時の社会状況、表現の流派などは、中学校で扱いますので、児童には、見て思考する楽しさ、見付けた喜びなどを存分に味わわせてください。

25 評価のポイント

1 評価に対する基本的な考え方（指導と評価の一体化）

児童生徒一人一人の「思い(主題)」を共感的に捉え、児童生徒が発想を思いのままに広げ、材料を扱い、手を働かせて操作する中で試行錯誤しながら表現していけるよう、**児童生徒の表現過程を確認（評価）しつつ、自らの指導を振り返り、指導・支援していく姿勢が大切**です。

また、学習評価は、「児童生徒にこういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、

- ① 児童生徒の学習改善（児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにすること）につながるものにしていくこと。
- ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと。
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと。

とされています。（『指導と評価の一体化』のための評価例」2020 国立教育政策研究所）

2 評価の流れ

- ア 学習指導要領解説から、題材における資質・能力（観点別学習状況評価の観点）と、A表現、B鑑賞の内容の関係を確かめる。
- イ 学習指導要領から「**学年ごとの評価規準**」，「**内容のまとまりごとの評価規準**」を作成する。
- ウ 学習指導要領解説，題材の目標から「**題材の評価規準**」を導き出す。
- エ 「**おおむね満足できる**」と判断できる状況「B評価」を設定する。
- オ 「**努力を要する**」と判断できる状況「C評価」への手立て等を考える。
- カ 評価方法を工夫する。
- キ 観点別学習状況評価を総括する評定，所見への関連を考える。

3 評価観点と評価の趣旨

(1) 知識・技能

ア 知識

- 〔共通事項〕について、自分の感覚や行為を通して理解してるかどうかを捉える側面
- ※ 造形的な視点や本題材の〔共通事項〕を視点として作品等を分析的に見ているか。

イ 技能

- 材料や用具に十分に慣れたり、適切に扱ったりするなどの「材料や用具を扱う」という側面
- ※ 材料や用具を適切に扱っていたか。新しい技法を理解し、取り組めていたか。
- 活動を工夫してつくったり、表し方を工夫して表したりする側面
- ※ 思いを達成するために、どのように工夫をしたか。

(2) 思考・判断・表現

ア 発想・構想の能力

- 造形的な活動や表したいこと(主題)を思いつくなどの発想の側面
- ※ 思いを明確にし、イメージを広げているか。
- どのように活動したり、表したりするかを考える構想の側面
- ※ 思いを達成するために見る角度や登場するもの、構図等を工夫しているか。

イ 鑑賞の能力

- 感じ取ったり考えたりする側面
- ※ 自他の作品のよさや、「思い(主題)」を実現できているかどうかを考えているか。
- 見方や感じ方が広がったり深まったりする側面
- ※ 友達との鑑賞の交流を通して、見方や感じ方を広げたり深めたりできているか。

(3) 主体的に学習に取り組む態度

- 粘り強い取組を行おうとする側面
- ※ 「思い(主題)」の実現へ向けて、主体的に、粘り強く活動に取り組もうとしていたか。
- 自らの学習を調整しようとする側面
- ※ 見通しをもち、自分の表現を仕上げようとしていたか。
- ※ 「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上での評価を行う。
- ※ 感性など、この評価になじまないものは個人内評価を行う。

4 多面的な評価の工夫例…継続的なファイリング（ポートフォリオ）が有効です。

評価規準に沿って情報を収集することが肝要です。成長の状況を総合的に評価するために、総括的な評価、分析的な評価、記述的な評価などの評価方法を工夫します。

次のような多面的な評価を工夫します。

① 題材前後のアンケート調査（実態把握）による評価	いつ、何で、どのように評価するのかを計画しておく。
② 自己評価カード（見直し振り返りワークシート、学習カード）からの評価	
③ 相互鑑賞ワークシートなどで記入したコメントの記録からの評価	
④ 中間鑑賞での発言や感想文、相互評価、他者からうけたアドバイスの記述からの評価	
⑤ 完成作品から振り返る評価	
⑥ チェック項目を明確にした過程を通した観察に（評価カード）による評価	
⑧ アイデアスケッチ、製作カード、製作メモ、活動過程の写真記録などの諸資料からの評価	
⑨ エピソード記録などの行動観察記録による評価	
⑩ 論述やレポートなどによる評価	
⑪ ペーパーテストなどによる評価（主に中学校）	

5 評価カードの例

学習場面ごとに評価規準を具体化し、授業の中で、できるだけ多面的・多角的に児童生徒の情報を収集し、表情や活動を読み取り、言葉を交わして評価したものを、授業終了後に記録することが必要となります。そのためには使いやすく、負担のない評価カードの工夫が必要です。

題材名		せんろのむこうはゆめのくに（小学2年）					総時数 全2時間					
評価規準	〈知識・技能〉 知：自分の感覚や行為を通して、形や色などに気付いている。（発言，ワークシート） 技：描画材や版材を自由に選び，自分なりの表し方を試みながら手や体を思いのままに働かせて表現している。（活動，途中の作品，発言） 〈思考，判断，表現〉 発：想像したことから表したいことを見付け，好きな形や色を選んだり，いろいろな形や色を考えたりしながら，どのように表すか考えている。（活動，発言，ワークシート，作品） 鑑：お互いに表現した夢の国や乗り物のこと，描画材料や版材について話したり，友達の話の聞いたりして楽しく見ている。（活動，発言，ワークシート） 〈主体的に学習に取り組む態度〉 主：楽しく想像したことを絵や版で表す活動に取り組み，つくりだす喜びを味わっている。（活動，発言，ワークシート）											
	番号	氏名	形成的評価				児童の様子，指導の手立て ※ Cの児童への手立てや変化の様子 ※ Aの児童の際だった様子など	総括的评价				
			知	技	思考			主	知	技	思考	
					発	鑑					発	鑑
1		A	A	A		A	体全体を使ってのびのびと表現している。発想が次々と広がっている。	A	A	A	B	A
2		A			A	A	友達の活動のおもしろさを理解し，同じ世界観で想像している。	A	B	B	A	A
3				C			表現が進まなかったので一緒に考えて活動したところ，自ら活動が進み始めた。	B	B	B	B	B

- 児童生徒の資質・能力の発揮の状況、よい点や可能性、成長の状況に目を向ける。
- 主題を達成するために試行錯誤している内容を、主題と関連付けて理解するよう心掛ける。
- 評価を想定していた場面で、評価予定だった資質・能力が発揮されず、別の場面で発揮された場合は、発揮された場面で、その資質・能力を評価するようにします。題材の中の最大値を評価する。
- ※ 授業においては、児童生徒と言葉を交わし、指導することが大切。記録することを目的にしない。

〈留意すること〉 作品を通した評価について

「作品からも評価ができます。」…これは、作品の出来映え、つまり見た目の良し悪し＝「作品主義」の話ではありません。教師が授業中、児童の思いに寄り添い、児童と語り込むことができていれば、教師は作品を見た瞬間に、児童が主題の達成を目指してどのように取り組んでいたのかを想起することができ、評価に生かせるのです。作品も大切な評価資料の一つです。

26 絵に表す活動における学年、内容のまとめりごとの評価規準

この表は、小学校学習指導要領解説【図画工作編】を基に作成した「絵に表す活動」の内容のまとめりにおける学年の評価規準です。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
第1・2学年	- 自分の感覚や行為を通して、形や色などに気付いている。 - 身近で扱いやすい材料や用具に十分慣れるとともに、手や体全体の感覚などを働かせ、表したいことを基に表し方を工夫して表している。	- 形や色などを基に、自分のイメージをもちながら、感じたこと、想像したことから、表したいことを見付け、好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えている。 - 形や色などを基に、自分のイメージをもちながら、自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、感じ取ったり、考えたりし、自分の見方や感じ方を広げている。	つくりだす喜びを味わい、楽しく表現したり、鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。
第3・4学年	- 自分の感覚や行為を通して、形や色などの感じが分かっている。 - 材料や用具を適切に扱うとともに、前学年までの材料や用具についての経験を生かし、手や体全体を十分に働かせ、表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。	- 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもちながら、感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを見付け、表したいことや用途などを考え、形や色、材料などを生かしながら、どのように表すかについて考えている。 - 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもちながら、自分たちの作品や身近な美術作品、製作の過程などの造形的なよさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方について、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げている。	つくりだす喜びを味わい、進んで表現したり、鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。
第5・6学年	- 自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解している。 - 表現方法に応じて、材料や用具を活用するとともに、前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしたり、表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして、表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。	- 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもちながら、感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことから、表したいことを見付けることや、形や色、材料の特徴、構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、どのように主題を表すかについて考えている。 - 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもちながら、自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、生活の中の造形などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり、考えたりし、自分の見方や感じ方を深めている。	つくりだす喜びを味わい、主体的に表現したり、鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。

この評価規準を、各題材の内容に合わせて整え、題材における評価規準を作成します。そして、各時間における評価を具体化し、評価計画を立ててください。


Q① 自分の主観で評価をしているようで自信がありません。これでいいのか不安です。

A 自分の主観だけで評価することへの不安を解消していくためには、二つの方策があります。

一つは、学習指導要領解説図画工作編をもとに、題材の評価規準をつくり、授業場面に具体化することです。これはつまり、その題材を通して、児童に育成すべき資質・能力を明確にしてから授業に入ることに繋がります。このことで、自信をもって評価することができるようになります。

もう一つは、教師の行う評価は、確かに主観にならざるを得ないので、その評価に信頼性と妥当性を付加するために、授業の中で、児童の表現に寄り添い、表現への「思い(主題)」、意図や工夫などについて読み取り、保護者へ丁寧に説明できるだけに関わりをもつことです。また、評価の観点や内容について、近隣の先生方と話題にし、互いに信頼性と妥当性を高めることも大切です。

Q② 児童が、教師の想定した活動を越えたところで発想し、ユニークな表現活動をしました。どのように評価すればよいでしょうか。

A どのように判断するのは、状況によって異なりますが、児童が、教師の想定した題材の範囲を越えて、発想や表現を広げていくことはよくあることです。これは、児童が題材に主体的に取り組む、豊かに発想し、創造力を発揮している証であり、教科の目標から考えても、積極的に認めていきたいことです。そんな時、児童の活動を評価するためには、焦点化された「題材の評価規準」だけではなく、「内容のまとまりごとの評価規準」や「学年の評価の観点」、または「教科の評価の観点」にまで評価の考え方を広げ、その児童の活動を評価する必要があります。また、そうする

Q③ 評価は、スケッチ大会作品の出来映えや作品の仕上がり度などを見ていくようにしていますが、どのように観点を振り分けて評価すればよいかわ迷うことがあります。

A 作品からも評価をすることはできますが、それは、児童の「思い(主題)」に寄り添い、試行錯誤に関わってきたからこそできることです。作品の出来映えだけで評価をすることはできません。上記Q①やp.44の評価について御覧ください。

〈「自らの学習を調整しようとする側面」と指導と評価の一体化について〉

仕上がらないので、規定の時間を越えて児童に造形活動を続けさせた場合、表現する時間だけが延び、終末の相互鑑賞や振り返りの時間が少なくなり、「表現しっぱなし」の状況が生まれ、学習の価値付けができなくなってしまうことがあります。これを打開するには、「題材が適切な時間配分なのか。」「適切な年間計画なのか。」といった視点で、カリキュラム・マネジメントを行う必要があります。

次に考慮したいのが、「主体的に学習に取り組む態度」の中の「自らの学習を調整しようとする側面」です。「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」(国立教育政策研究所)では、「自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。」と指摘されています。つまり、児童が学習を調整できていない場合は、「その原因は何か。」と指導を振り返り、児童が活動の見通しをもてるような題材全体を見通した「活動の流れ」を示したり、「振り返りシート」を改善するなど、指導と評価の一体化を行う必要があるのです。

27 授業チェックシート

使用される際は、題材の特徴に応じて、項目を変更してください。

1 題材との出会い～「思い(主題)」の設定の場面

- (1) 感動的な出会いを・遊び心のある出会いを・必然性のある出会いを
 - ☐ 「かきたい」「つくりたい」と思える題材設定を行った。
 - ☐ 導入に、表現への意欲を引き出す「必然性」や「物語」、「仕掛け」をつくった。
 - ☐ 参考作品の鑑賞を通して造形的な視点や〔共通事項〕に気付かせた。
 - ☐ 参考作品の鑑賞を通して、作者が「思い(主題)」を達成しようと工夫していることに気付かせた。
 - ☐ 「思い(主題)」を大切に（意識して）表現しようという意欲を高めた。
- (2) 発想・構想を広げる
 - ☐ 「思い(主題)」を定め、イメージや発想を広げる機会を設定した。
 - ☐ 題材全体の見通しをもたせることができた。
 - ☐ アイデアスケッチで様々な構図を試させた。
 - ☐ 授業後に評価計画に沿って評価した。

2 表現…試行錯誤…「つくり、つくりかえ、つくる」

- (1) 線描する
 - ☐ 主題が明らかになっているか確かめた。
 - ☐ 児童に、どのような画面構成にするのかを考えさせた。
 - ☐ 自信をもって線描することができていた。
 - ☐ 児童は、支持体である用紙や線描材を選択できた。
- (2) 彩色する
 - ☐ 水彩絵の具の基本的な使い方を確認した。
 - ☐ 彩色の技能について紹介した。
 - ☐ モダンテクニックを生かした表現を提案できた。
 - ☐ 主題が明らかになっているか確かめた。
- (3) 主題の実現を求めて試行錯誤する
 - ☐ 失敗への対応を準備しておいた。
 - ☐ 試行錯誤を奨励した。
- (4) 中間鑑賞
 - ☐ 中間鑑賞で自分の表現の方向性を確かめさせた。
 - ☐ 多様な視点から意見交流をさせることができた。
 - ☐ 中間鑑賞で気付いたこと学んだことを記録させた。
- (4) 仕上げ
 - ☐ 作品を主題を基に見つめ直し、主題の実現に向けて工夫させることができた。
 - ☐ 「工夫した」「できた」「やり遂げた」といった満足感を味わわせることができた。
 - ☐ 授業後に計画に沿って評価した。

3 完成→相互鑑賞

- (1) 相互鑑賞
 - ☐ 相互鑑賞を設定し、造形的な視点を基に意見の交流をさせることができた。
 - ☐ 互いの取組のよさに気付かせることができた。
- (2) 題材全体の振り返り
 - ☐ 題材の最後に振り返りを行い、児童に本題材で学んだことをまとめさせた。
 - ☐ 本題材の最適時数を年問題材計画に記入した。
 - ☐ 授業後に計画に沿って評価した。

〈参考資料③〉読書感想画に取り組む際のポイント

1 本を選ぶポイント

- 未読の本は選べません。時間をかけて予告し、本を選んでおかせましょう(国語の物語文もよい)。
- 「楽しいな」、「おもしろいな」、「ドキドキした」、「感動した」という本を選びます。
 - ・ 強い感動・感情の動きが、表現したい「思い(主題)」になります。
→ 「〇〇の感動をかきたい。」「〇〇が□□しているドキドキした感じをかきたい。」
- 挿絵にどうしても影響を受けることはあります。挿絵をそのまま使うのはなしです。
 - ・ 絵本、キャラクターが明確に決まっているもの、挿絵がたくさんあるものは読書感想画に表すのは難しいかもしれません。

2 発想の段階

(1) イメージマップ(ウェビング)で発想を広げる

- 読書感想画がかきにくい・空白感が漂うのは、かくものを思い付かないからです。
 - … 見たものをかくのであれば、目の前にいくらでも情報がありますが、空想の絵は自分で発想するしかありません。
- イメージマップは拡散的思考です。楽な気持ちで書くことが大切です。「こんなものを書いてみようがないかな…」と思っても、とにかく書いて広げていきます。大きなものから細部まで。視点を変えながら。連想して発想を広げていきます。
- 特に書いて欲しいのは…場所・人・持ち物・動き・表情・色など
 - 教師のアドバイスが必要です。「形」、「色」、「光」は造形的な視点〔共通事項〕です。
- イメージマップで出てきた中からかきたいものを選ぶ
 - … 自分の主題を達成するために必要なものを選んでいきます。
- 描画中に困った場合は、イメージマップに戻ります、→ 構図の修正(空白感を埋める。)

(2) アイデアスケッチ

- アイデアスケッチをしながら、形を試し、構成を組み立てます。
 - アイデアスケッチは思考するための方法です。
質は量の中にある(A.オズボーン)
作家は、(個人差はありますが)一枚の絵を描くために数十枚のアイデアスケッチをします。
- 小さな枠のアイデアスケッチに取り組みます。→ 参考資料①
- 構図を変える視点として
 - 視点の変化。(あっちからとこっちからでは? 上からと下からでは?)
 - 人物の動きの変化。(配置。角度。大きさ。もしくは絵の一部分だけ。)

3 画面構成

- 小さなアイデアスケッチから大きくかき写すので、画面上では小さくなる可能性があります。空がき(指がき)をするなど、注意が必要です。
- アイデアスケッチから大きく変わっても、もちろん構いません。
- 画面にさびしさを感じたら…イメージマップ(ウェビング)を拡充し、画面に入れるものを増やしていきます。
- 動きのある構図をつくりたいときは、斜めの線を意識させます。
 - ※ 斜めの線は、物と物との境界線の中でも、奥に伸びたり、広がったりする線です。
 - ※ アイデアスケッチの構成物を切り取り、画面上で置きながら、構図を試すことも有効です。
- 線がはみ出すことで、画面(世界)が広がります。

4 留意点

- よい参考作品を見せることが大切です。思いを表す工夫、構成の工夫、仕上げ方など、新しく見て学べるものがたくさんあります。(教科書・インターネット上から。)

〈参考資料④〉 児童の発達の段階・実態，表現活動の特徴及び絵を見る視点

次の表は、絵に表す活動に関する児童の発達の段階や表現活動における特徴，教師の活動を見る視点をまとめたものです。授業づくりに生かしてください。

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
発達の段階・実態	形や色などを意識し始め，主観的な表現が拡大し，自由に表現することの喜びを体感する時期である。表現を十分に認め，褒めることが大切である。	描写力が増すとともに対象を見てかくことに興味を示し，ものともとの関係に注意してかくなど，空間に対する意識が芽生える。絵を客観的に見るようになるため，表現への意欲を失うことがないように留意する。	「思い(主題)」や自分らしさを意識したり，奥行きや広がりを考えて，意図的に表現を構想したりできるようになる。また，写実的な傾向が見られ，見たままにかきたいという願いが強くなってくる。
表現活動の特徴	○ 表現の結果にこだわらず，表現活動そのものを楽しむ。 ○ 興味や関心のあるものを大きく表現する。 ○ 画面に，羅列的にばらばらにかいていく場合が多い(図式的表現)。 ○ 対象を概念としてもっている形や色に置き換えて表現する。 ○ 自分の好きな形や色などを使う。 ○ 思い付いたことを，すぐに試そうとする。 ○ 始めに手掛けたことが変わっていく。(表現しながら考え，表現を変え，更に表現したものから考えて付け加えていく。) ○ 経験したことを，画面に説明するように表現する。お話が始まる。 ○ 興味を示したものに集中し，他に対してはあまり関心をもたない。	○ 興味や関心をもつ対象が広がるとともに，一層想像力を働かせ，自分らしさを発揮するようになる。 ○ 表したいことを見付け，表し方を工夫するなど，進んで取り組む姿が見られ，表現内容が豊かになる。 ○ 客観的な表現をするようになり，対象の見方や感じ方，表現の方法が多様になる。 ○ 計画的に表せるようになる。 ○ より楽しいもの，より美しいものにしようとする姿が見られるようになる。 ○ 表現意欲が高まり，工夫することを楽しむとともに，友人との関わりでは，表したいことを自分たちで振り返り，発想の楽しさなどを分かり合うようになる。	○ 個性的な表現が見られる一方で，作品を人に見せるのに慎重になる。 ○ 表現したいことが，見たことから想像したことや伝える必要があることへ広がり，その広げ方や深め方には，その児童らしさが働く。 ○ 観察力，思考力，判断力が増し，ものの見方や考え方も深まる。 ○ 客観的なものを求めていく傾向が強くなり，細かな点まで観察できる。 ○ 表現技術が，一層高まり，多様な表現をすることができる。 ○ 個人差が顕著になる。 ○ 自己の思い描く表現と，実際の自分の表現の違いに対して自己評価し，意欲が低下することもある。
活動を見る視点	○ 思いのままに楽しんでいるか。 ○ 友達の模倣で始めたとしても，その児童の視点で新たに捉えているか。 ○ 画面から，伝えたいことがはっきりと伝わってくるか。 ○ 好きな色で自在にかいている線になっているか。	○ 作者の「思い(主題)」が伝わってくるか。 ○ 自分の捉え方や表し方でかいているか。 ○ 中心と周りのものとの関係を考えてかいているか(重なりや大小関係による奥行きの表現など)。 ○ 「思い(主題)」に合った色や形をつくり出しているか。	○ 「思い(主題)」が明確で，画面構成が工夫されているか。 ○ 奥行きや広がりを感じさせるか。 ○ 伝えたい内容が豊かに表現されているか。 ○ 色の変化を捉えて表現しているか。 ○ 活動への苦手意識は，何に由来しているか。

1 教師自身の課題について

番号	質 問	参照ページ
①	教師自身が、小学生の時から図画工作を苦手としており、指導する立場になってからも苦手意識が強く、経験・技術・知識全てにおいて図画工作科への指導力が不足していると感じています。教師として図工とどう向き合えばよいのでしょうか。	表紙裏 pp.1-2 p.25, p.56
②	上手く例を示すことができないため、インターネットに載っている作品を見せていますが、よいのでしょうか。	p.12, p.16
③	作品をつくる上で、美術的なセンスや思考をもつことができるようになるにはどうしたらよいのでしょうか（児童だけでなく教師自身も）。	p.17, p.25
④	よりよい活動、作品にするために、途中の助言に自信がありません。どのような助言をすればよいのでしょうか。	pp.33-41
⑤	創造意欲をかき立てる言葉掛けや図画工作指導時のほめ方を教えてください。	p.35

2 授業づくり・授業全般について

番号	質 問	参照ページ
①	絵に表す活動の指導で、一斉指導において構図や彩色の指導をどのように進めればよいのでしょうか。	p.7, p.8, p.15
②	スケッチ大会では、題材選びにいつも悩みます。特に高学年にはどのような題材を選ばせたらよいのでしょうか。	p.11, p.16
③	発達段階に応じた絵の指導が難しい。特に低学年の指導では、児童の表現意欲と技術指導やいろいろな表現体験がかみ合わないことがある。児童の意欲を損なわず、いろいろなかき方や見方を育てていくにはどうしたらよいのでしょうか。	pp.8-12 p.16
④	絵をかく題材が少なくなっている中で、どのような指導の工夫が必要ですか。	p.16
⑤	建物をかくときのポイント、人をかくときのポイント、風景をかくときのポイントなどを知りたいです。	pp.23-27
⑥	1年生の児童に大きな生活経験の差がある状況の中で、初めて取り組む児童に対する指導を中心に行ってしまい、やったことがある児童、得意とする児童に対しての関わりが不十分になってしまいます。全体へのよい指導の仕方を知りたいです。	p.9, p.12, p.20
⑦	複式学級ではないですが、人数が少ないため、1・2年生と一緒に授業を行っています。発達の段階の違いによる指導の違いを知りたいです。	p.9, p.12, p.20, p.22
⑧	「造形的な見方・考え方」を働かせている状態は、どういう具体的な場面があるのか教えてください。	p.12, p.36 p.42

3 材料・用具について

番号	質 問	参照ページ
①	様々な用具の使い方について知りたいです。	p.18, p.21 pp.28-34
②	絵をかくときの紙はマニラボール紙がよいのですか。	p.19
③	低学年の線描材はクレヨンその他にはどのようなものがありますか。クレヨンだと、細かいところが線でかけないので、困ってしまう児童がいます。	pp.19-21

4 思いをもつ場面～発想・構想の場面について

番号	質 問	参照ページ
①	絵や立体に表す活動で、製作活動前に示すことや事前指導の必要性（これだけは事前にやっておきたい指導）について教えてください。	pp.8-16
②	児童の興味・関心を引く導入の在り方…こんな作品をつくってみたいという思いを導入で引き出したいと思っていますが、何をかいたりつくったりすればよいのか決めるのに時間をかけ過ぎないようにしたいです。よい方法があれば教えてください。	pp.8-16

番号	質 問	参照ページ
③	自分がかかせたい絵をかかせているような指導になっているのではないかと不安です。児童の思いを引き出す絵画指導について教えてください。	p.8, p.12
④	絵に表す活動に苦手感をもっている児童生徒への具体的な指導方法や言葉掛けの仕方を教えてください。	pp.8-16
⑤	「何をかいたらよいか分からない。」「何をつくったらいいか分からない。」と、発想を広げることやイメージすることが難しい児童への指導はどうすればよいですか。	pp.8-16
⑥	絵や立体に表す指導で、席が近くの児童同士が同じようなモチーフになってしまい、評価に悩むときがあります。どのような指導をするべきでしょうか。	p.16
⑦	図工の時間全体を通して、友達の作品をまねる児童がいます。その児童の感じたことやかきたいことを引き出すにはどうしたらよいでしょうか。	pp.8-16

5 線描する場面について

番号	質 問	参照ページ
①	構図の取り方が上手いかず、似たような絵になってしまいます。よい指導法はありますか。また、発達段階に応じた構図の指導のポイントがありますか。	pp.8-14
②	斜めの線を入れさせるのが難しいと感じています。どうすれば奥行きを表現できますか。	pp.23-26
③	絵に表す活動で、背景をかかせようとする、苦手な児童は空に雲と太陽をかいてしまうことが多いようです。他のものをかけるようなよい指導方法はないでしょうか。	p.26
④	絵が小さくなってしまいう児童、何回も消してかき直す児童が多いと感じています。表したいことを思いっきりのびのびとダイナミックにかかせる指導法や声掛けがあれば教えてください。	pp.20-22 p.26
⑤	絵に表す指導で、鉛筆で下がきをしてからではないとかけない児童への対応の仕方を知りたい。担任の先生によっては、下がきから鉛筆でさせる方もいる。消し跡が残る作品になるのも気になっています。	p.18
⑥	「見本がないとかけない。」と言う児童が多いです。動物や魚をかく活動でも「図鑑を見ないとかけない。」、実際に図鑑を見てかかせると「写真と同じようにかけていない。」と納得しない子もいます。どのように指導したらよいでしょうか。	p.26
⑦	児童のかく人物がマンガやアニメの絵のようになってしまうのですが、どのように考え、指導したらよいでしょうか。	p.22
⑧	自分なりの表し方ができない児童にはどのような指導をすればよいですか。	p.22
⑨	木版画の下絵をかかせる際に気を付けることを教えてください。	p.32

6 さいしき 彩色する場面について

番号	質 問	参照ページ
①	彩色が苦手な児童(特定の色ばかり使う。暗い色が多くなる。)への声掛けや指導法を知りたいです。	p.32
②	色塗りにいつも同じ色(自分の好きな色)でベタ塗りをしてしまう児童に対し、児童の表現の仕方を尊重する方がよいのでしょうか。	p.32
③	スケッチは思い通りにかけたのに、水彩絵の具で色を重ねたり混ぜたりする中で、上手いかず、投げやりになってしまう児童がいます。どのように指導したらよいでしょうか。	pp.28-34
④	絵の具での色つけの仕方(順番やコツ等がありましたら)を知りたいです。	pp.28-34
⑤	絵の具の混色指導について教えてください。	pp.29-30
⑥	低学年の絵の余白部分が気になります。背景に白いところが残っていてもいいのですか。	p.32
⑦	低学年における絵の具の使い方や指導について教えてください。	pp.28-30

7 仕上げる場面について

番号	質 問	参照ページ
①	児童が教師に絵を持ってくる前、また、持ってきたときにどのような指導(声掛け)をすればよいか知りたいです。	pp.35-38
②	なかなか想像を膨らませることができず、すぐに「終わりました。」と言ってくる子がいる。根気強く絵に向かえるような事前の声掛けをどうすればよいのでしょうか。	pp.8-16
③	2・3時間続きの図工の時間をする、途中で集中力が切れ、他の児童の邪魔をする児童がいます。時間を区切って活動していますが、どのように指導すればよいのでしょうか。	pp.8-16, p.41
④	絵をかいている途中で、完成させる前にかきたいものを見いだせなくなる児童がいる。どのような声掛けや指導助言をすればよいのでしょうか。	p8, p41, pp.36-38
⑤	本人が満足した絵にアドバイスをするのが難しいです。「こうしたらもっとよくなるよ。」とめあてを確認しながら伝えていますが「僕の絵は下手だから…」と言われたことがあります。どのように指導すればよいのでしょうか。	p8, p41, pp.35-38
⑥	児童から「こうしたらもっとよくなりますか?」とよく聞かれるが、上手くアドバイスができない。あまり言い過ぎると「先生、これでいいですか?」と聞いてくるようになり、児童の主体性がなくなっていくような気がします。	p8, p41, pp.35-38
⑦	一つの題材で作品を仕上げるのにかかる時間の個人差がとても大きいです。早い児童や時間のかかる児童へ、どのように声掛けや支援を行えばよいのでしょうか。	p.39, p.41 p.49

8 鑑賞する場面について

番号	質 問	参照ページ
①	鑑賞の指導での教師の声の掛け方を教えてください。	p.42, p.45
②	鑑賞の時間に、発表する児童が限定されていたり、発表のパターンが決まっていたりするのですが、よい指導方法はありますか。	p.45
③	鑑賞の見方・感じ方が、児童一人一人それぞれ違うので、どのように評価していけばよいか難しいです。	p.45
④	中学年の児童に鑑賞をさせるときに、具体的に何をポイントに見させるとよいのですか。どんなことが書けていたら◎や○などの評価になりますか。	p.45
⑤	鑑賞の指導で、友達の作品を見て回り、コメントを書く活動をしていますが、他にどのような鑑賞の指導ができるのか知りたいです。	p.45
⑥	作家と作品をどのように選び、説明、話をすればよいのでしょうか。	p.12, p.45

9 評価について

番号	質 問	参照ページ
①	図画工作科の評価の仕方について特に気を付けるべき点を教えてください。	pp.46-49
②	評価について、図画工作科における「学びに向かう力、人間性等」をどのように評価すればよいのでしょうか。	pp.46-49
③	思いをしっかり形にできる子や、上手く形にはできないけれど思いはしっかりと持っている子など様々なので、評価となると難しさを感じます。	pp.46-49
④	評価は、スケッチ大会作品の出来映えや作品の仕上がり度などを見ていくようにしているが、どのように観点を振り分けて評価すればよいか迷うことがあります。	p.46
⑤	評価の仕方、注意点など、図工作品の評価について難しさを感じます。	pp.46-49
⑥	どのような活動を通して、姿や能力をどのように見とればよいのでしょうか。	pp.46-49
⑦	児童の絵の作品において、よい作品というもの主観的になってしまい、本当によい作品を自分たちが見付けられていないのではないかと感じています。出品する際にこういったところを評価すればよいか教えてほしいです。	p.3 pp.46-49
⑧	自分の主観で評価をしているようで自信がありません。これでいいのか不安です。	p.46
⑨	児童が、教師の想定した活動を越えたところで発想し、ユニークな表現活動をしました。どのように評価すればよいのでしょうか。	p.46

〈この苦手感は、どこから生じるのでしょうか〉

「絵をかくことが苦手です。」

「どうも絵をかく才能がないんです。」

図画工作の研修会では、多くの先生方が絵をかくことへの苦手感について話されます。また、「思うようにパッとかけたらいいのになあ。」という声は、研修会以外でもよく聞かれます。そして、そのように話される先生方の多くが図画工作科の授業についても「**指導や助言に自信がない。**」と、不安を感じていらっしゃるようです。

絵をかくことは図画工作科の活動の全てではありませんが、いろいろなものを創り出す基本となる技能であり、アイデアを広げていくときに使う技能でもあり、言語を越えたコミュニケーション手段の一つでもあります。ですから、義務教育を終えるときには、簡単な図に示しながら説明ができたり、かくことを楽しむことができたりしてほしいのですが、現実はそのではなく、圧倒的なほどの苦手感を感じている方が多くいらっしゃることに、これまでの図画工作科・美術科の課題があるように思います。

苦手感についてくわしく質問すると、大きく分けて二つの苦手感に分けられるようです。一つは、「**対象を見たように線で形どること**」であり、もう一つは、「**これまで描いたことがないものを、想起して本物のように描くこと**」です。

図画工作科に関する研修の中で、苦手感をもたれていた先生方が、御自身が思っていた以上に描けることに驚かれることがあります。これは、『子供の頃に獲得できなかった(出会えなかった)ある「造形的な視点」を理解し、その視点で対象を捉え、対象の形を理解し、線で形どることができたことによる』と考えると説明ができます。(詳しくはp.25のコラムを御覧ください。)また、「これまで描いたことがないものを想起して本物のようにかけない」のは、対象となるものについてじっくりと造形的な視点で見たことがないわけですから、造形的な特徴を発見していないだけであり、かけなくて当然なのです。かけないのは、決して才能がないからではなく、視点と経験がないからなのです。

さて、「絵を描くことへの苦手感」とは異なる理由で、「図工の指導が苦手です。」と話される先生方がいらっしゃいます。中には、「実は、図工が嫌いなんです。」という方もいらっしゃいます。お話を伺うと、小学校や中学校で、「かいたものをみんなに笑われた。」とか、「先生に『何、これ。』と言われた。」とか、「先生に手直しをされた。」といった苦しく悲しい体験について話をされる方もいらっしゃいます。全ての表現を認めることを基盤とする本教科において、このようなつらい思い出が残る授業が起こっていたのは非常に残念です。そして、実は、よく似ている体験を、非常に多くの方々がされているということに驚きます。もしかすると、自分の授業も、気付かぬうちに、児童の心に傷を負わせてしまう授業になっているのではないかな…そんな不安も浮かんできます。表現、図画工作科、美術科、芸術科(美術・工芸)の授業に携わっている私たちは、私たちの何気ない一言、一つの行為が、児童に苦しい思いをさせないように、考え方を整え、心を配っていかなければならないと、深く心に刻むべきだと思うのです。

そして、過去に苦しい体験をされた先生方には、「造形的な表現活動は、自分の思いを実現するための活動であること」や、「作品の出来映えではなく、思いを実現させるための試行錯誤の中こそ教科としての価値があること」を、心から理解していただけることと思います。そして、その苦しい思い出があるからこそ、児童に寄り添った、よりよい授業を生み出してくださると思うのです。

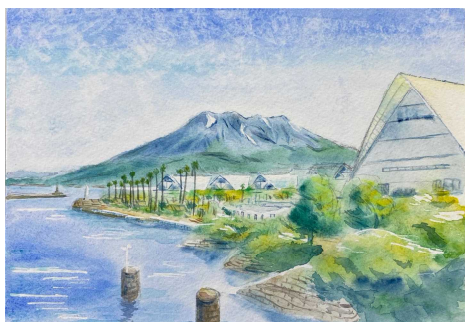
おわりに

予測不可能な未来を生きる子供たちへ向けて、理工系のSTEM教育(Science,Technology,Engineering, Mathematics)に「Art」を加えた「STEAM教育」の必要性が注目されており、教育界における「Art(芸術)」への期待が高まっています。芸術教育界にとっては追い風のように思えますが、旧態依然とした技術指導に偏った指導では、この期待に応えられません。絵に表す活動の指導で考えたとき、出来映えのよさを求める指導や、「児童画はこうあるべきだ。」といった固定概念にとらわれた指導では、未来を切り拓く人材を育成することはできないのです。

世の中に技術革新をもたらしているSTEAM人材のマインドセットには、「型にはまらない」、「ひとまずやってみる」、「失敗して、前進する」という特徴があります。これは、図画工作科、美術科において、児童生徒が「思い(主題)」をもち、多様な視点から自己の表現活動を見つめ、自由な発想を基に意欲的に試行錯誤を繰り返しながら創造性を発揮し、完成へ向けて前進する姿に重なります。学習指導要領が目指す図画工作科、美術科教育の実現がSTEAM教育へ、そして未来で活躍する人材の育成へとつながっています。

本講座資料は、多くの先生方や書籍からの学びによって生まれました。これまで先輩方が積み重ねてこられた鹿児島県の特徴ある美術教育に立脚しながら、学習指導要領の考えを基にしてまとめてあります。本講座資料が先生方の日々の実践に役立ち、児童生徒の資質・能力のよりよい育成につながることを祈念しています。

鹿児島県総合教育センター 教職研修課
研究主事 福森 真一



〈参考・引用文献〉

- 『小学校学習指導要領』文部科学省 2017
- 『小学校学習指導要領解説【図画工作編】』文部科学省 2017
- 『中学校学習指導要領解説【美術編】』文部科学省 2017
- 『高等学校学習指導要領解説【芸術編】』文部科学省 2018
- 『「指導と評価の一体化」のための評価例』文部科学省・国立教育政策研究所 2020
- 『絵で一番大事なことは…』滝口泰正・美術教育を進める会 1993 文化書房博文社
- 『美術教育の名言』滝本正男・島崎清海 1994 黎明書房
- 『画材料理ブック1』南雲治嘉 1996 ターレンスジャパン
- 『画材料理ブック2』南雲治嘉 2005 ターレンスジャパン
- 『美術と知能と感性』アーサー・D・エフランド 2011 日本文教出版
- 『学力を育てる美術教育VTS(Visual Thinking Strategies)』フィリップ・ヤノウィン 2015 淡交社
- 『絵はすぐに上手にならない』成富ミヨリ 2015 彩流社
- 『絵心がない先生のための図工指導の教科書』細見均 2017 明治図書出版
- 『図画工作』日本児童美術研究会 2019 日本文教出版
- 『図画工作』日本造形教育研究会 2019 開隆堂出版
- 『教職員のための研修の手引き』鹿児島県総合教育センター 2020
- 『今こそ図工！私の思いが未来を創るー創造性を育む図画工作科の指導と評価の工夫ー』尾前智子 2020 令和元年度長期研修研究報告書 鹿児島県総合教育センター
- 『児童が思いを意欲的に絵に表す図画工作科授業づくりの在り方ー表したい意欲を高め続ける指導ー』山下泰弘 2021 令和2年度長期研修研究報告書 鹿児島県総合教育センター